資料（一）最近の郷土関係

目次

ふるさとの山々　北川淳一郎
面木山　加藤勝
晩秋の井内峠　三好保徳
川内町の自然　八木繁一
（植物、動物、地質・鉱物、川内町普通植物目録）
家屋防風林の研究　喜多村稔
こんぴら街道　北川淳一郎
平家谷を訪ねて　大内優徳
七月の滑川　八木繁一
唐岬の漱石句碑と子規の「山路の秋」　和田茂樹
瀑布の記　宇都宮円靖
むかしばな誌　田中七三郎
匡王寺入船まつり　土屋光次郎　石谷沢一
佐伯滝松さん　北川淳一郎
松瀬川焼　永田昌章
井内のオツカダのこと　西園寺源透
川上村の物部塚　西園寺源透

ふるさとの山々
――思い出――

北川淳一郎

一、塩ガ森

私が生れて始めて登った山は塩が森（五二五・五米）である。塩が森は旧三内村と川上村と拝志村の三村に跨る村境上の山であるが、一体この山どちらを向いてる山だろうか、どちらが表でどちらが裏なのであろうか。拝志村に背中を向けていることには異論はあるまいが、顔面の方はどうも、残念ながら三内村では無くて川上村である。尤も今では両村とも川内町なのであるから、こんなことを云うべき筋合では無いのだが、人間の習性と云うものはしつこいもので、三内村に生れ三内村に育った私にとっては、矢張り塩ガ森の正面が三内村でないことがいささか物足りない。

私が井内尋常小学校に入学したのはいまから七十年前、明治三十年の四月であった。その頃の学校は庄屋元の酒屋（菅野剛吉さんの家）の下手にあった。生徒は一年生から四年生、それに補習科(一年)を加えても六十人位だったろう。入学間も無い、多分五月の初旬だったと思うが、その日は塩ガ森行きの日だと豫め指定されていたのであろう。風呂敷包みの中に握り飯を包んでそれを背負い、丈夫な新しい草履をはいて学校へ出かけた。学校から川上へ出る村道を、まだその頃は改修前の昔ながらの曲りくねった凸凹道だったので二列には歩けないから、六十人でもかなり長い行列だったろうと思うが、その村道を約半里下って、三島井手の下手に一反何畝歩かの西谷一番の大きな田があるが（この田で、その後運動会をしたことがあった。それは学校の運動場ではいくら六十人でも狭くてやれなかったからである）この田のところから左に小さな山道があって、その道を上って行った。灌木の枝が両側から枝垂（しだれ）かゝっている中のすじかい道を上ったり、両側が畑になっているところを歩いたりした。私、生れて始めての山登りだったが、山に育った私、この塩が森登り、さほど苦しいとは思わなかった。

一時間半ぐらいだったろうか頂上についた。頂上はちよっとした平地で、可成り大きな松の木が十幾本真直にのびていた。私、頂上からの観望については全然記憶が無い。まだ景色を観賞するなどと云う能力が芽生えていなかったのだろう。私だちはただ嬉しさ一杯で、松の木の間を駈け廻って遊んだものだった。

帰りはちがった道をとったのでは無かったかと思う。私は脚が少し疲れたと見えて、補習科の菅野仲次さんが私を背負って下さったことを今でも憶えている。

この塩が森。私、その後、長い長い間登ることが無かった。戦争中に頂上の松が伐られて僅か二、三本になり、またそこに航空燈が設けられた。

私が二度目に塩が森へ登ったのは昭和二十九年の九月二十二日、私の五十八才の時で、第一回の登山から五十一年後である。同行は次女のよし子と正岡昭子さんだった。バスを川内町役場前で降り、表川の左岸を三島神社の前を通り越して四、五丁下った

ところに塩が森に行けるらしい谷道があった。この谷道をしばらく歩いたら、歩道が消えてしまったので、右の斜面にとりついてそこをのぼった。疎林があったり開懇地があったりしたが、兎も角その斜面を登り切ったら、明るい草山に出た。この草山地帯遠くから見てもわかるように、頂上直下のところは可成り険しく、登るのに抵抗を感じた。こんな小さな山でも山は馬鹿にしてはいけない。登りかけてから頂上までに一時間半もかかった。

私、七才の、生れて始めて登った塩が森へ来たので懐かしいような何とも云いようのない感情になった。弁当たべた後、私は残っている松の木のすべての幹に手を触れて廻って見たりした。

一時間の後、私たちは塩が森に続く、塩が森より二百米ばかりも高い番駄（ばんだ）が森への尾根を歩いた。この番駄が森、子供の頃、父から、この山に塙団右衛門直之が昔城を構えたとか、この山に登ったとかで塙団（ばんだん）が森と云うのだと聞いたことがある。塙団右衛門が加藤嘉明の家来だったことは間違いないが、伊予に下ったことがあるかどうか、よし伊予に来ていたことがあったにしても、この川内地方まで散歩に来ると云ったようなことは全然ある筈が無い。父は誰れからそんな話を聞いたのだろう。父亡きいまそれをただすべき術（すべ）が無い。だが、私、一度はその番駄が森に登って見たかったのだ。だが、登って見ると何の変哲も無い山だった。山上は狭くて砦などとても建てられそうになかった。

私たち、頂上からこの山の中央側面を急峻だったが垂直に駈け下って、久尾（くお）の部落に入った。この久尾に戒能氏以前の井内村庄屋（何代続いたかは知らない）の菅野源六さんの家があり、また代々の古い石塔があるとのことであるが、山を下ること一心で、そのどちらえも行って見なかった。この間、大窪町長に訊（き）いたら、その源六さんの門（かど）、いまどこかえ行ってしまつて久尾には居られないとのことである。

久尾から駄場（だば）（自生の灌木林）を横に潜りぬけ、小さな谷を越えて大根木部落へ出た。私の小学校の友人の近藤佐太郎君はこの大根木の人でまだ健在だと聞く。久尾にも同級生の高橋弁三郎君がおった。後に歯科医になり、浄瑠璃がとてもうまかったそうなが先年亡くなった。

大根木部落をしばらく下ると濶葉林に入る。そこから大きな新道がついているのにびっくりした。この新道、庄屋元のバス発着所のちょっと下手へ出た。

元来塩が森と云う山名は山の容（かたち）が一升枡にお塩を盛ったようなので、かく名づけたものである。だから日本全国には相当の数「塩が森」があるにちがいない。松山附近では、ここのほかに国道三十三号線の砥部側から久谷側に出たところに一つある。これも柔かい山だ。あたたかい春の日に若い男女が出かけるのに好適の山だ。私がこんなことを云うのは、曽ての日、山岳部の山本昇がミッションの生徒だったその愛人（精神的な）と一緒にここを歩いて、「まるでカステラの道を歩くようだった」と私たちに語ったことが思い出されたからである。可愛いい生徒だったのに、終戦直後医薬の不足で若かい生命（いのち）をあたら失わしてしまった。（四〇、一二、二三）

永生きはせにゃならんものじや。私ももう七十七。七十七でも

元気なら塩が森ぐらい何でも無いのに、一昨年肺炎をやったのと、数年前から慢性気管支炎の持病で、ちょっとした坂道でもフーフー云っていき切れがするし、胸がくつくて絶対に山に登れなくなってしまった。あんなに山好きだったのに皮肉なことだ。ところが昨年塩が森にテレビ塔が出来、川内町がそれに応呼して山上まで自動車道路をつけた。私、昨日川内町を訪ね用事がすんだ時、神野正策新町長に塩が森へ行って見たいと話したら、是非行って見てくれと云う。昼食をすまして暫く待つ。車の用意が出来た。渡部国恵新助役外二人同行。西谷小学校の向い上手の、私たちの小学校時代からあって、しかも少しも大きくならない櫨の木のところから新道がついている。灌木の林をぬけると久尾の部落へ出る。家が二、三軒、幅の狭い棚田がある。石燈籠もあった。部落が尽きると林地に入る。杉の植林だ。この道、最少限度の道路必要地だけをとって、あとは林のままに残してある。だから、道が林の中の木蔭をくぐって通じているのだ。その中を車が走るのだからとても気持が良い。よく心してつけたものだ。

頂上附近の雑木林も亦良い。原始のまま人間の手が入っていない。喬木林の中には灌木や、つた、かずらが自然のままに生い茂っている。

頂上。**NHK**の建物も不愉快で無い。私たち先づ、川上平原の大観を縦ままにした後、三内村の方へ眼をうつしたが、部落は山蔭になっていて殆んど見えない。後の山々、善神山、梅ケ谷山、大隈山、根無山が見えるのは嬉しかった。石墨以東は雲で駄目、何にも見えなかった。

一通り観望を終えてから、頂上から平坦な道を小半町行く。その道の両側の樹林がすばらしい。小さなシャシャキが密生していたり、クズバカズラが喬木に巻きついているのが嬉しい。簡素な亭（ちん）がある。私だち、ここに腰掛けて、パンやチョコレートを食べジュースを飲んだ。

ゆっくり山を下る。杉林を出はずれると道が二つに分れる。帰りは右の道をとった。部落を出はずれると、道の両側全部蜜柑畑である。蜜柑はたわわに実っていた。蜜柑畑が終って雑木林になったところで、上りの時の道と出会った。

この行、往復二時間。天気良し、自然良し、人良し、すべて皆良し。嬉しいたのしい塩が森行だったことを感謝する。（四三、九、一九）

二、大隈（ぐま）山

大熊山とも書く。尖鋭で標高九〇五米。たがこの後に書く三方ガ森（根無山）の一つの肩である。登山路は則之内の惣川谷部落と板屋の子のどちらからでも行けるが、戒能氏の古屋敷が惣川谷にあったことから見て、惣田谷の方が表道だろうか。山頂は狭くはあるが平地になっているから、（水は無いが）ここに砦程度の建物があったのだろう。いまお宮が祀ってある。

伊予二名集に、「大熊城、戒能備前守通森二十四騎」、伊予古蹟志、「又、大熊城あり、天文中戒能通運伊賀守の居る所なり」、とある。

この大熊城址から西、下、数町のところに、「池ガ平（いけがなる）」と云うところがある。広い台地で、いまは開懇して畑となっている。以

前ここから水瓶の破片と思われるものが出土した。戒能氏の屋敷趾はこの池ガ平から南、下、四、五丁のところにあり「クニ木」と呼ばれている。五反歩以上もある。その附近に門口（もんぐち）、古屋敷、山口屋敷などの地名が残っている。

私が大熊山に登ったのは後にも先にもただ一度、明治三十六年の初秋、安国寺にあった三内高等小学校（この三内高等小学校僅か五年間の生命だった）の三年生の時のことである。

田中（寛太）先生が大熊山へ登って見ようと云われる。私が指定の時間に学校へ行って見ると(その日は日曜日だったと思う)、先生と他の生徒たち、さっき学校を出られたと云う。私とても失望した。どんなにしても先生に追いついて一緒に大熊山へ登らねばならぬ。私には先生と一緒に山へ登ると云うことが天下の一大事だった。先生に追いつかれなかったらどうしよう。私はどんどん駈足でかけ出した。板屋の子の方が学校から近いのだから、先生多分そこから登られたものと思いこんで、板屋の子道をとり可成り嶮しい部落道を、フーフー云いながら駈け上った。すばらしい重労働だったのだが、先生に追いつきたい一心で、心が一杯になっていたので、苦しいこともなんのそのであった。

いくら上っても先生等の影も姿も見えない。私、泣き出しそうになった。でも登った。登って登って頂上の少し手前まで来た時、人のけはいが聞こえた時の安心とよろこび。私は先生と一緒になれたと云う喜びが心に一杯で、山頂からの観望がどんなであるかと云うことなどには全然無関心だった。先生等は惣田谷道の方から登られたのであった。

この大熊山ではいまから三百余年前、天文十三年にすばらしく激しい合戦があった。いまここに「予陽河野家譜」の名文を引いておこう。

この頃当国一和せず、屡々内乱す。久万山大除（よけ）城主大野紀伊守利直兵を起して浮穴郡小手ガ滝城（井内中野の城山のこと）を攻む。城主戒能伊賀守通運矢石を発し挑戦す。雌雄未だ決せざるの処、紀州（紀伊守のこと）かの城の用水を絶たんと謀るの故に戒能保つを得ず、抜落して大熊山城に引籠る。

大野兵を進めてこれを囲む。かの城は高山の頂に構へ、寄手の軍兵は麓の深谷を進むの故に、両方の在るところ己に天地の如し。然る間、城中より射るところの矢は自（おの）から寄手の正中に落ち、寄手より射る矢は茂樹石額に費へて城壁に達し難し。況や嶮崖登るを得ず、人馬徒らに佇立す。これによって兵卒気を屈し軍略己に尽く。然りと雖も退き去ること能はず。なまじいに他の城壁を看（み）、日既に西に入りて月又東より出づ云々。

紀州老臣等を集め異見に及び屡々奇謀を廻らすと雖も敢て彼の計策に堕されず、却って寄手の虚を窺はんと欲するの間、軍士労倦し終に之を抜くを得ず、空しく囲を解きて引退く。城兵勝に乗じて北（にぐ）るを追ふこと甚急なり。寄手度を失ひ、命を失ふの輩其員（かず）を知らず。

黒河対島守通俊大野に与力して寄手の陣にあり。馬を射られ遁去ることを得ず、則之内村に於て自殺す。斉院（さや）の瀬（せ）と云ふ所に墓あり、松樹を植えて験（しるし）となす。里俗伝へ云ふ「黒河松」と。

大野は危難を避け久万山に引取り訖（おわん）ぬ。通俊の嫡子備後守通

堯、父夭亡の後、しきりに会稽の存念を挾み重ねて大野に相通じ大熊城を攻むと雖も浮穴郡棚居の城主平岡大和守房実、久米郡岩伽藍城主和田三河守通興等戒能を援助するにより遂に素意を得ず、鬱憤頻りに心腑を悩す云々。

三、三方ガ森（根無山）

私の家の水場は「根無山」と「八の山」との間を流れて来る根無川から分水した井手だった。家からは遠いし、それに冬はよく水が凍るので母は炊事に難儀をした。だが、難儀なとは一度も云ったことが無かった。

私は三方ガ森（三方ガ森と云わずに多く根無山と云っていたが）の根無山について妙な幻覚を持っている。根無山の頂上部は勾配がうんと緩くなっているので、私等の居る低地からはその頂上を見ることが出来ない。そのためだろうと思うが、私はその見ることの出来ない頂上のところに、私たちとは全然別個の部落があるように思えてしょうが無かったのである。そこはとても清浄無垢な別世界で、そこにある家も人も清らかで美しいものばかりであった。あのきれいなところへ行って見たいと、根無山を見上げるたびに私は思ったものである。こうした幻覚はひとり幼年の時ばかりでなく七十余歳になった今でも、ともすれば根無山の頂上にそうした別個の清浄世界が現実に在るように私に幻覚されるのである。

根無山は全山草山である。また、初夏になると毎朝そこの若草を刈って牛のかいばにする。これを「朝草」と云った。また夏、八月になると一家総出で「秋刈り」に出かける。

それはまだ私が学校へもあがらない時のことであったが、母の里方の姪のおそのさんが冬の間、私のところに寝泊りして母から裁縫を習っていたことがある。ある夜、母が呼ぶので、茶の間へ行った。根無山に狸火が転がっていると云うのであった。暗闇を透して見ると、山の中腹どころを垂直にコロコロと火の玉が転り落ちている。アレアレと云っている間にその火の玉は山裾まで来てそこで消えてしまった。

また根無山の奥に洞窟があると云うので、三月節句だったかに村の青年と一緒に探険に出かけた。これ探険などにとても興味を持つ高等小学校の二、三年のことであった。めいめいに松明や鉈を持ったり、物々しいいでたちで出かけて行った。

なる程、洞窟はあった。だがそれ鐘乳洞では無くて、岩の裂け目であった。奥行も二間か二間半ぐらい。松明の必要など全然無かった。妖怪変化は勿論のこと、昔、仙人とか行者とかが籠っていたと云うのだが、箸かたいし落ちてはいなかった。みんな軽い失望を背負って家に帰った。

根無山はその頂上に「理想国」を夢みた瞼の山でありながら、私、六十五才の昭和三十年四月十日まで登ったことが無かった。ぐずぐずしていたら一生登らずじまいになるのじゃないかと云ったような気がその頃動いていたと見えて、清岡泰治をこの山行に誘った。清岡はお勝つぁんと伊佐岡嬢を誘って四人で出かけた。大平で伝さんとこに立寄って登り口をきいた。道順だったので私の家のあった壇（段）へ立寄った。いまは他人の所有になって畑

になっているその屋敷跡を見ていると、涙ぐましいような気持になった。平坦な井手沿いの小径を歩いて根無川の「とびと」を渡り、川の石岸（かん）の爪上りの道をのぼる。そこに大規模な砂防工事が殆んど出来上っているのを見て、私、びっくりした。こんなところにまで近代文明の手が延びようとは夢にも思わなかった。この工事場を越すと伝さんに教えられた道があった。杉か桧だったかの植林の中についている、くの字なりの山道だ。三十分程登ったところで植林は尽きて土地が少し平坦になる。ここ草生地である。いつの間にか頂上へ来てしまった。私の瞼の山の頂上だ。頂上は三方ガ森の文字通り三つの平ったいピークが並んでいる。その中の一番高いのに三角点があって、近年再建した櫓がそのまま残っている。若い三人は櫓の横木に上って話に夢中になる。私はまだ枯草だった草の上に寝ころんで煙草をのむ。それからそこをこっそり立って、ここから四国山脈の本線に直角に交叉すべく通じている狭い平坦な尾根を歩いて行く。この尾根道には高さ五寸無いくらいのシャクナゲの小苗が沢山あった。

三方ガ森から河の内部落の一部が見えた。黒森峠もはっきり見えた。伝さんの話ではこの三方ガ森の少し下手のところに井内から直接に河之内に行ける山道が以前あったのだが、めったに人が通らないので、いまはその道跡もわかるまいとのこと。

三方ガ森の頂上はそう広いと云うではないが、それでもゆったりした感じを与えてくれる。なるほど一点の塵埃をもとめぬ清浄な山頂である。勿論、そこには私の夢みた清らかな人家や美しい人間は居らない。いや、逆に人家や人間が居ないからこそ清浄なのだ。

山の帰り、私の元屋敷へは出ないで川添いの道をそのまま下って成（なる）の部落へ出た。（四〇、一一、二五）

四、善神山

「ぜんじん山」とも云い、また「ぜんじ山」とも云う。漢字も善神山とも書き、また「前司山」とも書く。

私が物心ついて始めてその存在を知った山は、この「ぜんじ山」であった。どの家も百姓家は南向きであるが、私の家も南向きで表の間の障子を開けると眼界いっぱいに立ちふさがる山がこの「ぜんじ山」であった。屏風を立てたようだとよく云うが、峻嶮で殆んど垂直に近い。それに原始以来一度も斧鉞（ふえつ）を入れたことのない密林はどすぐろくて、ぶきみであった。善神山には天狗（てんぐ）さんが居ると云われていた。

ところが地形図を開いて見ると善神山の上手、上浮穴側に一二八四・六米の山がある。地図には山名が出ていないが村の人はこれを「うなめご」と呼んでいる。（「うなめご」とはどう云う意味だろうか）私が始めてこの「うなめご」に登ったのは大正十二年の八月二十四日であった。私、この時の印象を「四国アルプス」に次のように記している。

雄大な山であり落付いた山である。皿ケ嶺、陣ガ森（一二一〇米）の峯続きに、どっしりとその強い根城を構へ、その上に悠然と聳えている。あせらず迫らず、特にはでやかでも無く、人間に媚びるでもなく、そんなことには全然無頓着で、しかもそ

の真実味と偉大性を味わしめ、厳かな男性美を見せているところ、日本アルプスの穂高を思わす山である。
すばらしく褒めちぎったものだ。だが今でもこの山、どこか穂高に似たものを私は連想する。
「うなめご」は井内峠から尾根伝いに登るか、上林峠から陣ガ森を経て縦走するかしか道らしい道が無い。井内峠には「峠の地蔵さん」無かったように思う。
「うなめご」は善神山とは別の山である。「うなめご」は石鎚山脈本線上の一ピークであるが、善神山は「うなめご」の西の一無名峯から北に派生している一支脈上の山である。またその樹相も「うなめご」はブナの落葉林であるのに対して、善神山はモミツガ、ヒノキなどの針葉常緑林であり、またその山容も「うなめご」はゆったりと温かい山であるが、善神山の方は嶮厳で容易に人を寄せつけない。
かく二つの山は別個の山であるのに、土地の人でも「うなめご」を以って善神山の一ピークだと考え、これをも善神山と呼んでる人が相当多いが、これは大きな間違いである。
私が生れて始めて樹氷と云うものを知ったのは「うなめご」であった。初冬のある朝、ふと、「うなめご」を仰ぐと、昨日まで何も無かったのに、山が真白になっている。それは雪ではない。まだ雪の来る時候ではない。また雪ならばあんなに艶があってキラキラする筈はないのに、これは透明な硝子のような白さである。
私その頃、まだ樹氷と霧氷と積雪の区別など全然知らなかったのだが、これが雪でないことだけは、幼な心にも朧気に感じられたのであった。
善神山と云う山名は、徳川後期に井内村周辺の山々に、仏教擁護の十六善神を祀ったことに由来するのだそうなが、そんなら何故ここだけに善神山の名がついたのかがわからない。善神山には前善神と奥善神の二つのピークがあり、奥善神の方が上手にあり、標高もこの方が高い。山容はどちらも三角むすびを立てたように、尖鋭である。中でも奥善神の方は二百米ぐらいの断崖があって、井内部落からは人間を絶対に寄せつけない。だから、この善神山、「うなめご」と陣ガ森との中間の一ピークから分岐しているのだから、その尾根を伝って行くのほかは無いのであるが、この尾根、幅が狭く、それにシャクナゲの密林ががんじがらめにからんでいるので、転落する危険が無い代りにすばらしく歩きにくい。奥善神の山頂は一坪程の平地で、そこに小さな祠がある。これが十六善神の一つであろう。
私がこの善神山に登ったのは昭和八年の五月十四日であった。前日皿ケ嶺でキャンプをして、翌日縦走にかかったのであるが、尾根を間違えたのを幸に、この奥善神行となったのである。派生山だから兎角この善神山は岳人に閑却されがちである。シャクナゲの花がすばらしくきれいであったことと、頂上から井内の部落が真下に見えたことだけしか記憶に残っていない。
奥善神からは黒岩部落へ出た。同行は吉元先生、白田国一先生外、太田、浅井、上野、秋山等十四名の賑やかな山行だった。白田先生は教練の先生、北方の産、元気で愉快な人だったのに早く世を去った。

善神山は私はこの時、ただ一回登っただけであるが「うなめご」の方は五、六回も登った。だが、この「うなめご」、私よく道を間違えて頂上まで登らなかったことも二、三回あった。その失敗談中、特にここに書いておきたいのは終戦の年の一月二日に、私、息子の忠彦、卒業生の新野と大塚とでやった時で、雪の冬山だったのに山を馬鹿にしたので天罰てきめん、ひどい目にあった記録である。

上林のバス終点からもう雪があった。皿の下の横がけ道は大分深かった。昼前には上林峠に着いていなければならないのに、峠へ着いた時はもう三時であった。これでは皿へ往復していたのでは絶対に井内峠まで行って部落へ出ることが出来ないので、峠からすぐに縦走にかかったが、峠までの雪道に相当疲れていたので、陣ガ森の上り、とても苦しかった。だが、兎も角も陣ガ森を越えまた善神山への分岐点のピークをも越えて、さて愈々「うなめご」への登りにかかった。私がトップを切っていたのであるが、雪がうんと深さを加えて来るし、日は暮れかかって陰欝だったし、それに極度の疲労で、足が雪から抜けない。「うなめご」の頂上までは絶対に登れないことを知ったので、そこから、山の北斜面をからんで「うなめご」の西に出る小径があることを知っていたので、その道、このあたりだろうと思うところを、トラバーでしかけたのだが、傾斜が急だし、雪が深いし、とても危険で前進することが出来ない。

進退きわまった。残るはただ一つ。ここから直瀬側の斜面を遮二無二真直にずり下るしか途が無い。真直に降りさえすれば近かれ遠かれ、直瀬井内峠道のどこかに出くわす筈だ。私は若い三人を督励して、依然私が先頭で、無茶苦茶に樹木の中を分け降った。

日はとっぷり暮れた。雪の白いのがかすかに見えるだけ。もうこれ以上は動けない。これ以上動いたらそれこそ生命の問題だ。絶対に前進が出来ない。いや前進も後退も、右往も左往も不可能だ。幸い、我等が現在居るところは三方から山の斜面が集って、風の無い小低平地だったので、そこで雪を掘ってビワークすることにした。マッチと鉈とを持っていたので、枯木を探したが、ここ桧の植林だが枯枝が一本も無い。已むなく、なるべく小さい生木を二本伐り、それを細く割って焚火を始めたが、碌々燃えてくれない。私たちは終夜、口を火に寄せてフーフー吹きつづけなければならなかった。夜が更けるに従って若い者は眠りこんでしまう。眠ったが最後、生命の問題だ。一人でも殺しちゃならぬ。私は、自分も眠いのだが、彼等の背中を棒切でビシャビシャたたく。このことを何度繰返したやら、ほんとうに必死の一夜であった。

夜がほのぼの明けかけて、そこらあたりの雪景色がかすかに見えかけた時の嬉しさ。「助かった」との実感、これは直接の経験者でなければわからない。

私たち、夜が明けるとすぐに谷添いに雪の中を降ったら間もなく道があった。その道を二三丁降ったら、そこ人間の世界であった。ここ上浮穴郡畑野川の「おそごえ」と云うところ。私たち、とっつきの農家へ行って囲炉裏にあたらしてもらっていたら、みんなぐっすり眠りこんでしまった。目がさめて後、おかみさんに

芋粥を炊いてもらってたべた。午後二時ごろその家を出た。しばらく降ると平坦な新道になったが、前夜、夜っぴて火を焚いたので瞼が動かない。強いて動かそうとすると、とても痛い。私たち眼を開いたまま汚れた雪道を探り探り歩いた。下畑野川から峠の御堂越えをして久万町に着き、面河旅館に入って、ドテラに着換えて炬燵に入った。

各自、家へ電報を打った。一夜休養したら、眼の方も躰の方もよくなった。何時だったかの松山行のバス。バスの中では苦しかった「焚き火」の一夜をたのしく語り合った。(四〇、一二、二四)

五、横嶽(だき)山

白猪峠から井内峠までの山梁。これやせても枯れても石鎚山脈の本線であるが、長さ、約一里半。一千米ぐらいの高さである。この間に鈍重なピークが五つある。白猪峠の方から数えると、第一のピークは根無川の左奥に、第二は三方ガ森(根無山)に接続し、第三は樽が谷奥、第四が一番高く一、二二一米ある。この最高峯から北に短い尾根が出ていて、その一隆起に十六善神を祀った横嶽山がある。最高峯から井内峠はもう近いのであるが、その間に第五のピークがある。この第五が梅が谷奥に当る。

「予州松山領大鑑」の中に「井内の御山(藩所有の山の意)三つの名とその長さが出ている。「ばゐが谷御山、東西三十八丁、たるが谷御山、東西二十五丁、ねなし御山、東西二十丁」とある。これでは全長が八十三丁(二里半)もあることになる。

五万分の一地形図には全然山名が出ていない。村の人も梅ガ谷とか樽ガ谷とか云っているが、それは谷の名か、それともその谷の奥にある山と云う漠然たる意味で、ピークの一々に名づけた名前ではない。

私九才の、明治三十四年の夏のある日、横嶽山に登る機会が与えられた。村の人々が雨乞のために登るので、私もその尻についで行ったのである。先づ「おとし」と呼ぶ民有林の中をくぐって「休(やす)ん場(ば)」と云うところで一休みした。それから上は入会の草山でぢくざく道をのぼって行った。草山が尽きると官有林になるが、間もなく山の突起へ来た。岩の塊りである。こんな岩ばかりのところ、私生れて始めて踏んだので妙な気がした。

岩の上に小さな祠があった。人々は神酒を供え、御幣を振ったらもう雨乞の儀式はおしまい。あとは酒宴。私たち子供は酒には用事がないのでその辺りを歩き廻る。

弁当をたべ、みんなわいわいわめきながら来た時と同じ道をとって山を降った。

私が白猪峠から井内峠への縦走をやったのは大正十三年の六月一日だった。私の「四国アルプス」から、その時のことを抜き書しよう。

三十一日、天気が非常に良く登山には好適である。自分は単独でやるつもりで松山駅へ出た。すると高商(いまの商大)の連中や民間人六名が同行すべく私を待っていた。拒むべき必要もないので一緒に汽車に乗る。松山の登山熱が大分高まって来たことが嬉しい。横河原から河之内の金毘羅さんまでの二里。途中で井手要太郎(高商一回)がしきりに痛快な歌を歌った。

柏餅をたべながら歩く。
金毘羅さんから山道にかかる。問屋で友人の近藤金四郎君の家に立寄り、茶菓の接待を受けて昼食をとる。記念撮影、一時辞して白猪の滝に向う。二時過ぎ白猪峠、眺望絶佳、白猪から石墨山に登り、その夜は上直瀬の川口屋に宿泊した。
翌、六月一日、早朝出発、白猪峠へ出る頃から天気が変りかけた。井内峠まで出られるか否かが怪しい。尾根道では石楠花を摘み折ったり、遅咲きの尾上桜を賞したりするぐらいの余裕はあったが、一、二二一米の最高峯の北腹を廻ると、急に猛雨が来襲し、加うるに濃霧のため咫尺を弁ぜない。ここから井内峠までの約十町の間の苦しさは何とも云へないものであった。
峠から井内部落への降りは聊か楽だ。井内で菅野唯次郎さんの家を訪い、茶を貰って昼食をたべる。横河原までは長かった。やっと五時前、横河原、六時松山、全員濡れ鼠、各自雨の中を家路に急いだ。私この縦走の時、自分の村（井内）全体を山の上から始めて見下ろした。井内の部落に居ると部落をとりかこむ四方の山は部落の従僕だが、山上から見ると部落は殆んどあれども無きが如き一点に過ぎない。人間から自然を見るのと、自然から人間を見るのとが、こんなにもちがうものだと云うこと、人間は自然に対してそうえらそうには云えぬと云うことを私この時始めて知った。
もう一つ、私の私事を書かして貰おう。それは尋常小学校の一年か二年の時だった。三月の節句の翌日、お弁当をこしらえてもらって、私より二年上の伝さん、一年下の曽一郎君の三人で、さきに書いたおとしの休ん場へ行って、そこで弁当を開いた。ここ見晴しのいいところ、その日はすばらしい上天気であった。食後伝さんが火を焚くと云って、そこいらにあった枯枝を集めて、伝さんが持って来ていたマッチで火をつけた。ところが土地が傾斜地であるし、枯草は乾燥しきっているので、またたく間に猛烈な勢いでメリメリ音をたてて燃えひろがって行った。最初の中こそ松の枝を折ってパタパタ、消そうとやって見たが、そんなこと何の役にも立たない。草山は燃えひろがる一方だ。私たち、どうなるのだろうと恐ろしくなって一生懸命走って山を降り、各自自分の家に逃げこんだ。私、母にも云わずに部屋の片隅にちぢこまって、心の中で「どうか神様、雨を降らして火を消して下さい」と祈った。
村の人々、山火事だと云うので大騒ぎ。急いで火事場へ駈けつけた。この日、父は役場かどこかへ行っていて不在だったが、貞兵衛祖父は消防に、山へ行ってくれた。夕方になって火が消せた。祖父が「天火（てんび）と云うことにして届けよう」と云った。その天火と云う言葉をいまも忘れることが出来ない。それは乾燥した木と木が擦れ合って火を発することである。
二三日の後、父は四斗樽を買って消防につとめてくれた人々に振まった。伝さん、曽一さんの父親も応分の拠出をしたのだろう。
その後、半月か一月たって営林署（当時は小林区署と云っていた）のお役人が来た。私の家の隠居が定宿だったので、そこに二三日泊った。ある日私に来てくれと云う。私、どんな目にあわされるのかと、おっかなびっくりで行って見ると、お役人、二、三

人居ったと思うが、みんなニコニコしながら私の頭を撫でてくれた。私が山で焚火に神経質っだのは、実はこの時のしくじりに懲りたからである。（四〇・一二・二六）

面木山

加藤　勝

落出から国道十一号線とわかれて十五分、バスはがたがた道をあえぎながらバス停、郷の下へ着く。ここから道路改修記念碑の横の道を東へ五分ばかり歩くと、左手に郷部落への小道がいっている。僅か五分ばかりだが、かなりの急坂だ。この坂道を登りきると郷部落の家々が見えはじめる。部落の上方、行く手の右側の空に面木山の二本栓が望まれる。後方南の空には石墨がその頂上を大空につきだしている。

登山道は部落をはずれると、殆んど林の中だ。時々視界が開けると、南方の空高く石墨の姿が望まれる。部落から三十分ほど歩くとやや平らな木の伐採点につく。こわれかけた小屋が一つわびしげに立っている。南方の景観はますます良くなってくる。石墨、堂ケ森―西冠縦走路の北面がその全容をあらわし、石鎚の姿がはるかに望まれる。

ここで一休みし、林の中の道を三十分ぐらい登ると、やっと林がきれはじめ、面木山の南面のスロープが目にとびこんでくる。頂上はそこだなと思ったとき、突然小さな泉に出合う。沸かせばのめるであろう。ここから植林したばかりの面木山南面の斜面をじぐざぐに登ると木の苗畑に出合い、道がとだえた。それからは植林の中を強引に左のピークにむかってかけ登った。

頂上には三つの祠があり、それぞれ滑川、鍛冶屋、千原の各部落の方向をむいている。毎年一回お祭りがあり、それぞれの部落の人が清酒を持ってお参りするとか、部落の人はこの頂上を面木山と呼び、五万分の一地図で三角点のあるもう一つの頂上は、砲台ケ森と呼んでいる。というのはこのピークに砲台をすえれば道前、道後の両平野を制圧できるかもしれないからだとか。

二つの頂上の展望は似たりよったりで、西に道後平野、北に高縄山塊、道前平野、東に三ケ森、南に皿ケ嶺、石墨山、青滝、堂ケ森―西冠の北面、そして石鎚山の姿が望まれる。晴れて展望の良い日は白猪峠の鉄塔、堂ケ森の電池反射板等がくっきり見える。特に冬など保井野から堂ケ森への登山道が我が目を疑うほど鮮明に望まれる。

山稜を東へ五分ばかりいくと、地図上で三角点のある頂上直下にでるが、ブッシュで直登は無理なので、頂上の北側を巻くとあっけなく山頂にでる。一面のカヤだ。いくら探しても三角点は見つからない。

帰途は植林の中を一気に苗畑まで下る。ここから道をたどり、泉のほとりにでて後は一気に下ると、三十分ほどで左手下方に部落の神社の屋根が見え、あっというまに郷部落に着く。頂上から僅か四十分である。ふりかえると今登ったばかりの面木山が静かに立っていた。

記録

松山（八・三〇）－バス－郷の下（九・三五）－郷（九・五〇）－伐採跡（一〇・二〇）－泉（一〇・五〇）－面木山（一一・一〇）－（砲台ケ森（一一・二〇）

帰途

面木山（一二・五五）－泉（一・一〇）－伐採跡（一・二〇）－郷（一・三五））

晩秋の井内峠

三好保徳

本邦主要峠高度表というものを見ると、千メートル以上の峠が百九十九、その中わが愛媛県内に四つ、その三つが上林峠、井内峠白猪峠であって、ともにこの道後平野の一隅から上浮穴の畑野川や直瀬へ越える、ほぼ同じ間隔で東西にならんだ峠である。朝夕これらの峠の空を眺めている私にとっては、それらは強く心のひかれる所である。この三つの峠のうち、今もなお峠として細々ではあるが、生きているのは井内峠のみではあるまいかと思う。

去る十一月二十三日の朝、井内蔵元の終点でバスを下りた私は晩秋、いや初冬といった方がいいかも知れない風情の井内峠を越えて見ようと、峠の下の谷間へ向かって歩いていた。道は間もなく井内大橋、といってもそれほど大きくもない橋を渡る。ここから上流に向って右手の方を西地といい、左側を川東という。西地の黒岩部落におおいかぶさる象の背のような山を、象が峰というそうである。私は川東の旧道を登って行った。やがて最近できた六地蔵の店の前へついた。このあたりから眺める朝の象が峰は美しかった。その頂上は黄色のススキに、中腹はスギやマツの暗緑の林におおわれ、所々をクヌギの林が黄褐色に彩っていた。その麓の黒岩の農家の壁は、朝日をうけて白く光っていた。こちら側六地蔵の部落の上手には二、三軒の農家がまだ寒々と見えていた。そこを中屋というそうである。

私は、六地蔵の店から出てきたお婆さんと道づれになった。その人は顔色もよく眼も生き生きとしていたが、歳は八十二といっていた。『直瀬へ行くのなら、兄さんの足なら昼までには着くな』というのである。兄さんというのが、私のことだとしばらく気づかなかった。時計を見ると九時十五分前、私は正午ごろ峠へ着けばいいのであった。

右前方にせまる高い山が前禅司、その頂上は葉も落ちたブナの林におおわれて灰色に煙って見えていた。ばいが谷（梅ケ谷）に向うと、正面に井内峠が窪み、その右に高く禅司ケ森がそびえている。そしてこの梅ケ谷の中ほどにひときわ黄色にふくらんで見える山があった。お婆さんの話では、またこのあたりに残っている草屋根の人たちが、屋根をふくためにカヤ山をあそこに残してあるのだという。やがて松本橋に近づくと左手の部落を「なる」といい、まだその上手に見えないけれども「大ひら」という部落があるのだそうである。

「ええ、大ひらには人家もあるし、おやけもあるしな」という。

「おやけというのは金持ちのことよ」と説明してくれた。

このお婆さんは梅ケ谷の口に発達した段丘の上にある「えら」部落の人であった。今通ってきた六地蔵の上手中屋に生れ、十八の時このえらへ嫁入ってきたという。地名の字をきくと、とても印象に残る笑顔を作って「字は知らん知らん、昔は学校へ行かんでもよかったからな、今時の人は勉強勉強いうておそうまで一人でおる娘さんがふえたな」といって笑った。

えらの台地の下の土橋のたもとに、五月中・下旬白い花を咲かせるクマノミズキがあったが、今は一枚の葉さえ残ってはいなかった。そこへ「えら」から下りた中年の農夫が挨拶をして行きすぎた。「あの子のお母さんが直瀬からきておいでるし、私の妹も直瀬に嫁にいとって八十になるがまだ元気なぞな」という。本当に峠とはその両側に住む人々をこのような関係で、結びつけている所なのである。昔は岩屋寺や久万へこの峠を越えて行く人も多かったが今は少くなったとのこと。えらに上ると三、四軒の農家があった。そこでお婆さんと別れた。

「あれが私のうちよ。」といってお婆さんが指さした新しい家の屋根には、テレビのアンテナも立っていた。谷川の向うの小高い山の上に大ひらの農家の屋根が見えていた。えらの台地には小溝が流れ、それぞれの家へ谷川の水を運んでいる。この溝に沿ってオウレンシダが多いことは既に有名なことである。所々にある柿の木には、真赤になった木守りの柿が一つずつ残っていた。

えらを過ぎてから人家もなくなった谷間へ私は一人ではいって行った。山田も終り、スギの枯葉がおちて露にぬれ、シマカンギクの花も盛りを過ぎ、フユイチゴの実がこぼれそうに熟れていた。シキミが多く植えてある。坂道はだんだんと急になって谷川から遠ざかって行った。その最初の山の中腹を曲る所で、先年きた時五月下旬というのにまだ咲いていたヤブツバキがあったが、今年もその木は多くの蕾をつけていた。緑の草とてほとんどないなかに、そのあたりからイノデモドキ、ツヤナシイノデなどという羊歯の緑が目につきはじめる。やがてまた道が谷川に接近し、それを渡って右側へ道はつづいている。その上手に二軒ばかりの山小屋ができていて木を伐る人たちが住んでいた。それから谷川に接した急な道を少し登ると、やがてそこで道は本当に谷川と別れ、右へ山腹を斜めに進むことになる。このあたりの道は、夏のころには身丈ほどもある雑草におおわれていたが、今はそれもなく、道は両側の雑木のなかにはヤマノイモを掘ったらしい新しい土が見えていた。

いつかハンショウヅルの濃い紅紫色、鐘形花が美しく咲いていた山道の曲り角にくると、向いの山の落葉樹には葉の残っているものもなく、立ちならぶ木々の梢はほんのり赤味をおびて美しかった。晩秋の山はさびしいという、しかし木々の枝には来春への希望にふくらんだ芽がついているではないか。

落葉をふんで登って行くと、すぐ右上から、さつき谷の口でお婆さんが話してくれたカヤ山がはじまっていた。その葉は黄緑に、無数のその穂は白く、雲間をもれる日ざしに輝き、吹く風にゆらゆらと波打っていた。やがてススキの山に別れてヒノキの林

の中へはいって行った。これからが梅ケ谷山国有林となる。つづくヒノキとスギのうす暗い林の中を、はるか左下方に流れている谷川へ落下する小さい急な谷川をいくつか渡って行く。その谷川は夏は一面に繁茂していたオタカラコウの葉の下で、水が音をたてていたのだが、今は葉も多くは枯れはて緑華はわずかに残り、私の背丈ほどの茎や花軸も枯れて、頭花のあとには冠毛の開いた果実を一ぱいにつけたまま、じっと立っていた。

やがて遠くに見える山の凹面から、このような環境にふさわしくもない電気鋸の回転する音がひびいてきて、しばらくすると大木のたおれる音が谷々にこだまし、鋸の音は消えた。イヌブナやブナ、ミズナラの葉の混じつた落ち葉をふんで登るうち、右手に白い小屋が現われた。松山測候所井内峠無線雨量観測所とかいてある。谷川の音もきこえない。小鳥の声もしない。ただ落葉をふむ私の靴音のみがざわざわときこえる。私はこのような静寂をしたってきたのであった。あれから三十分もたったであろうか、また遠くの山で電気鋸が巨木にいどみかかる、わが身の切られるような音がはじまり谷々にこだましはじめた。

こうして私は間もなく十二時すぎ井内峠の上に立った。峠は意外に暖かであった。木々の葉はおち、東方梅ケ谷山へ登る急坂は白いススキの穂におおわれ、十坪あまりの峠は白く枯れた短い雑草につつまれていた。私はその一隅に腰を下して、そして昼食をとった。

禅司ケ森がそこに見える。井内峠から上林峠への尾根筋の道を幾回私は歩いたことであろうか。いくらかあった雨雲も南方へ流れ去り、蒼い空には少しかたむいた午后の太陽が輝いていた。天気のいい休日の正午ころ、この峠で一人の人にも出合わないということがあろうか、しかし誰も通りかかる者はなかった。私は自分の孤独の影をそれでもあわれとは思わなかった。

南方には上浮穴の山々が限りなく重り合っていた。左手前方に一際高い山は大川嶺や狼が城山であろう、そして雨霧山や桂ケ森も見えていた。

私は一人で一時間も峠にいた。遠い昔からこの峠を、嫁入りだ、出産だ、死亡だといかに多くの人々が喜びや悲しみを持って越して行ったことであろうか、あのお婆さんも若いころには幾回もこの峠を越したといった。一昨年であったか白猪峠へ行った時、その峠に字もかすかになった石地蔵がたっていた。文化七年三月二十一日施主菊七、六良市と読めた。しかし白猪峠の北側の道は山崩れのためになくなって、今は別の道を下るようになっているし、直瀬への下り道にはヤナギやササが生えていて通れそうにもなかった。このようになったのは両側の部落のつながりがだんだんとうすれてきたためであろうと思う。

一時すぎ私は腰を上げて直瀬へ下ることにした。やがて雪につつまれる井内峠のわずかな広場がまた緑にかわるころ、私は再びここを訪れることであろう。直瀬側の谷間のうす暗いスギとヒノキの林中に、わずかに残っているスズタケを見ながら、V字形に掘れた坂道をたんたんと下るのであった。谷川の水は黒味がかった斜方輝石安山岩が、板状にうねる川床の上を豊かに流れていた。林をでるとススキの山やミツマタの山だったが、その中にも

近年植林されたらしいスギやヒノキがあった。道ばたにはコナラ、ヤマハゼ、コミネカエデ、コマユミなどの葉がこれまた血の色のように赤く紅葉していた。谷の口へ出ると谷川は大きい滝となって落ちていた。ここで岩角を曲ると突然眼下に、直瀬の谷間の山川が開け、遠くに部落の家々が見えた。明るい、意外に広い谷間である。上直瀬の永氏の山田にかかった所にある一本の大きいアカマツの下で働いていた農婦に、今の滝の名をきいてみた。「さあ、あしこはたるのとういうがな、滝に名はないな」ということであった。

山川の岸々の雑草は黄褐色に枯れていた。その中に濃紺のリンドウと真白いウメバチソウが咲いていた。その時、えらのお婆さんが私に「兄さんの足なら……」といった言葉をふと思いおこした。とたんに私は若やいだ気持になり、リンドウの花の一枝をとって上着のポケットへさし、永氏の部落へ向って颯爽とかけ下りて行った。そしてさらに上直瀬の下組へついた時、橋のたもとに立って井内峠の方をふりかえってみた。私の目に入る山々の多くは、かって草山であったらしく黄色に枯れた山脈が見えていたが、しかしその中に一面に植えこまれたスギやヒノキの緑が点々と見えていた。これは大変なことだ。今から三、四十年もたったなら、このあたりの山々はスギとヒノキの美林におおわれ、風の吹くごとに、いんいんと音をたてることであろうと思ったのである。

（昭和三八年一一月三〇日）

川内町の自然

八木繁一
県立博物館
（昭和四〇、五、二一）

一、植物の部

㈠ 松瀬川方面

滝の下から松瀬川の流れに添って上る八キロの間には、大下、三軒屋、音田、新畑、中村と人家は点々と続いている。そのため川添いは勿論のこと、山林も殆どが人手が加わっており、自然林と思えるものが少ない。それでもこの谷の入口に当る川内公園は碧水をたたえた吹上の池を中心にして、赤松の姿面白く、静かな遊園地として独特の趣を現わしている。尚ここに続く東北方の広大なるゴルフ場は、鉢子池の小凹地を挟んで、十八ホールのコースを持ち四国一を誇っている。場内にはアカマツの自然林を利用して、ツツジ、桜、ヤナギ等が美しく配置されている。さて谷川添いには、ハゲシバリ、ノグルミ、フサザクラ、ヤブツバキ、アカメガシワ、アカマツ等が普通で、これらにヤマフジがはいかかって美化を咲かせていた。（五、二一）

所が新畑の五柱神社の境内に入って見ると、シラカシとアラカシの多いのに驚いた。更らにヒョンノキやカキノキダマシも珍らしい。こんな木は切らずに何時までも残したいものである。ウラジロガシ、スダジイも中々多い。又大木もある。アセビ、モチノ

キ、タマツバキ、クロガネモチ、ケヤキ等も見かけた。然しゴヨウノマツ、サカキ、イロハモミジ、スギの如き樹種は或は植えたものかも知れない。樹下のアオキ、キダチニンドウ、コバノガマズミ等の中には、この所にだけ分布しているものもあって興味深く観察した。お宮は拝殿も本殿も大修理中で、屋根の銅板は境内の巨樹に反映して目も覚めるばかりに光り輝いていた。

次に中村の十一面観音堂の大イチョウを見学した。災害にあったとはいえ七、八米の太さを持つ巨樹で、見上げると多くの稍からは長い柱瘤が垂下して、如何にも古樹の姿を呈している。尚根部よりは又多くの小幹を発出しているが、これらは惜しくも切り取られているため、全体としては淋しい雌株である。（第一図）

奥松瀬川観音堂の大イチョウ　（第一図）

その附近にはオニユリ、シュウメイギクの草本から、ツバキ、数本のカゴノキ、アオキ、シロダモ等があった。然し無住のお堂故荒れ果てて見る影もない。それでも秋のイチョウの実の落ちる頃は楽しい所と思った。このお堂と五柱神社の森を見ていると、ある程度の松瀬川の自然植生の様子が偲ばれて有難かった。この松瀬川から北方海上にかけてのアカマツの林は、マツタケの自生も多いことだろう。

㈡ 黒森峠方面

役場から直線距離にすると峠まで十キロそこそこであるが、奥問屋から上方は道路の屈曲が多いから中々の難路である。さて何回見ても見る度にそのよさの感じられる滝の下の地層を左に見て、則之内の氏ノ宮の美しいシイの花（五、二一）、松の緑に見とれつつ、金比羅様のある、あの太さ六米もあるウラジロガシの下に出た。樹勢は多少衰えたように思ったが大きいものである。（第二図）樹下にはオオムラサキ、リュウキュウツツジ、キシツツジが満開で実に美しかった。昇る石段のあたりから社頭には杉

河之内惣河内神社の
ウラジロガシ　（第二図）

の木立ちが多い。中には目通り四・一米のものも何本かあり、境内の幽すいさを一役かっているようである。モクコク、ゴヨウマツ、イチョウ、カシワ、イロハモミジ、ツバキと植え込まれた樹種も多い。

清流をへだてた総河内神社にはフユザクラ（百日桜の称がある）の名木がある。社殿や寺院後方の森林はうつ蒼と茂って、誠に神々しく、参拝者はさぞ神威、み仏の慈悲を有難く思うことであろう。川添いの雨滝は雨乞いの霊地として名高く、岩壁の間に発達した淵は、昼尚暗い樹林に囲まれて物凄く澄み切っている。

林中には大小様々のイスノキ（ヒョンノキ）が主体となってアラカシ、カゴノキ、ネズミモチ、ヤブニッケイ、クロガネモチ、ヤブツバキ、ツルグミ等で密林をなしている。

さて川向いに日浦部落をながめながら狩場、黒岩を経て問屋にまで登ると、シイの花も大体この辺が終りのようである。附近にはアカマツの美林やクヌギ、ハゲシバリ、クマノミズキ等が多く白猪の滝入口になると人家附近にはカキノキの多いこと、クワの多く植えられているのが人目をひいている。この人家の上の方にわけ入るとフクリンササユリが多い。（第三図）

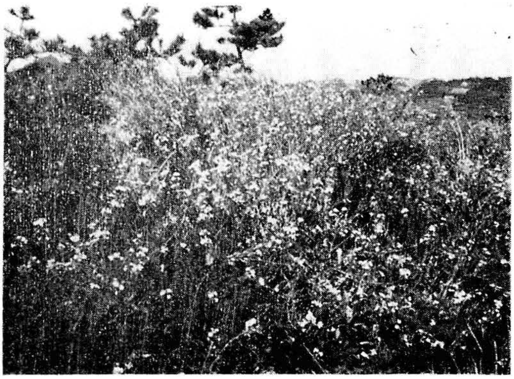
黒森峠のフクリンササユリ　（第三図）

白猪の滝はここから二キロ余で松山市に最も近い関係もあり、古来多くの人の来遊する所として有名である。滝は安山岩の絶壁にかかる三段よりなる飛瀑で、滝壺のほとりに立って見上げていると、夏尚肌寒しの感すら起るのである。この滝をかこんでの緑樹にはフサザクラ、アブラチャン、イロハモミジ、カツラの大木、シラキ、ケアサガラ等落葉広葉樹が多いから、春の新緑もよいが秋の紅葉が又優れている。岩壁のあちこちにはサワアジサイ、イワタバコ、ギンバイソウ、イワギボウシ、キツリフネ、モミジガサ、クサヤツデ、ウワバミソウ等多くの草木類が飛沫に濡れてしおらしい。冬季滝水の凍結した景観も雄大である。

さて大屋敷を過ぎて黒森道を登るともはや人家はなくなるが、松山平野を見下した眺望は素晴らしくよくなる。道路わきに植えられた染井吉野は、新しいもの古いものがよく植えられて誠に気持ちがよい。然し誰が切ったか惜し気もなく多くの枝が、鋸で切り取られているのが目につく。雑木としてはクヌギ、イロハモミジ、エンコウカエデ、ミツバカエデ、シデの類、ケヤキ等が多い。その間に、アカマツの林、杉、桧の人造林がある。樹下には初夏を思わす白花のコンロンソウが一面に咲いていた。（第四図）

黒森峠と割石峠の真下のカーブの所の広場に漱石の句碑があ

る。そこから七段の滝、唐岬の滝への道々には、丈けの高いフサザクラ、クマシデ、シラキ、ダンコウバイ等の落葉樹が林立していて晴々しい、これらの高木の下にはサワアジサイ、ハナイカダ、ウスバヒョウタンボク等の低木がよく繁茂している。草本にはコンロンソウ、テンニンソウ、ギンバイソウ、ヤマアイ等の群生が花時には特に美しい。


黒森峠のコンロンソウの群生　（第四図）

滝への下り道にはツガ、モミ等の針葉樹からナラ、バイカウツギ、ハイシキミ、更に滝壺の周辺のミズタビラコ、ミゾホウズキ、ウワバミソウ、コンロンソウの花が咲き乱れている。尚カラマツ、エゾマツ、シラカバも植樹されているが、生長の暁には定めし人々に喜ばれることであろう。それから一千米に近い黒森峠にかけては、五月末にもかかわらず山桜の類がフジの花と共に満開であった。これらの桜はおそらくカスミザクラやウバヒガンの類ではあるまいかと望見した。（第五図）

尚白猪の滝から唐岬の滝を経て右の句碑の広場に接続される車道でも開発されると、遊覧コースとしては中分あるまい。この渓谷には雪も春おそくまで残り、冷気一しおといった所故ツクミシヤクナゲは滝の上方に、ワサビは更に登って見ることができるのも珍らしい。

㈢ 桜三里方面

桜三里、正しくは桧わだ峠から落合までが所謂中山越えで、貞享年間松山藩の郡奉行矢野五郎兵衛（又矢野源太左衛門ともいっている）この人が地元民の労苦を無視して、短期間に山桜八千二百四十本を植え込んだのが、桜三里のはじまりといい伝えられている。又一説には屋島の戦に破れた、平家の残党樫原季秋が落ちのびてここに住みつき、百姓に身をやつして土地の娘と一家を営み、そして平家の再興を祈願しつつ、毎日桜樹数木をこの街道に植えていた。所が子供が生れると妻は日

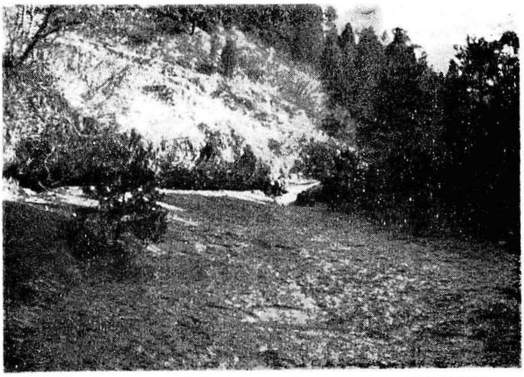
黒森峠のヤマザクラ　（第五図）

立ちが悪くて亡くなってしまった。源太はあれを思い、いたく自分の運の悪さを嘆き悲しんだ。ついに子供に手をかけ、自分は腹を切ってこの世を去ったのである。その亡くなる時に桜の木に向って「汝すべての慾を去って散るべきに散れ又決して実を結ぶな。」といってその幹に「桜三里は源太が仕置き、花は咲くとも実はなるな。」と書き残したと伝えられている。所が地元の人々は「桜三里は源太が仕置き、花は咲くとも見ちゃならぬ。」とも唄っているようである。とにかくこの書き残したといわれている「桜三里は源太が仕置き、花は咲くとも見ちゃならぬ。」の文句は先きの矢野源太左衛門に対しても、又樫原源太季秋に対しても、そのどちらにも無理なしに相通じる意味があると思う。

さてそうした色々と伝統に富む桜の名所桜三里も実は昔の旧道のことで、明治になって新道ができ、更に昭和の今日は舗装道路が完成するようになると、上から下へ道路の位置もかわった。尚その上に工事にじゃまになる古木は遠慮会釈なしに伐採されて、もはや旧の桜三里の面影は全然なくなってしまった。そこで私はこの新道添いに新しい桜三里の名勝を復興してもらいたいと思っている。幸、道路わきには所々空地もできたから、こうした所を利用してそこへイチョウや染井吉野等を交えないで、山桜一色に植樹を希望している次第である。地元の丹原町と川内町で近年大いにこの点に力をいれているのは有難い。

さて落手から滑川の流れに添って、弥助成、仲屋、梅籔、海上を経て六キロも上流に遡ると、奇岩に富む渓流の景観の美しさに驚異の目をみはると同時に、変化極りない植物相の面白さも決して忘れられない。（第六図）

落手はこの桜三里の一部落で、ここから分かれて滑川の沿道を海上という部落にバスが走る。バスからは製紙の原料となるコウゾ、カジノキ、ミツマタや、織物の原料となるカラムシが各所にみられ、モウソウチク、マタケ、ハチク等の黄ばんだ竹林の附近には、トウモロコシにかこまれて人家が点在するのもみえる。ここではハナガサギク、ヒヤクニチソウ、ダーリヤ、クサキョウチクトウなどの外国産の花が作られているが、町の中で見るよりもとても色が鮮やかである。また昔は平地にも植えられていたが、今はほとんど姿を消しているナツメが鈴なりに実をつけているのもなつかしい。



滑床入口　（第六図）

早咲きのヒガンバナ、これによく似ておくれ咲きのキツネノカミソリの葉のない花も印象的で、コアカソ、フジカンゾウ、アブ

ラススキの花も秋の感じをさそう。とりわけ私どもの目をひく山の花は、古くから秋の七草の一つに数えられてきたクズの花の美しさである。すばらしい勢で全県下に広がりつつあるダンドボロギクという外来の雑草もこの道でみかける。海上でバスをおりて滑川にかかる橋を渡ってから、塩嶽という化石のあるところまでは、がけ下の道と山田の中の小路をたどる。海上の橋附近にはオオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ、ヒメジョオンなどの帰化植物がみえ、ここから奥にかけて一般に帰化植物が少ないのは、交通量があまり多くないためだと思う。

田のあぜや道辺にはメヒシバ、アキメヒシバ、アキノエノコログサ、ニワホコリ、チカラシバ、カゼクサ、コブナグサ、ササガヤ、チゴザサ、テンツキ類、タマガヤツリ、ヒンジガヤツリ、ヒメグサ、カワラスガナ、カヤツリグサ、コゴメガヤツリ、エノモグサ、オニタビラコ、キツネノボタン、イボクサ、アゼムシロなどの平地に普通な植物が生育する。またいたるところにイヌワラビというシダ類が、さまざまなすがたをして生えている。ミョウガが所々に群生するのも目立つ。

塩嶽には水成岩の層のはっきりした珍らしい断崖があり、神をまつった祠もある。川床の岩の間に石炭があったり、化石があるのが特に私どもを喜ばせる。断崖の上の端は渓谷の底から目測でほぼ九米あって、川床との間に帯をしめたようなくびれがある。断崖の上にはソヨゴ、アカメガシワ、ケヤキ、スギ、アカマツ、モミ、ツブラジイ、ネジキ、アセビ、オンツツジ、コバノミツバツツジ、リョウブなどの樹木が茂っている。太い木や高い木は見られない。祠の前にはハリモミが一本ある。県下でも産地の少ない珍らしい木で、ここに自生と考えられるこの木があるのは面白い。この他にはイロハモミジ、ウリカエデ、ヤマザクラ、スギなどがある。岩壁の一部には水がしたたり、スゲの一種がたくさん着生している。地面には山地性のクサヤツデが群生し、ミヅシダ、ゲンノショウコ、クマワラビ、コアカソ、ミズタビラコなどが見られる。対岸には低い岩壁がつづきテイカカズラの下垂や谷をわたって断崖上にとどいたかなり大きいヤマフジのかけ橋がみられ、花の頃の美しいながめが想像される。このヤマフジの茎は板のようになっていて、根際では長い方の径が約二十糎以上ある。

塩嶽を渓谷にそって上っていくにつれて、山地の植物が現われる。石鎚の基底礫岩が平になった上をなめらかに水がすべり流れるので、滑床(ナメトコ)と呼ばれるのだろう。行手は何段もの低い断崖となって、水が増すと、ここを流れ落ちる水板は美しい滝となる。かなり上った所が上滑床といわれる川床になっている。この一つつぎの渓谷の両岸はスギの林やイヌツゲ、ソヨゴ、コナラ、エゴノキ、キブシ、ヒサカキ、シラキ、アクブキ、アサガラ、ウリカエデ、ウラジロガシ、クロモジシロモジ、クマシデ、ニガキ、ハナイカダ、リョウブ、アセビなどのあまり高くない林になっているうえ、比較的谷が広いので明るい渓である。

水辺にはヤマイ、ウワバミソウ、樹下や岩上にはヒメワラビ、クマワラビ、シシガシラ、ゲジゲジシダ、ミゾシダ、トウゲシバ、キジノオシダ、ノキシノブ、オオイタチシタなどのシダ類があ

り、ごくまれにイヌガンソク、オクマワラビ、スギランなどのシダも見つかる。

草花の中で見おとせないものの一つにハガクレツリフネといって、葉の下にたれ下ってうす紫の美くしい花をつけるホウセンカのなかまがある。古い時代の植物であるから、植物の分布の上で大切な意味をもっている。またごくまれにツチアケビという葉のないランの類がみられる。秋にアケビの形をした実が赤くうれて枝の先にぶらさがる。ハリモミ、スギラン、ハガクレツリフネなどとともにこの渓を特色ずけるものといえよう。

その他ネズミガヤ、シラヤマギク、サワヒヨドリ、クサアジサイ、イワタバコ、ミツバサワヒヨドリ、サワオトギリ、ミズタビラコ、コウゾリナ、ヒヨドリバナ、ヒメオトギリ、コケオトギリ、オトギリソウ、アケボノソウ、アキギリ、キンミズヒキ、オミナエシ、オトコエシ、ガンクビソウ、サジガンクビソウ、ツルニンジン、ツルリンドウなどの草花や、マルバハギ、カワヤナギ（一名ネコヤナギ）オノエヤナギ、キブシ、エゴノキ、タラノキ、メダラ、ヤマハギなどの花木もみられ、色とりどりの可愛い花を咲かせているものを多く見かける。

それから川辺には湿地の形をとっている所があってアキノウナギツカミ、アブラガヤ、コケオトギリ、ヒメオトギリ、ホタルイ、イ、ヤマイ、シロイヌノヒゲ、オトギリソウなどが生えている。二百種位はたやすく得られる。

（愛媛の自然による　十月二十二日）

中山川添いを三月頃に車上から見ると両岸の山々には白いアセビが咲き乱れ、四月にもなるとコバノミツバツツジやトサノミツバツツジが之にかわり、水辺にはキシツツジが淡紫色の花色を水に映して美しい。又上谷から本谷に入ると三島神社があり、その境内にはスギの大木が数本あって、中には六米のもある。その他ミラカシ、ツバキも太い古木が見られる。クスの多いことも珍らしい。農家にはいいあわしたようにキレンゲツツジの花を美しく咲かしていた。

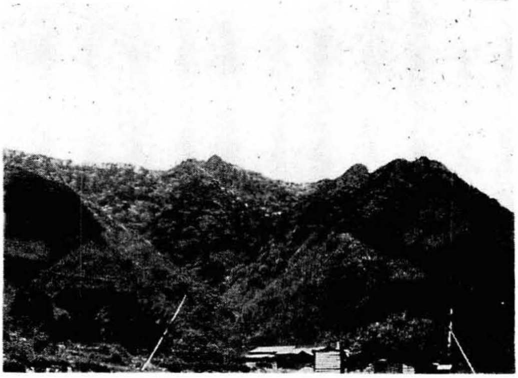
㈣ 井内谷方面

保免で国道十一号線から右折して井内川に添い井内谷に入ると、ほとんど南に登ること八キロで一八〇〇米の井内峠に達するのである。さて人手のよく加わった和田丸、惣川谷、庄屋元のあたりは、山地にはアカマツの美林、クヌギ、シイ等の雑木林、又モウソウ竹林が見られ、川添いにはオニグルミの花、ジヤケツイバラの黄花等特に目につく。奥惣田谷大元神社附近にはノグルミ、ケヤキ、ケンポナシ、エノキ、イロハモミジ、五米に近いムクのキが二本もあり、アオガシやオオツズラフジもあった。

対岸の吉井神社に引き返して見ると、ここは井内谷でも特に珍らしい密林で、樹種に恵まれたよい社叢であった。中でもアスナロがよく育っていたのは何よりと思った。然し或は植えたものかも知れない。シイ大木も多く、樹皮は縦に割れているのでイダジイと思った。四・五米のクロマツ、一・六米のエンコウカエデ、その他イロハモミジ、ツバキ、エノキ、シラカシ、スギ、ハゼ等小さいがタカノツメ（一名イモノキ）も多い。ムベはこれらの樹々によくまつわり育っている。セダケの群生も見られた。樹下の

小植物も少くない。この社叢の下方川添いにはハルニレが点々とある。松山周辺では変った分布を示す植物の一つだろう。

黒岩の対岸川東に出ると古刹善城寺がある。境内には珍らしくも多行柏が一株あるが、多くの枝が切り払われて姿態が乱れているのが惜しい。東側アラカシの並木、カリンの如きは大切に育生したいものと思った。眼下に見下す権現ケ岳の岩壁にかかるツタは秋の紅葉が美しいだろう。大平の人家のあたりに出ると早くも田植の準備をしていた。この人家近くにはカキノキとシキミの多く植えてあるのが何より人目をひいている。そのカキも多くは古く植えたサイジョウガキで、シキミは有名な井内シキミで長持ちのすることで人々に愛用されたものである。何でも当地御出身の北川淳一郎先生の御先祖が奨励されたものと伝えられている。



井内峠を望む　（第七図）

山林には最近クリ林が多くできたようである。新しく完成された林道を登って官山国有林に入ると、最上方に井内峠その右手に善神山が高く聳えて、頂上は新緑に包まれて美しい。その下方は杉、桧との混交林で、新緑と深緑の絵模様も一きわ鮮かである。（第七図）

新設された梅若橋のあたりは岩質も軟かい凝灰岩で、岩崩れも至る所に見られた。谷川の近くにはクサヤツデ、ウスバヒョウタンボクの白い花が可愛らしく咲いていた。勿論イヌブナ、ブナノキ、ミズナラ等も多く出てくるようになる。峠近くの自然林になるとカスミザクラも花がまだ見られ、樹下のシコクカクコソウ、ツレサギソウ、フクリンササユリ、ユキザサ、ヒトツホグロ、クマガイソウ、バイケイソウと深山性の珍らしい植物の多い山道である。峠の稜線添いには又ツクシシャクナゲの大群生があって、今頃の花時には人々を楽しませてくれる。将来保護すべきだろう。この峠道は植物の最も多い所で、三、四百の種類は容易に採集ができる。

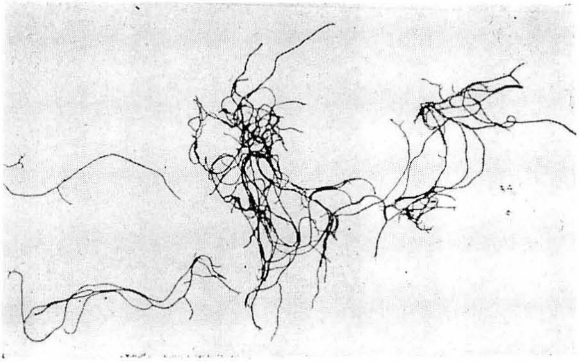
(五)　南方方面

表川の南岸三島神社の境内は、殆ど伐採されて見るも哀れな姿とかわっている。それでもスダジイの老大木が点々と残り、コウヤマキ、スギ、イチョウ、クス、イロハモミジ等の植樹されたものから、珍らしくもタラヨウの大木二本もあった。然し分布的に意義のあるものと思われていたイスノキは完全にない。こうしてやがてはスギ、ヒノキの人造林と化してしまうだろう。止むを得ないことながら惜しいことである。

竹の鼻の熊野神社は田圃の中央にある関係もあって樹種は少ないが、それでもカキノキダマシ、クスドイゲ、マサキ、トベラ等

からカゴノキ、ケヤキ、アラカシ、ハゼノキ、ウシコロシもあった。

　吉久の吉井神社はよく植物の保存された貴重な社叢である。多いクスノキからムクノキ、ツバキ、アラカシ、ヤブニッケイ、センダン等太さ一米に及ぶビワノキ六本、数本のクスドイゲ、古木の多いカゴノキから、珍らしいヒメユズリハまである。社から南方のお旅所に達する道筋にもこうした樹種にクロマツを交えてよく繁茂した並木道がある。尚この社叢と並木道の東側に接した小さい流れは、オキチモズクの第二の自生地として永く保存したい所である。（第八図）五月の末になってもいまだに自生しているのは、おそらく水温の低いためと思う。



オキチモズク（５月22日）　（第八図）

　吉久長泉寺には境内に太さ六米のイブキビヤクシンがあり、町内第一の柏として高く評価されている。樹勢も中々旺盛である。八幡の森正八幡神社には、ヒメユズリハ、トベラ、カゴノキ等からシラカシ、アラカシ、クロマツ、アカマツ、ムクノキ、スギ、ヤブニッケイ、ハリギリ、モチノキ、ウシコロシ等よく繁茂している。斉院木の国道添いにある大きなエノキは、おそらく昔の一里塚の木として植えられたものだろうが、今少し保存方法を考慮して慾しいものである。

北方医王寺トチの木の花

（第九図）

㈥ 北方方面

　北方海上の三島神社には五・五米の桧の切株があった。旦ノ上大興寺は現在川内温泉場となっているが、境内には太さ四米のクロマツがあり、又小町竹の称あるホウライチクがあった。宝泉の医王寺には六米余のトチノキが花盛りで実に雄大であった。（第九図）

　二・五米のサイカチの巨木も花蕾を持っていた。近くにボダイ

北方湯神社のクスの木

（第十図）

ジュも一株植えてある。本堂の厨子は県指定文化財となっている。西の側の揚神社（天王社）の森もよく茂ったよい社叢で、三米に余るクスドイゲがあった。ツバキの一・三米、カゴノキの五・六米、神木クスノキの七・七米と巨樹がよく保存されている。（第十図）ガヤの大木も四本あった。その他ムクノキ、イロハモミジ、ヒノキ、ヤブニッケイ、スギ等から樹下のアオキ、小草本と植物の多く保存された境内である。

吹上の池を中心とした川内公園、これにつづくゴルフ場一帯はアカマツの自生が多く、その間にヤマツツジ、シヤシヤンポ、ネジキ、ヒサカキ等の自生が多い。安国寺を中心とした県立林業試験場は、内外各種の樹種を大量に栽培育生しているので、町内の緑化には非常なる恩恵を受ける所として忘れられない存在であり、全く県下各地の羨望の的である。

(七) 町植物概観

(イ) 松瀬川の谷は殆ど全部、黒森の谷は凡そ問屋以下、井内谷は大平、大根木以下、滑川渓谷の大部分、北方、南方は勿論のこと、即ち川内町の大部分は暖帯植物の分布帯と見てよかろう。所が大体六百米線を越えて上浮穴郡との境界線にかけては、黒森の谷も井内の谷も共に、温帯性植物の分布範囲内に属するものと察せられる。

(ロ) さて町内はどこを見ても平地も山林も、殆んど人手の加わっていない所はない状況である。それでも稜線附近の官山（国有林）に達すると、ある程度の自然林らしい所が残されている現状である。然しこれとも官山（国有林）に林道の伸びるに従って、次第に縮小されて行くだろう。そうなると町内のまだ人類が棲みついていなかった何千年か何万年か前の植生状態というものは、全然わからなくなってしまうのである。そこで若い町民は川内町は太古の昔から田あり畑あり、山には杉や桧が育っていたものと思うようになるだろう。この誤認を起こさせないように、更にこの点に向って積極的に指導される大きな存在であり、大きな責任の持主であるとも考えられるものがある。それは町民の遠い先祖から代々受け継がれた、町内に残る数々の社叢がそれである。これらの社叢は川内町の太古の植生状態を、僅かにうかがい知ることのできる自然林と見るべきであろう。それ故これらは誠に有難い貴重なものであって、これをもし保免の三島神社の如くに切り払ってしまったら、泣くにも泣かれぬ思いがするのである。

以上の如き意味で町内の全社叢は大切に保存したいのである

が、次の五ケ所はその内でも特筆すべきものだろう。

(1) 松瀬川の五柱神社の社叢
(2) 井内谷の吉井神社の社叢
(3) 吉久の吉井神社の社叢
(4) 北方の揚神社の社叢
(5) 金比羅寺及び総河内神社（雨滝を含む）の境内

(ハ) 前記五ケ所の主要植物

五柱神社	カキノキダマシ、クロガネモチ、イスノキ、キダチニンドウ
井内吉井神社	スダジイ、アスナロ（栽植か）
吉久吉井神社	ヒメユズリハ、クスドイゲ、ドベラカゴノキ、ビワノキ（栽植か）
揚神社	クスドイゲ、カゴノキ、クス、ガヤ
金比羅寺 総河内神社	ウラジロガシ、イスノキ、クロガネモチ

右のうち暖地性の主要植物
カゴノキ、カキノキダマシ、イスノキ、スダシイ、シラカシ、アラカシ、ウラジロガシ、クロカネモチ、キダチニンドウ

海岸性の暖地植物の著しいもの
ヒメユズリハ、クスドイゲ、ドペラ、マサキ

これらの植物は又北方及び滑川の海上、滑川の塩獄、井内谷の塩ケ森等と共に、この地方が大昔海につながる関係の深かったことを、立証するものとも考えられる。中には又保免三島神社のコウヤマキ、井内吉井神社のアスナロ、吉久吉井神社のビワノキ等のように自生と思えない植物もあるが、然し何れも得難い植物であるから損傷しないよう心掛けねばなるまい。

(ニ) その他特記すべき植物

総河内神社　フユザクラ（百日桜）
善城寺　多行柏（仮称）
長泉寺　イブキビャクシン（第十一図）
匡王寺　トチノキ、サイカチ、ボダイジュ
十一面観音堂　イチョウ
土谷三島神社　スギ
揚神社　クスノキ、ガヤ
斉院木　エノキ

等は町内の名木、巨木として保護顕彰に値するものだろう。

吉久長泉寺のイブキビヤクシン
（第十一図）

二、動物の部

1、鳥獣について

五月十六日は丁度愛鳥週間のよい日曜日で、県林政課の主催で川内町黒森峠に探鳥会が開催された。高嶺の春はおそく、鶯が今盛んに鳴いているかと思えば、すぐ近くの小枝ではホウジロ、シジュウガラが鳴き始め、珍らしいオオルリ（ヨメナカシ）やセミの如き鳴き声のキビタキも居た。というのがその日の新聞記事の一節である。町内は単にこの谷でなくともいづれの渓谷もこうした小鳥の囀りを楽しむことができる。その他ヤマガラ、ミソサザイ、アオジ、カケス、キジ等も山中にその鳴き声を聞く。クマタカ（第十二図）ハヤブサ等も時に小鳥を追う姿を見る。コマドリも渡りの頃見かける。ヤマバトからホトトギス、カクコウも最近は少くなった。

クマタカ

（第十二図）

人里近くにはメジロ、ツバメ、スズメ、トビ、カラス、麦畑にはヒバリ、季節的にはヒヨ、ツグミ、カモ、ゴイサギ、神社の森のフクロウ、川辺のセキセイ等すべて鳥の類はその殆んどが、姿も鳴き声も共に人の心を楽しませる愛すべきものだが、近年山林の伐採、狩猟の行き過ぎ、更に農薬の害等も手伝って、棲息場所は次第にせばめられ、又棲息数も激減の一路を辿っているように思えてならない。この点は獣類にしても同様であろう。猪、猿、鹿、狐、アナグマ、更にヤマドリ等は話には残っていても、昨今としては殆んどその姿を消したものが多いのではあるまいか。それでもイタチ、テン、ムササビ、リス、コウモリ等になるとまだかなりの数が所々に出没しているものと思う。

清流のカジカ、渓流のサンショウウヲ等は別として、アメノウヲその他各種の淡水産魚類を豊かに育てて、町民の毎日の生活を趣味多いものにしたいものである。

2　昆虫について

(1)　昆虫相の概観

井内峠、白猪峠、黒森峠、面木山など一千米に達する高峰にかこまれた川内町の自然は、動物や植物の生育に最適のところであり、古くから多くの研究者によってその昆虫相も調査研究せられ、学術上貴重な種もかなり発見されている。

例えば中生代三畳紀に栄えたトンボの残存種として、生ける化石といわれる有名なムカシトンボが前記の山地渓流に広く分布していることや後ばねが黒化していて、わが国の他の地方にすむも

のとは明らかに区別されるところからシコクウラゴマダラシジミという亜名のある珍しいチョウも少なからず生息することが判明している。

また寒地性の珍しいエゾゼミ、キムネアオハムシ、ブナトビハムシ、スジボソヤマキチョウ、ミスジチョウ、シータテハ、ヒメキマダラヒカゲなど多くの種がしられているが、これらは普通本邦の中部山岳地方や四国中央山脈の亜高山帯に生息する、いわゆる北方系の昆虫である。

一方その山麓地や渓谷にはイシガケチョウ、ナガサキアゲハ、ツマグロヒョウモン、ムラサキツバメ、ウラギンシジミ、クロコノマチョウ、ラミーカミキリ、トゲナナフシ、オオキンカメムシなど顕著な暖地性の昆虫が広く分布している。

その他日本で最も美しいといわれ、わが国の代表として先に国蝶に指定せられ切手の図案にも使用されたオオムラサキや、その優美な姿はオオムラサキに勝るともいわれ蝶類収集家に珍重されるミヤマカラスアゲハもともに川内町の山地帯に多数生息していて、注目されている。

(2) 主な採集地案内

イ 井内峠方面

アザミやツツジ類が咲きはじめる四月下旬～五月にかけては山麓地一帯に、それらの花を求めてミヤマカラスアゲハ、カラスアゲハ、オナガアゲハ、クロアゲハ、アオスジアゲハ、クモガタヒョウモン、アオバセセリなどが多く集り、山地帯に入るとウツギ類の花にサカハチチョウ、トラフシジミや微小な甲虫、ハチ類などがよく訪れている。

渓流上にはゆるやかに飛んでは、すぐ岸辺の岩上や植物の枝葉などに静止する美しいミヤマカワトンボ、カワトンボ、これらとは対照的に、その渓流上を実に敏速に飛ぶムカシトンボの姿もとに観察される。なおこれににたダビドサナエやさらに大形のヤマサナエなど普通なサナエトンボ類も岩上や路上、植物上など各所に多産する。

夏季に入り谷間のヤマアジサイやノリウツギ、リョウブなどが咲きはじめるとオオヨツスジハナカミキリ、ヨツスジハナカミキリ、マルガタハナカミキリ、フタスジハナカミキリ、クロハナカミキリやヒメハナカミキリの仲間、ハナムグリ、カミキリモドキ類などの甲虫が沢山訪れている。

また山頂付近にみられるオカトラノオやハンカイソウの花にはミドリヒョウモン、ウラギンヒョウモン、ウラギンスジヒョウモン、ツマグロヒョウモンなどヒョウモンチョウの仲間が多数みられ、陣が森に通ずる峯道やその樹林内では、ときに優美なアサギマダラの群集する姿をみることもできる。

ロ、白猪の滝方面

川内町では最も古くから昆虫の調査研究がおこなわれたところでウラゴマダラシジミ、ミスジチョウ、スジボソヤマキチョウ、ミドリシジミの仲間など注目すべき種が多く採集されているが、その植物相は戦前戦後の伐採により、みるかげもなく一変し、近年は殆んど造林地化されつつあるので惜まれている。

それでもキブシの花の咲きはじめる早春の頃には、その花を訪

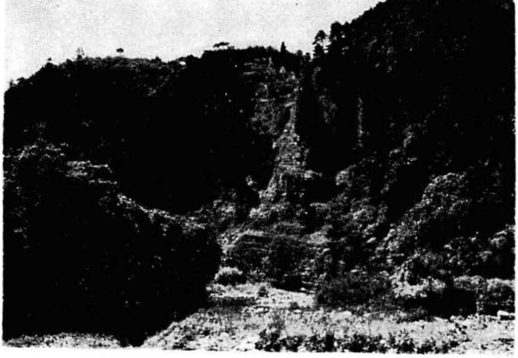
れるコツバメやトラフシジミ、またクヌギ林の近くを飛びまわるミヤマセセリ、各種の草花に吸蜜にくるツマキチョウやビロウドツリアブなど春の昆虫の代表者は一通りみることができる。
　五月に入ると美しいミヤマカラスアゲハやアサギマダラ、アオバセセリなどもよくみられ、夏季になると滝の近くを舞うナガサキアゲハやときにイシガケチョウの姿も観察される。
　この谷間には薪炭用の雑木がよく切りだされていて、それらに集るセダカコブヤハズカミキリ、ニセビロフドカミキリ、ヒメヒゲナガカミキリやゾウムシ、タマムシ、ゴミムシダマシなど甲虫の仲間も多数生息している。

ハ、黒森峠方面

　各所に雑木林が残されていて、昆虫はかなり豊富であるが、特にクリの花の咲く六月頃になると、その花にはチョウ、ハチ、ハナアブ、甲虫などの仲間が多数訪れ、それらとともに珍しいウラゴマダラシジミ、オオミドリシジミの姿もときにみることができる。
　夏に入りクヌギ、アキニレなどの樹液がではじめるとクワガタムシ、カブトムシ、ゾウムシの仲間がよく集り、それらとともに仲よく吸蜜している美しいオオムラサキをみることができる。
　一方樹林内にはクロヒカゲモドキが多産し、山頂付近ではヒメキマダラヒカゲ、ミスジチョウ、シータテハもみられ、スギやヒノキの大木の梢ではギ………とにぶい連続音をだして鳴く、エゾゼミの声もきかれる。（楠　博幸）

三、地質・鉱物之部

　桜三里から土谷を経て南下した中央断層線は、問屋の西方で再び西方に向きをかえて、井内谷下部落から重信町へ入っている。この大きな線から西方及び北方の町内の大部分は白亜紀（六千万年の昔）の和泉砂岩層の砂岩頁岩でできている。土谷も松瀬川、北方、南方、則之内、和田丸、惣田谷等皆それである。滝の下の雄大な地層の断層(第十三図)雨滝等所々に産出する三角貝、アンモン貝の化石等すべて、この地層に属するものとして注目すべきであろう。川上の如き平地は勿論現世層で今日文化の最も発達した地域である。こうした一帯はこれを内帯といって、断層線から東、南方を外帯と呼んでいる。落手、土谷から音田にかけては、その東方は大体結晶片岩（約二億年の昔）に相接している。所が狩場附近、井内谷方面は第三紀層（四千



松瀬川滝の下の和泉砂岩の断層　（第十三図）

万年の昔）と並んでおり、それらの頁岩中には木の葉石を産する。海上から上流の滑川渓谷は、この地層からなる奇岩絶壁の変化に富む眺めが人々に顕彰されている。

さて白猪、唐岬の滝から黒森峠、割石峠、井内峠にかけては、安山岩の広大な露出がうかがわれる。この安山岩類は又土谷と大熊城跡、北方とでは、断層線を越えて内帯の方にまで突出している。これも又町内地質の複雑性をもたらした一つの原因であろう。さてその安山岩の周辺には時に砂岩、頁岩を挟んだ凝灰岩類が、井内谷でも黒森道でも至る所によく観察できる。北方の海上には川内温泉がある。滑川の塩ケ嶽には塩の結晶が常に見られる。井内川、表川には山上の輝石安山岩中に含まれていた玉髄が他の転石の間に交って出てくる。

四、付録　町内普通植物目録

	被子植物	
	単子葉類	
1	ラン科	36
2	シヤウガ科	1
3	アヤメ科	2
4	ヤマイモ科	4
5	ヒガンバナ科	2
6	ユリ科	42
7	ビヤクブ科	2
8	ヰ科	4
9	コナギ科	1
10	ホシクサ科	3
11	ツユクサ科	1
12	ウキクサ科	2
13	サトイモ科	5
14	カヤツリグサ科	40
15	禾本科	82
	双子葉植物	
	後生花被区	
1	キク科	55
2	キクヤウ科	10
3	ヲミナエシ科	4
4	ウリ科	4
5	スヒカヅラ科	19
6	アカネ科	15
7	オホバコ科	1
8	ハヒドクサウ科	1
9	キツネノマゴ科	2
10	クマツヅラ科	1
11	イハタバコ科	2
12	ハマウツボ科	1
13	コマノハグサ科	17
14	ナス科	5
15	唇形科	32
16	ムラサキ科	7
17	カガイモ科	5
18	リンドウ科	8
19	フジウツギ科	1
20	ヒヒラギ科	5
21	ハヒノキ科	3
22	エゴノキ科	5
23	ヒルガオ科	2
24	サクラサウ科	3
25	ヤブコウジ科	3
26	イハウメ科	1
27	ツツジ科	16
28	イチヤクサウ科	3
29	レウブ科	1
	古生花被類	
1	ミヅキ科	4
2	繖形科	20
3	ウゴキ科	9
4	アカバナ科	8
5	ミソハギ科	1
6	グミ科	3
7	アリノトウグサ科	1
8	ヂンチヤウゲ科	2
9	クスドイゲ科	2
10	ウリノキ科	2
11	スミレ科	12
12	キブシ科	2
13	オトギリサウ科	5
14	ツバキ科	5
15	サルナシ科	3
16	ホウセンクワ科	3
17	シナノキ科	2
18	アヲカヅラ科	2
19	ブダウ科	7
20	クロウメモド科	5
21	トチノキ科	1
22	カエデ科	16
23	クロタキカヅラ科	1
24	ミツバウツギ科	2
25	ニシキギ科	7
26	モチノキ科	5
27	ハゼノキ科	6
28	ツゲ科	1
29	トウダイグサ科	10

番号	科名	数
30	ニガキ科	1
31	マツカゼサウ科	8
32	ヒメハギ科	1
33	カタバミ科	5
34	フウロサウ科	2
35	センダン科	1
36	マメ科	35
37	トベラ科	1
38	イバラ科	39
39	ユキノシタ科	32
40	マンサク科	2
41	ベンケイサウ科	8
42	十字科	10
43	ケシ科	6
44	イシモチサウ科	2
45	クスノキ科	10
46	モクレン科	5
47	ツヅラフジ科	3
48	ヘビノホラズ科	3
49	アケビ科	3
50	キツネノボタン科	24
51	スベリヒユ科	1
52	ビヤクダン科	1
53	ヒユ科	5
54	カツラ科	1
55	ヤマグルマ科	2
56	ナデシコ科	9
57	ヤマゴボウ科	1
58	タデ科	13
59	イラクサ科	12
60	アカザ科	2
61	ウマノスズクサ科	3
62	ヒツジグサ科	2
63	クハ科	6
64	ニレ科	6
65	ブナ科	11
66	カバノキ科	13
67	クルミ科	3
68	ヤナギ科	6
69	センリヨウ科	2
70	ハンゲシヤウ科	2

裸子植物

番号	科名	数
1	ヒノキ科	2
2	スギ科	2
3	マツ科	11
4	イヌガヤ科	2
5	イヌマキ科	1
6	イチイ科	1
7	イチヨウ科	1

羊歯植物

番号	科名	数
1	イハヒバ科	5
2	ヒカゲノカズラ科	2
3	ゼンマイ科	3
4	ハナヤスリ科	2
5	カニクサ科	1
6	ウラボシ科	46
7	コケシノブ科	4

地衣類

番号	科名	数
1	サンゴコケ科	1
2	モヂゴケ科	1
3	ヨロヒゴケ科	2
4	ツメゴケ科	1
5	イハタケ科	1
6	ウメノキゴケ科	1
7	サルヌガセ科	1
8	ハナゴケ科	3
合計 146		1.002

被子植物

単子葉類

1、ラン科

ナツエビネ
オホヤマサギサウ
ミヤマウズラ
ムカゴソウ
ツチアケビ
クマガイサウ
トケンラン
ムギラン
マメヅタラン
カヤラン
セキコク
キンセイラン
ヒメケイラン
ウテフラン
ヤウラクラン
ツリシユスラン
エビネ
シラン
シユスラン
キンラン
ネジバナ
カキラン
ミズトンボ
トキサウ
ヤマトキサウ
サイハイラン
イチヤウラン
ホクロ
フウラン
サルメンエビネ
ジガバチサウ
セイタカスズムシ
アヲフタバラン
ノビネチドリ
ヒトツホグロ
ヤマザキサウ

2、シヨウガ科

ハナメウガ

3、アヤメ科

ヒアウギ
ニハゼキシヤウ（帰化植物）

4、ヤマノイモ科

ヒメドコロ
カヘデドコロ（葉の附着点の両側に二木のトゲを有す。関東になし、無鋸歯）
キクバドコロ（二木のトゲなく有鋸歯、一名カヘデドコロ葉尖円）
ヤマノイモ

5、ヒガンバナ科

キツネノカミソリ

ヒガンバナ

6、ユリ科

ヤマジホトトギス（花弁反捲せず、花腋生）
ヤマホトトギス（花弁著しく反捲す、花頂生）
タマガハホトトギス（花黄色、無色紫点有り）
ギバウシ（葉身急に拡る）
コバノギバウシ
ウバユリ
カタクリ
ホソバシホデ
ナルコユリ
ミヤマナルコユリ
シホデ
ホウチヤクサウ
ヤブラン
リウノヒゲ
シロバナエンレイサウ
シライトソウ（徳吉に多い）
ミヅギバウシ
サルトリイバラ
ヤマガシウ
ツルボ
ノビル
ノギラン（匍枝をひく、小形、新種）
イハギボウシ
フクリンササユリ（間屋のあたりから出はじめる。）
コオニユリ
トクダマ（栽）
キチジヤウサウ
シヤウヤジヨウバカマ
ノクワンザウ
ヤブクワンサウ
アマドコロ
ユキザサ
テンガヒユリ
ヒメユリ
ノビル
エンレイサウ
ソクシンラン
サルトリイバラ
ヤマラツキヨウ
ツクバネサウ
アサツキ
バイケイソウ

7、ビヤクブ科

ヒメナベワリ
ナベワリ

8、ヰ　科

ヌカボシサウ
ヰ（ホソヰに比して色青く穂疎ら、山地に生ず）
スズメノヤリ
ヤマスズメノヒエ

9、コナギ科

コナギ

10、ホシクサ科

ホシクサ
イヌノヒゲ
イトイヌノヒゲ

11、ツユクサ科

ヤブミヤウガ

12、ウキクサ科

ウキクサ
アヲウキクサ

13、サトイモ科

セキシヤウ（栽培品で斑入り）
ミツバテンナンシヤウ（四国、九州）
ハンゲ
オホハンゲ
ユキモチサウ（鋸歯あるとなきとあり）

14、カヤツリグサ科

イトハナビテンツキ
ヒナスゲ
ヒメシラスゲ
テキリスゲ
イトスゲ
ハリガネスゲ
クロテンツキ
タカネマスクサ
ヒメクグ
チヤガヤツリ
タガネサウ
マツバスゲ
マスクサ
アブラシバ
アゼテンツキ
テンツキ
ヒンジガヤツリ
イトハナビテンツキ
ハタガヤ
ノグサ
コシンジユガヤ
アゼスゲ
ガウソ
ナキリスゲ
アヲスゲ
ヤマヰ
アイバサウ
ヒゴクサ
モエギスゲ
カンスゲ
ミヤマカンスゲ
ナルコスゲ
ジユズスゲ
カサスゲ
アゼガヤツリ
ヒンジガヤツリ
ヒデリコ
アブラガヤ
ヒメゴウソ
ヤハラスゲ（果実とがる、葉狭し、ジユズスゲは葉広し）

15、禾本科

マダケ（鱗片披針形）

オカメザサ（一名ゴエフザサ、有毛、自生のものなし）
メ　ダ　ケ（葉細長く、葉脚やせている）
ヤ　ダ　ケ（ススダケに比して裏白色ならず葉脚広し）
オモゴザサ（新種、茎多分岐葉舌と節に毛あり、葉身には毛なし、質うすく、脈明瞭なり）
タチネズミガヤ
ヒロハノハネガヤ
チヂミザサ
コチヂミザサ
ササガヤ
ミヤコザサ（裏面に毛あり）
スズダケ
チマキザサ
ナルコエビ
ウシクサ
ムツオレグサ
ホガエリガヤ

チカラジバ
クサヨシ
イブキヌカボ
ネズミガヤ
カウヤザサ
オホネズミガヤ
スズメノテツポウ
セトガヤ
ヌ　カ　ボ
ノガリヤス
サイトウガヤ
ヲヒシバ
アゼガヤ
カラスムギ
カニツリグサ
コバンサウ
ヒメコバンサウ
カゼクサ
ニハホコリ
テウセンガリヤス
スズメガヤ
タツノヒゲ
ササクサ
ホガヘリガヤ
ヒメノガリヤス
サヤネカグサ

スズメノカタビラ
ミヅイチゴツナギ
ヒメイチゴツナギ
トボシガラ
スズメノチヤヒキ
カモジグサ
アヲカモジグサ
キツネガヤ
スダレヨシ（イヨダケを今回改称）
ヨシ（地下茎を引く）
ツルヨシ（地上茎を引く）
イタチガヤ
アシボソ
ササガヤ
アブラススキ
オホアブラススキ
メガルカヤ
ヲガルカヤ
ヒメアブラススキ
カリマタガヤ
チゴザサ
コブナグサ
シバ
オニシバ

ナルコビエ
スズメノヒエ
ヌカキビ
イヌビエ
ケイヌビエ
ハヒヌメリ
メヒシバ
アキメヒシバ
エノコログサ
ムラサキエノコロ
キンエノコロ
ヤマカモジグサ
コウヤザサ
トダシバ
イハタケサウ

双子葉植物

後生花被区

1、キク科

カシハバハグマ
ハマカンギク
サハギク
ダンドホロギク（帰化植物）
ハハキク（〃　）
コメナモミ
アキノキリンサウ

コヒマハリ（栽培、ヒマハリの八重のもの）
ハナガササウ（栽培、一名オハンゴンサウ）
ノブキ
モミヂハグマ
ヤマシロギク
モミヂガサ
ヤブレガサ
オホモミヂガサ
ヤブタバコ
センボンヤリ
ヒヨドリバナ
サハヒヨドリ
キクコウハグマ
シウブンサウ
ガンクビサウ
アキノノゲシ
ハルノノゲシ
ヲナモミ
メナモミ
ヲトコヨモギ
ヲケラ
ヒメヒゴタイ
ヒレアザミ

キツネアザミ
スイラン
ヤクシサウ
ヤマニガナ
アキノキリンサウ
デバコモミジガサ
モミジタマブキ
フクワウサウ
ヤマニガナ
ヒメヒゴタイ
ノコンギク（この地方のは凡てノコンギクでコンギクは鹿児島のある北方に限らる。）
オホバヨメナ
シラヤマギク
カセンサウ
ヤマジノギク
ミヤマヨメナ
メタカラサウ
コウゾリナ
コウヤバウキ
ヒロハセンボンギク
ヒメガンクビ（花小、無毛、欠刷大）
サジガンクビサウ
クサヤツデ
ヤマアザミ
ヒメヤマアザミ

2、キキヤウ科

ホタルブクロ
ツリガネニンジン
キキヤウ
タニギキヤウ
アゼムシロ
ツルニンジン
サイヨウシヤジン
シデシヤジン
ヒナギキヤウ
サワギキヤウ

3、ヲミナヘシ科

ヲミナヘシ
ハルヲミナヘシ
ヲトコヘシ
ツルカノコサウ

4、ウリ科

アマチヤヅル
カラスウリ
キカラスウリ
モミヂカラスウリ

5、スイカズラ科

オホデマリ（栽培）
ウスバヒヨタンボク
ヤマウグヒスカグラ（葉面毛あり）
コヤブデマリ（無毛）
ニシキウツギ（始め花白く後赤化するが此の附近は初めより赤し）
ミヤマガマズミ
ムシカリ
ヤブウツギ（毛あり、全面に）
ミヤマシグレ
ツクバネウツギ
コツクバネウツギ
ハコネウツギ
タニウツギ
コバノガマズミ
ガマズミ
ウグヒスカグラ
ヲトコヨウゾメ
タニウツギ（脈にのみ有毛）
キダチニンドウ

6、アカネ科

オホバノヨツバムグラ
ミヤマムグラ
ハシカグサ
ツルアリドウシ
クルマムグラ
アカネ
ヘクソカヅラ
フタバムグラ
ヤヘムグラ
ヨツバムグラ
ホソバノヨツバムグラ
カハラマツバ
キヌタサウ
ハシカグサ
イナモリサウ

7、オホバコ科

オホバコ

8、ハヒドクサウ科

ハヒドクサウ

9、キツネノマゴ科

ハグロサウ
キツネノマゴ

10、クマツヅラ科

クサギ

11、イハタバコ科

イハタバコ
イハギリサウ

12、ハマウツボ科

ナンバンギセル

13、ゴマノハグサ科

キクガラクサ
シホガマギク（風情ある事塩釜の如く、葉も花もよい。）
ムカヒバシホガマギク
オホヒナノウスツボ
クガヒサウ
タチコゴメグサ（鋸歯あり）
ヒキヨモギ
コシホガマ
アゼナ
ウリクサ
サギゴケ
カハジシヤ
ミヤマママコナ
タチイヌフグリ
オホイヌフグリ
イヌフグリ
ゴマクサ

14、ナス科

マルバノホロシ

アヲホウヅキ
ハシリドコロ
クコ
ヒヨドリジヨウゴ

15、唇形科

エゴマとシソの雑種（良臭、有毛）
エゴマ（悪臭―柄に毛あり）
シソ（良臭―無毛）
ツルニガクサ（匍枝あり）
コトヂサウ（鋸歯とがる）
ミゾガハサウ
ラセウモンカズラ（花が羅生門の腕に似ている）
ヒキオコシ
クルマバナ
キランサウ
アキチヤウジ
ウツボグサ
アウギカズラ
ニガクサ
タツナミサウ
シソバタツナミ
カキドウシ
ヤマジワウ
アキノタムラサウ
ハルノタムラサワ
イヌコウジユ
スズコウジユ
ナギナタコウジユ
テンニンサウ
ヤマハツカ
カハミドリ
ジヤコウサウ
ホトケノザ
オドリコサウ
タウバナ
ヤマタウバナ
ミヤマタウバナ

16、ムラサキ科

オホルリサウ
サハルリサウ
ヤマルリサウ
ミヅタビラコ
キウリグサ
ハナイバナ
カキノキダマシ

17、カガイモ科

スズメノオコゲ（花は上に穂をなす、いよかずらとの区別）
ムラサキイヨカズラ（花色紫色）
オホカモメヅル
イケマ
フナバラサウ

18、リンダウ科

センブリ
リンダウ
フデリンダウ
ハルリンダウ
ツルリンダウ
イヌセンブリ
ホソバリンダウ
アサマリンダウ

19、フジウツギ科

アヰナヘ

20、ヒヒラギ科

コバノトネリコ（一名アヲタゴ）
ツクシトネリコ
ミヤマイボタ
ヒヒラギ
イボタ

21、ハヒノキ科

ハヒノキ
タンナサワフタギ（葉の鋸歯大、果実黒色）
サワフタギ（葉の鋸歯小、果実青色）

22、エゴノキ科

ケアサガラ
アサガラ
コハクウンボク
エゴノキ
ハクウンボク

23、ヒルガホ科

ヒルガホ
ネナシカヅラ

24、サクラソウ科

コナスビ
ミヤマタゴボウ
ヲカトラノヲ

25、ヤブコウジ科

ツルコウジ
ヤブコウジ
イヅセンリヤウ

26、イハウメ科

イハカガミ

27、ツツジ科

オンツツジ（葉大、葉柄少毛（10―8））
レンゲツツジ（栽培、黄花多い）
コバノミツバツツジ（葉少、葉柄多毛、10）
トサノミツバツツジ（葉中、無毛、10）
キシツツジ（中、四国産、淡紫色、東京にてワカサギと云う）
ナツハゼ
ネジキ
アセビ
バイクワツツジ
ヤマツツジ
ツクシシヤクナゲ
シヤシヤンポ
スノキ
ホツツジ
ミツバツツジ（褐毛あり、♂五本）
ドウダンツツジ（花房状）

28、**イチヤクサウ科**
イチヤクサウ
ギンリヤウソウ（花弁は五枚なれどコギンリヨウサウは三枚）
ウメガササウ

29、**レウブ科**
レウブ

古生花被類

1、**ミヅキ科**
クマノミヅキ（葉は対生）
ミヅキ（葉は互生）
ヤマボウシ
ハナイカダ

2、**繖形科**
ハナウド
イハセントウサウ
イヌトウキ
ノチドメ（毛あり）
ミヤマチドメグサ
ノダケ
ヤマニンジン
セリ
ミツバ
ムカゴニンジン
カノツメサウ
オホバチドメグサ
ツボグサ
ヤブニンジン
ヤブジラミ
オヤブジラミ
ミシマサイコ
ウマノミツバ
ダケゼリ
シラネセンキウ

3、**ウゴキ科**
キヅタ
コシアブラ
ハリギリ
ウド
タラノキ
トチバニンジン
サイヤウチクセツニンジン
キミノチクセツニンジン
イモノキ

4、**アカバナ科**
ウシタキサウ（毛多くビロードの縁）
タニタデ
ミヅユキノシタ
チヤウジタデ
オホマツヨヒグサ
ミヤマタニタデ
イワアカバナ
ミヅタマサウ

5、**ミソハギ科**
ミソハギ

6、**グミ科**
クマヤマグミ（従来コウヤグミとせるもの新種と決定）
アキグミ
ナハシログミ

7、**アリノトウグサ科**
アリノトウ

8、**ヂンチヤウゲ科**
コセウノキ
ガンピ

9、**クスドイゲ科**
イヒギリ（葉身と葉柄との連るところに二の蜜線あり）
クスドイゲ

10、**ウリノキ科**
ウリノキ
モミチバウリノキ

11、**スミレ科**
アギスミレ
タチツボスミレ
ツボスミレ
フモトスミレ
コスミレ
スミレ
ケマルバスミレ
コミヤマスミレ
シハイスミレ
シコクスミレ
フモトスミレ
ヒナスミレ

12、**キブシ科**
キブシ
コバノキブシ

13、**オトギリソウ科**
コオトギリ
トモヱサウ
オトギリサウ
コケオトギリ
ヒメオトギリ

14、**ツバキ科**
ツバキ
ヒメシヤラ
ヒコサンヒメシヤラ（樹皮黒く葉小形）
ナツツバキ
ヒサカキ

15、**サルナシ科**
ミヤママタタビ（葉は白くならぬ）
サルナシ
マタタビ

16、**ホウセンクワ科**
ハガクレツリフネ
ツリフネサウ
キツリフネ

17、**シナノキ科**
カラスノゴマ
ボダイジユ（栽培）

18、**アヲカズラ科**
アハブキ
ミヤマホウソ

19、**ブダウ科**
エビヅル
ノブドウ
ケサンカクヅル（南方の分子）
ヤマブドウ
サンカクヅル

ツタ
ヤブカラシ
20、クロウメモドキ科
ケンポナシ（ケンポ＝支那語の癩病の意）
ケケンポナシ（葉裏、葉柄及び果実有毛）
ネコノチチ
イソノキ
クマヤナギ
21、トチノキ科
トチノキ（栽培）
22、カヘデ科
コミネカヘデ
チドリノキ
ウリカヘデ
メグスリノキ
テツカヘデ
エンコウカヘデ
イタヤカヘデ
ウリハダカヘデ
コハウチハカヘデ
カジカヘデ
イロハモミジ
ヒナウチハカヘデ
アサノハカヘデ

エンコウカヘデ
メグスリノキ
ミネカヘデ
23、クロタキカヅラ科
クロタキカズラ
24、ミツバウツギ科
ミツバウツギ
ゴンヅホ
25、ニシキギ科
ツルウメモドキ
ニシキギ
サハダツ
ツルマサキ
ツリバナ（果実円形）
コマユミ（果実角形）
マサキ
26、モチノキ科
クロガネモチ
コバノイヌツゲ（イヌツゲの変種、葉小）
イヌツゲ
アヲハダ
ソヨゴ
27、ハゼノキ科
ウルシ
ヤマウルシ

ヌルデ
ツタウルシ
ヤマハゼ
ハゼノキ
28、ツ ゲ 科
フツキサウ
29、トウダイグサ科
ニシキサウ
コニシキサウ（葉に斑点あり）
ユズリハ
ヒメユリハ
シラキ
アカメガシワ
ヤマアヰ
エノキグサ
ノウルシ
ナツトウダイ
30、ニガキ科
ニガキ
31、マツカゼソウ科
カラスザンショウ
マツカゼサウ
キハダ
ハヒミヤマシキミ
サンセウ

コクサギ
イヌザンセウ
フユザンセウ
32、ヒメハギ科
ヒメハギ
33、カタバミ科
アカカタバミ
タチカタバミ
ミヤマカタバミ
コミヤカタバミ
ムラサキカタバミ
34、フウロサウ科
コフウロ（小葉3）
ゲンノショウコ（フウロサウはゲンナイフウロの別名）
35、センダン科
センダン（栽培）
36、マ メ 科
スズメノエンドウ
カスマグサ
カラスノエンドウ
ツルナシヤハズエンドウ
ヒメクズ
サイカチ（栽培）

ヤブマメ
ネムノキ
カハラケツメイ
クララ
ミヤコグサ
ヤマフジ
コマツナギ
クサネム
ヌスビトハギ
ネコハギ
メドハギ
マルバハギ
ヤマハギ
ヤハズサウ
オホバクサフヂ
ホドイモ（三、五葉によりて別種とする人有るが誤りなり）
ヤマフヂ（有毛）
ナンテンハギ
ノササゲ
タンキリマメ
マキヱハギ
ヤブハギ（下葉のみ大形、ヒロハヌスビトハギは上迄大形）

イヌエンヂユ
ジヤケツイバラ（五、六月花黄を咲かす）
フジキ
クズ
ナツフジ
キハギ
ユクノキ

37、トベラ科

トベラ

38、イバラ科

ミヤマフユイチゴ
ヤブヘビイチゴ（果実赤色、ヘビイチゴは種子白し、且つ平地に生ず）
クサイチゴ
バライチゴ
ヒメバライチゴ
ヤブイバラ
ヤマブキシヨウマ（側脈多、子房2）
ザイフリボク
ウラジロノキ
ウシコロシ
カナメモチ
ヤマブキ
フユイチゴ
エビカライチゴ
クマイチゴ
ヘビイチゴ
ヤブヘビイチゴ
オホズミ
シモツケ
ヲヘビイチゴ
ビワ
キジムシロ
ワレモカウ
ツチグリ
キンミズヒキ
ナガバノシロワレモカウ
シモツケサウ
ウハミズザクラ
エドヒガン（これよりダシレザクラを生ず）
コバノテリハノイバラ
イブキシモツケ
リンボク
イヌザクラ
ヤマザクラ
ニガイチゴ
ナナカマド
ナンキンナナカマド
ダイコンサウ
ヒメダイコンサウ

39、ユキノシタ科

ミヤマネコノメ
キンバイサウ
トリアシシヨウマ
ダイモンヂサウ
ウチハダイモンヂサウ
シラヒゲサウ
クマイチゴ
ナガハモミヂイチゴ
チヤルメルサウ
ゴトウヅル
シラヒゲサウ
ウメバチサウ
ヤシヤビシヤク
ジンバイサウ
イハガラミ
ガクウツギ
アハモリシヨウマ
ユキノシタ
ギンバイサウ
ネコノメサウ（葉は小対性）
ヤマネコノメサウ（五生）
ミヤマネコノメサウ（葉は大対生）
バイクワウツギ
シコクバイクワウツギ
ヤシヤビシヤク
クサアヂサイ
ウラジロウツギ
コウツギ
マルバウツギ
ノリウツギ
フユイチゴ
マルバフユイチゴ

40、マンサク科

マンサク
イスノキ（ヒヨンノキとも云う）

41、ベンケイサウ科

マルバノマンネングサ
イハベンケイサウ
タカネマンネングサ
ツメレンゲ
ヒメレンゲ
チヤボツメレンゲ
コモチマンネングサ
メノマンネングサ

42、十字科

スズシロサウ
ヤマハタザホ
コンロンサウ
ナズナ
タネツケバナ
イヌガラシ
ジヤニンジン
ワサビ
イハハタザホ
ミヅタガラシ（と呼ぶはオランダガラシ）

43、ケシ科

ヤマキケマン
ミヤマキケマン
クサノワウ
ヤマブキサウ
キケマン
ヤブエンゴサク

44、イシモチサウ科

イシモチサウ
モウセンゴケ

45、クスノキ科

ヤマコウバシ

カゴノキ（コガノキとも云う）
カナクギノキ
ダンコンバイ
アブラチャン
クロモジ（葉淡緑、毛なし）
オホバケクロモジ（裏に毛あり）
ケクロモジ（裏白し）
シロダモ
シロモヂ

46、モクレン科

シキミ
サネカヅラ
マツブサ
タムシバ
ホウノキ

47、ツヅラフジ科

ハスノハズラ
アヲツヅラフジ
オホツヅラフジ
（Sinomeninを含む）

48、ヘビノホラズ科

メギ
ルキヨウボタン
ヘビノボラズ

49、アケビ科

アケビ
ミツバアケビ
ム　ベ

50、キツネノボタン科

キツネノボタン（花柱まがる）
ケキツネノボタン（花柱直生、開花早し）
ミヤマカラマツ
タカネハンショウヅル（複葉三枚）
ミヤマハンショウヅル（複葉九枚）
トリガタハンショウヅル（葉軟で切れ込み多し）
レイジンサウ
ヤマシヤクヤク
ハンショヅル
サラシナショウマ
ユキワリイチゲ
オキナグサ
シウメイギク
ヒメウヅ
シギンカラマツ
アキカラマツ
サラシナシヤウマ
イチリンサウ
ヒキノカサ
タガラシ
ボタンヅル
ルヰヨウショウマ
トリカブト
サバノヲ

51、スベリヒユ科

スベリヒユ

52、ビヤクダン科

カナビキサウ

53、ヒユ科

イヌビユ
ヰノコヅチ
ヤナギヰノコヅチ
ヒユ
ノゲイトウ

54、カツラ科

カツラ

55、ヤマグルマ科

ヤマグルマ
フサザクラ

56、ナデシコ科

ミヤマハコベ
フシグロセンノウ
ノミノフスマ
ハコベ
ウシハコベ
ミミナグサ
ツメクサ
ノミノツヅリ
カハラナデシコ

57、ヤマゴボウ科

マルミノヤマゴボウ

58、タデ科

キンミヅヒキ（葉小形毛少し）
ホソバヤノネグサ
ネバリタデ（有毛）
マダイワウ
アヰタデ（タデの変種）
イタドリ
ミヅヒキ
ハルトラノヲ
ヒメスイバ
スイバ
ギシギシ
タニソバ
ハナタデ

59、イラクサ科

メヤブマヲ
カラムシ（ラミーは茎大にして葉円形、花枝多し）
カテンサウ
ヤマミズ
ミ　ヅ
ヤブマヲ
アカソ
コアカソ
イラクサ
ウハバミサウ（茎赤色）
ヤマトキホコリ（茎緑色）
ミヤマミヅ

60、アカザ科

アカザ
コアカザ

61、ウマノスズクサ科

ウマノスズクサ
カンアフヒ
フタバアフヒ

62、ヒツジグサ科

ジユンサイ（栽培）
ハ　ス（栽培）

63、クハ科
カジノキ（裏毛多、♀♂別株托葉大、若葉は多くきり込む）
カウゾ（♀♂同株毛少し）
イタビカツラ
ヒメイタビ
ヤマグハ
イヌビワ

64、ニレ科
エゾエノキ
ケヤキ
ムクノキ
ハルニレ（分布少し）
アキニシ

65、ブナ科
ミヅナラ（オホナラと同じ）
ブ　ナ
イヌブナ
アラカシ
ツクバネガシ
シリブカガシ
ミヅナラ
シラカシ
ウラジロガシ
ウバメガシ（栽培）
スダジイ

66、カバノキ科
アヅサ（ヨグソミネバリのこと、弓の材）
ヤマハンノキ
ケヤマハンノキ（毛多し）
カハラハンノキ
ツノハシバミ
イハシデ（石灰岩地方にあり）
アサダ
イヌシデ
アカシデ
サハシバ
クマシデ
ヤシヤブシ（果実は上向く、ヒメヤシヤブシは下向く）
シラカバ（栽培）

67、クルミ科
サハグルミ
オニグルミ
ノグルミ

68、ヤナギ科
ネコヤナギ（大宝寺）
テウセンネコヤナギ
ヤマヤナギ（葉脚心臓形）
オクヤマヤナギ（葉楕円形）
ヤマナラシ
シバヤナギ

69、センリヨウ科
ヒトリシズカ
フタリシズカ

70、ハンゲシヤウ科
ハンゲ
ドクダミ

裸子植物門

1、ヒノキ科
ヒノキ（栽培）
アスナロ（栽培）

2、ズギ科
ス　ギ（栽培）
コウヤマキ（栽培）

3、マツ科
フジマツ（栽培）
アカマツ
クロマツ
ゴヨウノマツ（果実円く葉は白く柔い。栽培）
モ　ミ
ウラジロモミ（果実緑色）
イブキビヤクシシ（栽培）
ツ　ガ
コメツガ（幼条に毛あり）
コウヤマキ
バラモミ（鼻上に一本あり）

4、イヌガヤ科
イヌガヤ
ハヒイヌガヤ

5、イヌマキ科
イヌマキ（栽培）

6、イチヰ科
カ　ヤ

7、イチヨウ科
イチヨウ（栽培）

羊歯植物

1、イハヒバ科
イハヒバ
カタヒバ
クラマゴケ
タチクラマゴケ
ヒメクラマゴケ

2、ヒカゲノカズラ科
マンネンスギ
トウゲシバ（従来のホソバトウゲシバにてトウゲシバはオホトウゲシバと云う）

3、ゼンマイ科
ヤシヤゼンマイ
ゼンマイ
ヤマトリゼンマイ

4、ハナヤズリ科
ナツノハナワラビ
フユノハナワラビ

5、カニクサ科
ツルシノブ

6、ウラボシ科
イヌワラビ（嚢推中軸脈に接近、葉柄の鱗片は広くてうすし）

ヤマイヌワラビ（嚢推接近せず、鱗片は尖る、且叢生す）
イハヘゴ（タニヘゴはヤハズ形の全形、此は被針形）
ノキシノブ
ホソバイタチシダ
ヒメウラジロ
エビラシダ
ハコネシダ
フクロシダ
ヒカゲワラビ
ウスヒメワラビ
キヨタキシダ
ヒロハヤブソテツ
チヤセンシダ（葉の中軸は三陵をなす）
コヤマイヌワラビ
ヌリワラビ
イハオモダカ
ヒメワラビ
ジユウモンヂシダ
ヒメトラノオ
クモノスシダ
ツルデンタ
ヒメシダ
シケシダ
シラガシダ
クマワラビ
イヌシダ
オシヤグヂデンダ
イハトラノヲ
イハデンダ
ミドリカナワラビ
サジラン（葉脈網目をなす）
オホバノイノモトサウ
（小片は三出すマツザカシダは二出）
ホソバシケシダ
コガネシノブ
サトメシダ
ヒロハイヌワラビ
ヘビノネゴザ
ヤマソテツ
ホテヰシダ
ナガミシシラン
ヤハラシダ
ハリガネワラビ
オホヒロハイヌワラビ
カラクサシダ
オホヒメワラビモドキ

7、コケシノブ科

コウヤコケシノブ
ハヒホラゴケ
ホソバコケシノブ
ウチハゴケ

地衣類

1、サンゴゴケ科

サンゴゴケ

2、モヂゴケ科

モヂゴケ

3、ヨロヒゴケ科

カブトゴケ
ヨロヒゴケ

4、ツメゴケ科

ツメゴケ

5、イハタケ科

イハタケ

6、ウメノキゴケ科

ウメノキゴケ

7、サルヲガセ科

サルヲガセ

8、ハナゴケ科

ハナゴケ
ヤグラゴケ
キゴケ

家屋防風林の研究

（伊予史談）　喜多村稔

一、緒言

社会科に於ける郷土研究の一端として、母屋を取巻く垣根について、その方向と風向との関係を究明し、更に農村の住居改善にも寄与出来得るようにという見地から研究した。

当三内村は道後、道前平野、又石鎚おろしに可成深く関係があると思う。故に筆者は夏季休暇を利用して、磁石と筆記用具を携へ、村に出掛けて研究した僅かばかりの資料によって発表するわけであるが、尚今後近隣地にこの研究を伸ばす予定である。

ここに不備な点が多々あると思うが、読者の助言をお願いして止まない。

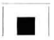
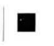
二、家屋と垣根の位置

先づ部落別に家屋と垣根との配置がどのような方向につくられ

ているかについて、三七五家屋調査の結果が、六一%が垣根を有している。特に音田部落五七軒のうち、垣根なきものは七二%に及んで居るが、これは、家屋が密集して居て、二〇年前までは商業によって生活して来た部落で、従って現在でも非農家が多いのである。次に日浦部落も五七%と現われているが、この部落は地理的条件に恵まれる所が大きく、その必要が薄いのである。

実態調査は細かい数が出たが、東側は納屋若しくは倉等で大低囲われているので、実際は、次の第一表によるものである。

第一表

家屋と垣根の配置	家屋数
	26.6%
	17.5%
	17.0%
	14.8%
	10.5%
	9.2%
其の他	4.4%
小　計	100%

(北)
N↑

(註) 本村は主風位E(年間を通じて)が多い。
詳細は次の項にて説明する。

併し、この一表では垣根そのものの、実態を把握することが出来ないので、どの方向に垣根が使用されて居ないかについて、数字をあげて見たい。

南あき　六九・四%　　西あき　六〇・三%
北あき　五一・五%　　東あき　五〇・二%

これによって第一表と関連して、考えて頂ければ、尚明確なものが理解せられる事と思う。

配置に於て、考えられることは、自然的な条件のもとに、景観を生かしつつ、本来の趣旨にも沿うようなものが望ましいし、又今後の改善が、何等かの形で生かされるよう、ありたいと考えるものである。

三、垣根の種類

垣根には二種類ある。それは高いのと低いのに分れ、高いのは母屋の屋根位か、或いはそれより少し低いのがある。その高いのは、主として防風の役目をなし、低いのは外観をよくするような目的にも使用され、従ってこれには手入れがなされたものが多いが、高いのは自然のままのものが多い。

第二表

杉	65.5%
板	11.4%
土	7%
その他	16.1%

この村に於ては第二表に示された如く、圧倒的に杉がその多くを占め、西方に僅かばかりの竹、桧、椿、わら等が混じるばかりである。

山にも杉は、最も多く植樹されて居て、ここに於ても森林の植物との一致が見られる。

又杉は寒地植物であり、積雪には強い。このような点からも利用されたのではなかろうか。

中でも土塀(白壁)は可成り富有なものが、宅地の全周囲をとり囲んで居るのが、稍目立って居る。

四、垣根の機能

次に垣根を、実際に各方面から、機能的に分析して、明にしたい。

1、防　風

垣根の第一の機能と言えば昔も今も同様に、防風が役目だと云えるだろう。ここで第一表から、風向と垣根との関係を考察する。

風力及び風向は何と言っても、統計を頼るより仕方がない。そこで徳吉にある三内東谷小学校の気象観測所（松山測候所指定）に於て、風力（相当風測）及び風向の統計に基づき、吟味して行こう。

第三表

月	主風向	
1	E	
2	E	暴　E
3	E	暴　E
4	E	
5	E	
6	E	
7	SE	
8	E	暴SW
9	E	
10	SE	
11	E	暴　S
12	E	

一年間の多風向

（（注）暴とあるは相当風速　のものである。

第三表のように七、十月を除けば、主風向は凡て東風である。尚統計が明らかでないのだが、過去五年間のものを見ても、この事が同様に言えるのである。

一表及び三表を併せて考えて見るとき、垣根は主風向の風止につくられていることがわかる。

又暴風の四月を見ても、共通に東風が多い。このように、案外平凡に見える垣根に於ても、防風が成程第一の役目であることがうなづける。即ち、防風そのものは、風向に対して直角に作られている場合により、その目的が達し得るわけである。

併し、防風という大きな立場からであれば単なる垣根位ではその効果は薄い。出来れば関東・北陸等に多く見られる屋敷森迄運んでくれば容易に解決出来るだろう。

2、防暑防寒

垣根は暑さ、寒さを和らげる役目をも果して居る。甚だ簡単なものであるようだが、中は外に較べて多少の気温の変化が見られる。空気の乱流等も垣根によって弱まり、又夏の直射日光も幾分遮ぎる機能を持っている。

3、防砂、防塵、防雪、防火

垣根は直接風を防ぐと共に舞い立つ砂や塵などを防ぐ役目がなされる。又此地方には降雪が多いので、これが、防雪としての垣根が注目される。宅地内に於ても垣根の有無によって、その積り方は異るわけである。次に防火としても何等かの影響があるのではないか。特に火災跡などで見られるように家屋は全部焼失して居るのに、周囲の土塀のみが残っているが、これなどが巧く防火壁に、利用出来るのではないかと思うのである。

4、外観

以上のほかに住家（宅地）とその他の区切りを付けて住居らしく、又風致を考え併せて、樹木を用い、外観をよくする趣きがある。

5、其の他として、宅地へ通ずる道以外から濫りに出入させないという、盗難予防の点からと、又垣根は、時折間伐したり、風で倒れたものは燃料として用いる。尚杉の落葉は手近かな焚付として、使用されて居る。

五、垣根の長所・短所

垣根は、確かに意味があり、必要とされて来たが、具体的にどのような長所があり、短所があるかを検討して、方向をはっきりさせたい。長所は前項で述べた機能と関連して考えられるから、重複を避けて、ここでは簡単に項目をあげるのみとする。

長　所　　1風除け　2宅地の区切り　3盗難予防　4外観
　　　　5防塵、防砂、防雪、防火　6防暑、防寒

色々の長所があげられたが、同時に又短所としてあげられ、悪害として考えられることも多く存在するわけである。

短　所

1、換気作用　巾の狭い単なる一列の植込みの垣根ではあるが日光を遮ぎり、換気を弱めるものである。特に大家になると、周囲土塀にて囲まれ数多い母屋の室々にまで、通風が行なわず、非常に有害である。この空気の流通なき弊害は今更述べるまでもない。

2、採光作用　この地方では年間を通じて、日照時間は六時間程度であると云われているが、宅地内の湿度も高く、冬は雪があり、光を遮断した暗い生活になり勝である。

以上の短所は只単に垣根だけの問題ではなく、結局農家の住居の、徹底的な改良が要求されるのである。今日の屋敷の状態が抜けきらず停頓しているのは遺憾な問題である。最近の農村に結核患者の数が増加しつつあるのも又考えるべきことで、これは食生活も相当問題とされるだろうが、要するに、家屋と保健は一連のものであろう。

斯くの如く、ほかに得ることの出来ない長所と共に、又大きな短所をも、存在して居ることが理解せられるのである。

六、結　論

以上、家屋防風林即ち垣根について風向と方向の関係を主題として、その長所短所、欠点又如何に利用されて来たかについて考察して来た。

今日の農村の課題として、住居の改良が必至の条件である。恐らく現今の状態では、文化生活は愚か年々憂うべきことが増加することは、疑えない事実としてよいだろう。

尚この研究には、まだ残された問題が多分にあるが、この研究の一端が何等かの形で社会科の参考となれば筆者の全く幸と思うところである。

一九五〇年（昭和二六年）二月十日稿

こんぴら街道

北川淳一郎

（「愛媛」第一巻第一、二号
昭和二十六年四・五月）

太平記や源平盛衰記を読んでいると、よく「街道一の武者」だとか、「海道一の弓取り」と云う言葉が出て来る。私は幼い頃父から「川上村の何某さんはコンピラ街道切っての智慧者で、お客の応対をしながら手は算盤をおき、それでいて街道を通る人が誰れだか、ちゃんとわかっている」と話されたので、まるで聖徳太子さんみたいだなと感心したものだった。この時以来「コンピラ

街道」と云う言葉が私に親しいものとなった。それから後、私はこのコンピラ街道と云う言葉が、人々によってしばしば語られるのを聞いた。「あそこの娘さんは街道一の器量良し」だとか、「あのうちはおやけで、街道切っての徳米持ちだったが、いまの旦那が女道楽で、とうとう何百年と続いた旧家もつぶれてしまった。先代の誰とかさんは一生つぎの当らん股引を履いたことも無いほどな始末人だったのに、時世時節には勝たれんものだ」など時折人が語るのを耳にしたのである。

私の生い育った村は三内村（いまの温泉郡川内町）で、コンピラ街道の道筋に接近していた。まだその頃は明治の三十年代のこと、川上、桜三里、大頭の新道さえ開設されない以前のことであるから、旧時代のニュアンスが多分にこのコンピラ街道に漂っていたためでもあろう。（中略）

いったい、コンピラ街道とは、勿論讃岐の金毘羅様が終点なのであるが、そのどこが起点なのであろうか。私はてまえの起点と終点とを逆にコンピラさんを起点として考えて見よう。

琴平町、善通寺、本山、和田浜を経て伊予路に入る。川之江、それから豊田、関の峠、崖の下、大町（西条）、小松、湯谷口。ここからが桜三里。川上から久米、松山御城下。徳川末期に出た「大日本細見道中図鑑」と、明治十一年版の「海陸駅路宝鑑」には以上書いたような駅名がのっている。このコンピラ街道にはところどころ、「こんぴら大門より何里」又は「こんぴら大門へ何里」の石標が建っているし、四つ辻や町の出入口などには石灯篭があって、それに大きな文字で「石、金、和」（石鎚、金毘羅大権現、和霊大明神のイニシアチーブ）と云う文字が彫りこまれている。（中略）

川上から山かいに入って一里。桧皮峠を越え、温泉郡と周桑郡との郡境にあった曙橋が懐かしい。橋の下の中山川は深い淵になっていて、清冽な水を湛えているし、それに多く楓の木だったと思うが、青い緑が橋にも淵にも覆いかぶさるようになっていた。そしてこの橋（田鋤の橋とも云った）は、洛東東福寺の通天橋のように屋根のついた古雅なものだった。私がこの橋を初めて知ったのは尋常二年の時、この橋とそれから少し東の千把が嶽と千原銅山え遠足に行った時のことだった。もう今から六十余年の昔になる。

この曙橋から東三里、道前平野の西端来見までの山峡の道がいわゆる「桜三里」である。いまはもうその桜の並木も殆んど枯れ果てたし、桜並木にかまわず新道がついたので、いまの人々にはこの桜三里の昔の面影を想像することさえ出来なくなったが、永日の春、暑熱の夏、三里のこの谷間道を草鞋がけで歩いた昔の旅人にとっては、この三里の桜並木がどれだけ大きなよろこびであり、慰めであったであろう。（下略）

平家谷を訪ねて

大内優徳

（「愛媛」昭和三十九年九月一日所載）

海上。もう四年程前になるが、秋二度、桧皮峠を越えて中山川の上流、滑川奥にある海上（かいしょう）を訪ねたことがある。地図を見て、山中に海上と云う地名に興味をもち、平家落人にまつわる伝説、万才などについても大分以前に話を聞いて、興味をもっていた。笠方ダムからの送水、発電の工事も進んでいると聞き、今のうちにと思って台風で落手からはバス不通と云ったが、初秋に訪ねてみた。

落手で道連れになった七十才くらいの古老に、二里ほどの道を案内してもらうことになった。この人は、途中別の谷に行くのであったが、海上を訪ね滑床の景勝を探るつもりだと話すと、海上に知人もある、行を共にしたい、と途中知り合の家に荷物を預け、弁当だけ持って一緒に歩いた。これが道連れと云うものか。滑川沿道、海上のことなど実によく知っていて話してくれた。北川先生御編集の川内町誌を見れば詳細わかると云った。ウカツであった。帰ると早速一本購めて興ぶかく通読した。海上に着くと、この人の知合の八十近くの人を案内にして、三人で滑床の景勝を半日満喫した。実に親切な人々であった。

さて海上は眺望のよくきく高台にある。海上とは附近の崖に潮がふくからと。なるほど白いあとがある。家並みは落付いた風格のあるもの。平家の落人の来たところで、源氏が追ってきたとか、旧家には刀、鏡などが伝わっているとか云われているが、センサクして聞くのも何だか秘境扱いして、今時失礼と思ったのでやめた。晩秋にもう一度訪ねたのは、海上万才と云われるものを聞いておきたいから。静養中の万才のベテランの古老に、文句を思い出してもらい話を聞いた。ここでは大事な娯楽で民俗芸能と云うべきもの。

海上はもと、もう一つ向うの谷から越して来た者がここに落付き、滑川流域はここから開けていったとも云う。平家谷、どこにもあるように、ここでも落人が源氏に攻められて敗退した悲話がある。ここに来る沿道を少し入った所に、九騎などと平家伝説のあるところもある。かっては秘境であったろうと思われるが、今は発電工事などで時代の脚光をあびている。晩秋の日ざしに家の柿は赤く熟し、軒につるされた唐キビがキレイな色を見せている風景は実によかった。（後略）

七月の滑川

八木繁一

落出で国道十一号線に別れをつげ、滑川渓谷へは入るのだが道は急に悪くなり、バスの動揺と砂ぼこりが著しくなる。所がバスは右手に滑川の清流を見下して緑樹の間を縫うように山狭奥深く走るのだから、ここの快味は十一号線の本通りでは到底味うこと

はできない。さて海上に下車した一行百三十名はこれから往復一・五キロの所謂滑床渓谷の探勝に出発したのであった。

落出から海上までの流れは、殆んど緑泥片岩の所であるから小さい中山川の感そのままである。海上から上流はその殆んどが第三紀の礫岩砂岩頁岩の互層で、入口の塩ケ岳から奥の滝に至る間の奇岩怪石はすべてそれに属するのである。扁平な河床を流れる広い水の流れから又滝をなし、断崖の下には大きな滝壺も見られ、大小様様の欧穴も各所に発達して面白い。奥の滝周辺は幸にも樹木よく繁茂して幽邃そのものである。ここの景観は滑床渓谷中随一だろう。高さ十五・八米の上から落下する滝水の力で河床も両岸も次第に削られて、渓谷は深くなり滝は年年に後退して行く。この生きた自然の営力を目のあたり観察できるのは何より有難い。

岩壁にはイワタバコが美しく垂れ下っている。この滑川の植物は松、杉、桧の外珍らしいハリモミも見られるが、こうした針葉樹よりも又ソヨゴ、アセビ、アラカシ、タマツバキ等の常緑広葉樹よりも重要な樹種は落葉広葉樹の素晴しく多いことであろう。それ故春の桜よりも秋の紅葉が一きわ美しいもみじの名勝地かも知れない。入口の塩ケ岳から奥の滝に至るまでの間によく目につく植物は、フサザクラやイロハモミジである。その他クマシデの俵状の果実、ケンポナシ、ノリウツギやキハギの花、アワブキ、クマノミズキの残花、コウゾの赤熟した果実、エゴノキの堅果等から谷あいのヤマボウシの花、転石の間に咲くサワアジサイ、正に梅雨明けと共に咲く夏花ネムのキやヒメユリ等忘れ難たい思いがする。樹間からもれる鶯の鳴き声、流れから聞えるカジカの声も楽しい。淵にはアメノウオが住み、小溝にはサンショウウオもいるといっている。この美しい自然をこわさぬよう保護することがＰＲとともに大切であることも忘れてなるまい。

（四〇、七、一一）

唐岬の滝の漱石句碑と子規の「山路の秋」

和田茂樹

（「愛媛」昭和三十八年十一月一日所載）

瀑五段一段ごとのもみぢかな　　漱石

昭和三十八年九月二十八日漱石句碑除幕式が、温泉郡川内町唐岬の滝の上、眺望絶佳の地で催された。漱石の句碑は、昭和十五年谷上山麓称名寺に二句一基と境内に一基が、全国最初のものとされていたが、松山中学校跡四国電通局の文学碑についで、県下では三番目のものである。教え子東洋城の書。当日宮脇伊予鉄社長によって、昨暮除幕予定の時の祝句が披露された。

山の上(へ)の碑(いしぶみ)の上(へ)や秋の天(そら)　　八十五叟　東洋城

瀑の句は「明治二十八年十一月二日河の内に至り近藤氏に宿す翌三日雨を冒して白猪唐岬に瀑を観る駄句数十」と漱石全集にもあり、写生句五十句中の一句。五段にわかれた雌滝の情景を描き得て妙、この句碑により、改めて静かな山峡も生気を帯びる感を深うした。

さて、漱石のこの観瀑は、実は子規にその因を発しており、子規には四年前すでに「山路の秋」なる紀行文があることを、この機に省みるべきであろう。

子規は、明治二十四年八月下旬五友のうち太田柴洲、竹村黄塔と同行、三並良の母方の親戚近藤家に一泊して観瀑、同家の書画帳に句や歌を残した。この時の句が、

山もとのともし火動く夜寒かな

であり、歌の下句は「滝の絶間は錦なりけり」と覚えていると柴洲は語った。これは極堂の「友人子規」に詳しく記されているが、遺憾なことに、子規の一文にはふれていない。よって観瀑の記を紹介しよう。

山路の秋

在帝国大学　子規子

そよふく秋風に驚かされて、二旬の閉居に足の豆消えしことあさましく覚え、仏は西へと帰り玉ひしつつの日、東の方河の内の山奥へと志しぬ。家をいつるとき、

山こえていさ見にゆかんあきの秋

途上畑中村にて老松の下にいこふ。

順礼のゆめをひやすや松のつゆ

川上より奥は、山水の景色はや尋常ならず。

とある絶壁の下にて、

追いつめた鶺鴒見えず渓の景

河の内の近藤氏に一夜の宿りをたのむ。山深ければさすがに秋既に多し。「夜もすがら秋風きくやうらの山」という曽良の名吟も、折から思い出されて、猶ほ哀れに情ふかかり。

翌朝山路あやしくたどりつく案内の小童にひかれて路ともなく叢ともなくわけ行くに萩女郎花の思はすふみしかれてあとよりうらめしげに起き直りたるをかし

行き行きてつまる処を唐岬の滝、其隣の谷間を白猪の滝という突兀たる巌は天を衝きて銀河脚下に傾き氤氳たる白雲は衣の袖より起りて蛟龍乍ちに隠現す小童の瓢をささげていざまいれという三杯の村酒に眼ちらつきて千山万岳滝の音に動き出し見ぬ世の謫仙しばらく我身をかる尊とさよ

〽滝湧くや秋のはらわたちぎれけん

見るが内に滝のけしきすざまじく肌をうつの冷気腹の底までこたへて垢離とらぬ身の留らんこと覚束なく一里の嶮坂を飛ぶが如くにいそぎ下りぬ顧れは山もさけなん音ばかりは聞えて滝の水そことも知らす見渡す限り雲又雲鳥も通うみちもなし

（「はせを影」第二号所載）

これは明治二十四年九月五日発行の月刊俳誌で、柴洲の言に誤りなければ、子規の紀行文は、帰松後直ちに認められ、編集者海南新聞社の森孤鶴に渡されたものと推定される。三樹堂孤鶴は当時俳句幽玄論を唱え子規の俳句文学論の先駆として注目され、松風会結成後は子規門の逸材として活躍し社会事業にも貢献した森盲天外である。

「寒山落木」所載の畑中村老松の句や、川上より奥での句「追いつめた鶺鴒見えず渓の景」は、この途中吟であるが、「滝湧くや」の句は句集からさがしだせなかった。子規未採録句なら、新

に一句得たことになる。が、それ以上に、白猪の滝の句と文を得たことは、土地の人々のみならず、滝を愛する人々に喜ばれるであろう。

子規の文章に多少の誇張を感じていたが除幕式の終ったころ、法師ケ嶽、石墨山から、にわかに雲湧き、割石峠をとざし、小雨さえ伴い、変転極まりない山色に驚き、子規の感動を新しく思いかえした。

帰路、子規がたちよって楽書をしたという鎌倉堂（則之内字長野）をたずねたが、ただ日下伯巌選文の碑のみ、その名残をとどめていた。

〽案山子もの言はば猶さびしいぞ秋のくれ　西子

西子が当時の子規の別号であり、こんな字余り句を墨黒々と柱に書き残したこともすべて忘れられようとしている。近藤家で漱石が破顔微笑して眺めたという子規の書画帳はどうなっているであろうか。

（愛媛大学教授）

子規の「山路の秋」の紹介者和田茂樹氏は、その後又「愛媛」に「丹靖の白猪・唐岬『瀑布の記』を載せられて、それが子規や漱石の観瀑の手引となったと解説している。宇都宮丹靖は（明治四十二年没八十八才）当時松山市二番町で方位易を業とし、文人と広く交った。句碑も数基あり、子規との往復書簡もあり、二十七年にはともに歌仙を巻くなど、子規以前の松山俳壇の一中心俳人である。「瀑布の記」は明治十四年十月二十九日発行の俳誌「俳諧の曙」に載せられたもので、新聞「愛比売新報」の附録、俳諧関係の週刊誌である。得がたい資料と思われるのでここに転載することにした。

瀑布の記

伊予　宇都宮丹靖

名あり。名にしたがうは徳なり。其徳にしたがうは望なり。望広うして名大なるも、徳より出る処にして、万の事なくて、一円廓を廻るが如く、共に追い共に追はれて、三全弥成るとかや。

爰に、扶桑の南方なる二名洲愛媛の内、浮穴郡の河の内てう郷に、三全の瀑布あり。三全の人あり。三瀑の雄を白猪滝という。雌を唐岬の滝といい、凉は皆別にしてみな山をへたつ。雄は荒々しく、二段に落て、音怒るかと思う計におそまし。千樹百草しんしんとして、峨々たる嶺に縋り、風の蒼々たる空にさへ、雨常に降て止す。東西南北に無き風の青潭を穿て寒し。観客只神を飛し、足よろよろと吟腸をさらして去るに、巨勢猶送りて怖髪を吹。雌は又雄に水勢丈巾の石をゆつらすといへども、音和らかにして無か如く、二筋三段に落て、佐保姫の糸くり機を綾なすさまにて、いとやさしく美なり。早くも見ゆる上弦の月影に梳りて粧ひ翠紅の装木をまとい、笑を含みし姿こそありける。遙か左りの山一つあなたに子滝を愛し、子瀑布また父に叱られ、母にめでられ、余念なく遊ぶが如く、唐岬の道のほとりに流れ落て、父におそれ、母をしたい、各其情を題し、観客其景情にうかれんと其名をしたうて、望を起して、開主の

人の徳を仰ぎ、或は詩文、あるいは歌俳を吐競述て、瀑布のため開主の徳のためにして、開主は又道の徳を補い、草に鎌し、あるいは宿を投して観客のためにす。嗚呼開主の善雅、滝の青腸より深く、深嶺より高し、開主近江藤原の姓にして、名を五揚と呼。其昔国のために尽したるいさほしなど、よく国の人々のしる所なり。されば氏の徳必栄、瀑布の名必広。観客の望必盛にこそならめ。

見る滝は秋一はいの景色哉

むかしばな誌

田中七三郎

（伊豫史談第一一一号昭和十七年九月）

伊豫鉄道が平井河原まで開通した時の、これも夏のことであった。大街道の橋田（当時海南新聞は大街道にあった。）と云う人が川上村で小学校の教員をして居り、その人が川上へ遊びに来ないかと云うので、遊び好きの二三子と土曜の夕刻に川上へ行き、橋田君の所へ泊って螢狩をしたことを憶えて居る。

そしてその翌日河之内の白猪唐岬両瀑布の探勝を思い立った。白猪唐岬と云へば今日では誰れでも知らぬ者が無いが、当時松山ではその名を知らぬ者が多く、ことさら観瀑だ、紅葉狩だと、態々出かける者は無かった。この時、我々が探勝したのが、蓋し、松山地方人の河之内観瀑行の草分であろうと思う。

この時も、無論、乗物は何も無いのであって、白猪の飛瀑を遥か手前からこれを望むことは出来ても、之に近づくに道と云う道らしいものはなく、荊蕀生茂って容易に瀑下に近づくべくもない。ところが同部落の近藤数太郎氏が（現県議近藤金四郎氏の父君とか伯父さんとか）親切に道案内をしてくれ、葛や野茨や何かを鎌で切ったり、丈なす雑草を押分けたりして、やっとのことで瀑の下へ出ることが出来た。それから白猪の方から唐岬へ廻ったが、これも無論道らしい道はなく、随分難儀をしたものだった。

匡王寺入船まつり

土屋光次郎
石谷沢一

匡王寺には古くから入船まつりといって、悪病（伝染病）除けの行事がある。その起源経過等の考証は充分にできていないが、昭和二十年の大戦前までは、大字北方部落が薬師田をもって毎年その費用をもってつづけてきたものである。大戦後は農地改革でこの財源がなくなり、人心もこうした伝統行事に関心が少くなったり、寺側もこれを引続くこともできず、一度催されただけでたれていた。最近有志の間に是非復興保存したいという話がまとまり、昭和三十九年復演し、毎年の行事に継続さすことになった。この悪病除けのまつりのはやしに用いる大鼓が全国でも、東北地方の鹿島、九州地方の日向、四国の伊予の三ケ所にある珍らしいものといわれている。毎年旧暦六月十七日夜行なわれる。

まず大婆に護衛された御舟が通る。御舟は万灯に照りかがやい

で中に薬師如来を安置した厨子をのせ、女の稚子にひかれて、渡船坊から寺の境内に入ってくる。太鼓、庭狩とつづく。門の所で「入波」が唱えられる。ついで全行列が庭に入りきって、庭狩が寺の状況をたたえ、太鼓、杖の由来を語り合う。最後に庭狩二人は持った杖にて渡り合う。次に大婆が薬師如来の功徳を称える。その時厨子が開いて如来を拝む。つづいて端歌が唱えられ稚子一同輪になって踊りながらこれに和する。まことに夏の夜にふさわしい、この入船まつりは悪病除けの供養として、優美に仏徳をうたったもので近郷からの参詣者も多い。

匡王寺の入船まつり

匡王寺十七夜歌集

入波

みなとみなとに　行暮れて
おほひの浪のよせくるや
ぜひも浪風立たぬまに
いざやこの舟こぎ入るる

庭狩

東西東西今晩この処に
お踊りの案内召し進じつかはされ候　参候
御門のかかりをながむれば
朱たんの柱をゆり立てし
黒たんの抜桁うち通し
空は桧皮のしぶきとも
うち見えし先づ見事にて候　参候
御堂のかかりをながむれば
白金柱をゆり立て黄金のぬきげたうち通し
空は桧皮とちぶきとも
うち見えし先づ見事にて候　参候
花壇のかかりをながむれば
桔梗菊萱姫小松牡丹しやくやくけし百合とこそうち見えし
まづ見事にて候　参候
お庭のかかりをながむれば
四方下りに中高ふ　中には金銀のいさごを敷き
天下泰平　国家安康の御庭とは
こなたのことにて候　参候
裏へ廻りて堀河なんどをながむれば

金魚や銀魚や鯉鮒をはなちかい
雄鴨雌鴨くじゃく鳳凰の鳥は
五色の糸にてつなぎとめ
まづ見事にて候　参候

礎畑に植えまわしたるは
一にかんたん　二ににつき　三に三階の松
四にしたんや黒たん　五に五葉のから松
六つむくの木　七に辨才天天王の前にらんかん橋
をかけ　ひむら杉を植えまわし
八に紅葉は地にいらいらと照す所
九に楠の木九重の枝が一階上りと栄えたる処
御目上げたりや　参候

太鼓の次第を申そうなら　三からのもの
一からの太鼓は伊勢天照皇大神宮
天の岩戸にこめさせ候　参候
一からの太鼓は二八月鹿嶋明神神楽
太鼓とうち下させ候　参候
一からの太鼓は今晩この処のお踊りの
太鼓と打ち下させ候　参候
杖の次第を申そうなら　杖は六尺二分に切り
本へは鉄を巻き　うらへは幣を切り付け
中に金銀のたちもぎのあるこそ

杖と申そう哉　参候
坂東七本京六本築紫に三本安芸一本
合せて十七本の杖と申すかな　参候
当処ではひき折り竹か　旅では大払杖と
申するは某のつきたる杖の事にて候　参候

当処当村の御方様はさておき
他所他村の御方様は　御見物なされう共
一足後へふみもどし御見物なされうや　参候

若しこの御宝の杖の木うらがあたりたる時は
ハッパと御免下さりうや　参候
畠山掛け出であらあら一合戦まいろうや　尋常に

匡王寺の入船まつり

大婆称

東西〳〵　今晩此の所にお踊り企っと承る　かような所へは色々な者がそひたがる　そのおさへの為に某が付きましてござる　某はいかなる者とおぼすらん　名はからまさらま　さうけったいと申す者で御坐る　きんきなきの世にこれを相計る可し
先づ彼方の御地中を拝し奉れば見事なる御地中かな　四方に仁王門を立て　四方に蓮池をかまえ　山水の立石　築山のやり水　南大門には笠掛けの馬場を通し　先づ彼方の御堂を拝し奉れば見事なる御堂かな　四方表て十方正言せり
金銀　瑠璃　瑪瑙　珊瑚　琥珀　瑙璃のあざやかに綾のはたほこ百流れ　黄金の燈篭三百八十三六　いのふの御紋　瑪瑙の御紋　天晴御堂の御威勢は七堂伽藍三国にもかくれなしと聞えたり　あれ風情の舟を見給へ　御堂の四方が開き　御光がさし空に五色の雲がたなびき中に即ち薬師如来と現れ給う
薬師様には萬世四十の御真言を唱えさせ給う　御真言にはおんころ〳〵せんだりまとほぎそわか　御真言を唱えて後は大踊り企だつる
西方十方十萬億土　六堂の主じ管絃講を始めて　後は東西南方おだやかに最初　お踊りの始まり
太鼓の頭を頼む　終り

ローローヒーチロロ　チロロ
ローロロロ　チロロ　チロロ

端謡

南無薬師はいや南無薬師
瑠璃の玉つぼおし開き
五穀成就と祈りこそすれ
音楽のはいや音楽の
踊りに蓮の花もふり
直如と共に浮ぶたきつせ
極楽のはいや　極楽の
渡しの船にうち乗りて
弥佗の浄土へ今ぞおもむく
弥佗たまへはいや　みだたまへ
仏になるも目の前ぞ
願へば吾も即身成仏
音楽のはいや　おんがくの
踊りは風情の船なれば
弥佗へ浄土へつなぎとり給う
有がたやはいや　有りがたや
風情の船にうちのりて
みだの浄土へ迎えとり給う。

佐伯滝松さん

北川淳一郎

佐伯藤三郎の弟であり、松山中学校、第一高等学校をへて大正三年東京帝国大学独法科卒業、卒業後神戸市岡崎汽船株式会社に勤務。その有為の人材は認められて海外に派遣される等、将来を嘱望されていたが、大正十三年十二月八日惜しくも突然死亡した。享年三十八。

佐伯滝松さんと私

（「愛媛」第三巻第八号　昭三八、一一、一）

安倍さんの「自叙伝」に、「次の明治三十年の松山中学校の卒業生では近藤春台という美男子がいつも一番だった。近藤篤山の子孫の一人だといわれていた。佐伯藤三郎は演説会で男女交際論を主張した。彼の志した出世街道からは外れたが、愛すべき好人物であった。弟の仙波茂三郎は早稲田を出、その弟の佐伯滝松は一高東大を卒えて会社員となったが自殺した」とある（伊藤義一さんの論文による）。私がここに書こうとしているのは、この末弟の佐伯滝松さんのことである。佐伯滝松さんの話はいまから六十年近く前、明治三十八年の正月に遡る。

私はその年の三月に、村の小学校を卒業したのであったが、正月の何日ころか、日露戦争を主題にした幻灯会が私だちの学校が主催者となって川上、三内（いまの川内町）の学校や寺院で開催され、私もその説明者の一員であった。生れてはじめて、人の前に立って話をするのだから、相当危つかしいものであった。だが私だちには一人宛の補佐役がついた。そして私たちの説明の間違いや不充分なところを訂正し補充してくれたのだった。川上の応観寺でこの幻灯会をやった時の補佐役が佐伯滝松さんだった。その時までは私、佐伯さんの名前も存在も全然知らなかった。佐伯さんが私を知らないことは無論のことである。然るにその未知の佐伯さん、とても熱心に、そして細心の注意をもって私の説明を聴き、その不充分なところを補充してくれた。その真面目さと親切さ、私は自分の兄、私には兄弟が無く、いつも兄さんがあったらどんなに良いだろうと思っていたのだが、その人を真実親身の兄のように思った。幻灯会が終った後、ささやかな茶話会が催されたが、その佐伯さん、私の名前をきき、そして中学に入学する考えかどうかとたずねたので、私は此年入学試験を受けるつもりだと答えた。すると佐伯さん入学試験の勉強法を詳細に教えてくださった。私とても嬉しく急に大船に乗ったような、もう入学試験は大丈夫合格したもののような気になった。

三月の中旬に私に一封の手紙が届いた。差出人を見ると佐伯滝松さんだ。美しく気持のいい字体である。私、生れて始めて、手紙と云うものを、人から貰ったのである。手紙には入学試験の期日、試験科目、出松の準備、宿泊の場所などが細かく書いてあった。私嬉しくて何度も手紙を読み返し又両親にも読みきかせた。惜しいことにこの手紙いま無い。

私は四月一日に父に連れられて松山へ出て、二番町にあった東

温学生の公認寄宿に入って懐かしい佐伯さんに再会し、彼の部屋に同居して勉強した。佐伯さん、この年の三月松山中学を卒業して目下高校受験の準備中だった。

二番町の寄宿舎はその翌年だったかに中の川の廃寺の二階に移転したが、これも暫くの間で、ある不祥事件が起って、寄宿舎閉鎖を命ぜられた。それで私は中学二年の二学期から一年半、松山中学の（木）寄宿に居った。

私先輩の仙波磯次郎さんから滝松さんが一高に合格したことを聞き、すぐによろこびの端書を出した。五、六日して、学校宛で礼状が来た。それは日本絵端書発行の水彩画で三宅克己筆「晩秋の林」の絵端書で、それに、「美しい絵端書で入学をお祝い下され誠に有難う存じました。君も御元気で御勉強の由、お賀び申します。身体を健康にしてよく勉強し給へ。僕のように中学時代に遊ぶと後で苦しむから。それからね、君の近状や川上地方の健児の現況を知らせて呉れ給へ是非」と記してあった。この絵端書及びそれ以後の彼の端書（殆んど全部絵端書）は全部、いまも私保存している。この絵葉書、明治三十九年十月二日、本郷駒込、四日松山局の消印があり、「東京第一高等学校東寮十一番室ＳＴ」とある。この第一高等学校東寮十一番室が、私の若い血をどんなに沸きたたせたか知れない。

滝松さんとはこの時から折々文通した。その月の二十四日には富士の御殿場から、発火演習に行った時のもので、「富士川の激流と芙蓉峰」の絵端書に、一高の演習記念スタンプが押してある。滝松さんとても自然を愛した。或時は木曽福島に、又は日光那須野が原に滞留したことがあった。彼は日光から二枚続きの華厳の滝の絵端書を送ってくれたが、それには「すべては偉大也、すべては美麗也、他はすべて無也」とあった。この言葉何かしら私に深い印象を残した。

夏休に東京から滝松さんが帰って来ると、私早速彼の家へ行って数日間彼と寝食を共にした。この時の私の心は歓喜と満悦そのものだった。吹上の池へ行ったり、重信川の岸辺を歩いたり、大宮神社の古墳の洞穴へ入ったりした。その往復の途上、彼がいろいろ語ってくれることを、私は自然に血潮が吸いこむように貪り聴いたものだった。また彼は自分が持って帰ったドイツ語教科書の、アンデルセンの「即興詩人」とか、「絵無し絵草紙」、モーリッツの「ギリシヤローマの神話」、ヒルチーの「幸福論」「読書と演説」から、私に適当と思う話をしてくれた。私はあのゴチゴチしたドイツ文字が滝松さんのように、早く読めるようになりたくてたまらなかったものだった。

その頃一高ではアンドレーと云う人のドイツのキムナジウムの教科書で西洋史を教えていたが、その巻末にある古めかしい石版刷の彩色画「オリンピックの競技会」だとか、「十字軍騎士出陣の画」など、とても嬉しくて、幾度となく私その本をめぐったものだった。私が松本雲舟と云う人の抄訳、シエンキエヴィチの「何処へ往く」を読んだのも、この明治四十年の夏休に、滝松さんが読めとすすめたからであった。滝松さんこの本、爛熟し腐敗しきったローマ文化と素朴で純真で健康な原始キリスト教徒の世界との対照がとてもよく書けているから是非読めと私にすすめら

れたのだ。滝松さん、一高時代人生問題に悩み、或時は近角常観師を、又ある時は内村鑑三氏の門を叩いて教えをもとめ、尚自らも深く考うべく、木曽福島の益田屋（いまもあるかどうか）に立て篭って植物の標本をつくったり、静かに読読したりした。益田屋のおかみさん始め純朴田舎人の親切と、雄大で清浄な木曽の風物とは彼をして最も熱心なキリスト教信者たらしめた。そして彼は終生そのあつい信仰を持続けたのであった。

解放運動と佐伯滝松さん

私は中学の二年までは数学がそう嫌いでなかったのに、三年になって大街道を歩いている女の人を美しいと思うようになった頃から数学や物理がとても嫌いになり、従ってまた、わからなくなった。このころ菊池幽芳とか田口掬汀、小栗風葉などの家庭小説を耽読し、四年生になったころ、自然主義のたい頭となり、長谷川天渓の「自然主義」と云う本を金科玉条のように繰返し読んだものだ。花袋の「蒲団」や「一兵卒」など有難くて涙を流さんばかりであった。ひとり自分だけでなく、親友の大野義忠君にも蒲団や一兵卒を読ませたりした。

私は以前から一高帝大法科（独法科）と決めていた。自主的に決めたものではなく、佐伯滝松さんが歩んだ道だから、私もそれに追随したのだった。ところが一時早稲田文科へ行くと云い出して父親や先輩に心配をかけた。中学の英語の先生。その私宅を訪れて大野君とマコーレーのクライブ伝を読んで貰っていた私の尊敬する吉沢先生にじゅんじゅんと訓戒せられたので早稲田文科を断念して一高受験に翻心し、明治四十三年に松中を卒業すると東京へ出て、本郷の鳳鳴館に下宿して神田の数学予備校に入学した。ところが生徒がわかろうがわからなかろうが、お構いなしにグングン進めるので、私には何にもわからない。三ケ月の授業料先払いだったが三日行っただけで学校やめてしまった。そして下宿で、自分にわかる程度で数学の本を読んだ。滝松さんこの時大学の三回生だったと思う。私のために私の下宿へかわって来られた。食後よく一緒に散歩して西洋苺を買ってもどって牛乳と砂糖でそれをたべた。

一高を受験するつもりだったのが、一高の受験者が見るからに秀才らしい人ばかりで、自分の入学が聊か覚束なく思われるようになったのと、一千年の都であった、まだ見ぬ京都への憧れから、佐伯さんや、八木龍一さん等の反対を押しきって、六月の末日、東京を逃げて京都に向った。滝松さん、六月に入ると又々木曽福島に行かれた。六月二十八日福島の消印で「御ぶさたしました、何日頃京都へ行かるるや、準備はすっかり調ふたことと存ずる、僕もやがて帰る、此のハガキの着くまで東京に居らるるやと危ぶみながら出す」と書かれてあった。

三高生になって三年の時の秋、関ケ原と川中島で学校の発火演習があった。その時私が出した端書に対する滝松さんからの返事の末文に、「寝覚の床でそばを味わはれしか、若し味わはれしならばそば屋に美しい娘は居ませんでしたか」と書いてあった。

話が前後したが、佐伯滝松さんの一高時代だから明治三十九年から四十一年ごろの間のころ、部落に対して深い関心と同情を持

ち、帰省中は部落の子弟を夜間自宅に呼んで読書や算術や、当時出版されていたリンカーンやガーフイルドの「言行録」を読んできかせたり、またその家々を訪れて両親や兄姉に会い生活の改善方法を指示した。また部落民と一般人との交際が、その頃殆んど出来ていなかったのを融和調停したりした。(大日本同胞融和会が部落の内部から始めて結成されたのが明治三十七年である)。

また滝松さん、同胞融和を広く社会に教ゆべくその頃、海南新聞(だったと思うが、愛媛新報だったかもわからない)に、東京から寄書して県民に説いたことがあった。この掲載新聞、私その時には読んだのだが、いま見つけることが出来ないのを遺憾とする。知っていらるる方があればどうか御知らせを願いたい。

滝松さんが、その時代、まだ日本の部落問題が芽生えたばかりの時代に、部落に対して深い同情と関心を持ち、彼の当時の環境なりの、ささやかではあったが、その解放のために活動したことはわが愛媛県の部落解放史に絶対に書き洩らしてはならないことではあるまいか。また、彼が県下一般を啓蒙すべく新聞に発表した論文は解放史上、極めて貴重な文献ではあるまいか。

実は私のこの小論文「滝松さんと県の部落解放」と題してこの点だけを書くつもりでペンを執ったのであったが、さて書きかけると滝松さん懐かしさに、あれもこれもが次々に思い出されて、書きたくなって、とうとう「佐伯滝松さんと私」「解放運動と佐伯滝松さん」と云ったようなものになってしまった。

大正二年の九月に私は東大に入った、そして親友の、白石皎の千駄ケ谷の下宿から通学した。滝松さんはこの時四回生、本郷六丁目の揚名館に居った。私は学校の帰途時折り彼の下宿を訪れて菓子やイチゴをたべた。イチゴは以前から彼の大好物である。

彼は翌年大学を出た。そして神戸の岡崎汽船会社に入った。間もなくあの第一次大戦で彼の会社も好景気、彼もトントン拍子、会社の重要なポストにつき、或は英国に会社の要務を帯びて出張したり、又は南洋地方を視察したりした。

私が最後に滝松さんにお目にかかったのは大正九年の冬、松山の向井書店の店頭であった。彼が川上へ帰省中にその日出松して来たのである。彼は「雑務に追われて益々俗人化して行く、君等松山の生活が羨ましい」。こんなことを云った。

大正十二年九月十一日、私は滝松さんが亡くなられたのを知ったので、早速父文四郎氏に、「昔を思い、学生時代私が御令息から受けた親切と好意がひしひしと胸にせまる。」と云ったような悔状を出した。

松瀬川焼

永田政章

百年以上も前に、伊予に「松瀬川焼」という磁器があったことについて、愛陶家、研究者の中にも知る人は少なかった。たまたまその窯の名を知る人も、「伊予の染付けは砥部」と定評づけられているので、松瀬川焼は恐らく砥部陶窯群の出店ぐらいに考えていて、在銘品でない限りは、すべて染付磁器は砥部産のジャンルの中に包含されてしまっていた。

今回の調査で、われわれを最も驚かせたのは松瀬川焼が決して砥部の亜流でないということである。それは唯一つの窯元であったとしても、染付け磁器専門の民窯として、まれにみる精巧な而も安定した器物をかなり多量に産出しており、製品の質においてむしろ砥部陶窯群をしのぐものがあったことを、われわれは確認することが出来た。勿論松瀬川にこの窯が成立したことは砥部の刺戟によるものであることは言を俟たない。

(イ) 三軒屋窯跡は現在ゴルフリンクから、東南麓眼下に見える谷あいである。登窯は南に低く第一室の焚き口を道路側に向け、北へ高く、第二、第三、第四……と連結していたと思われる。窯の方向の推定は現地事情に詳しい同町々会議員渡部国恵氏の説と、土地の古老大石音松氏の記憶との間にくい違いがあるが、筆者は、登窯最上部内壁および東側壁と考えられる遺構が、当時のままに残存しているところから渡部国恵氏の意見に従った。

すなわち、道路側から順次北へ焚き上ったものと思う。

製品は道路下の作業場――今はみかん畑――でロクロ成形、あるいは絵付け仕上げして、それぞれ、最下部の独立素焼窯または本焼き登窯に運び入れて焼成したものであろう。

(ロ) 小雨の中の調査は思うにまかせなかったが、種々の発見をした。畑の石垣の石に混って、窯の内壁の大きな破片が数多く積まれているが、これらは永焼成期間中、高熱（約千三百度）の連続で焼け爛れ、自然釉がにじみ出ていて、石よりも硬く、複雑幽玄な自然の釉色を呈している。近頃さかんに使用されている建材タイルの到底およぶところでない。茶屋の石組みにでも是を用いれば、これに越すものはなかろう。

窯壁片に加えてトンバリ、シノ、「手もの」など窯道具が完全なものも交えて石垣に築き込まれていて、ここは一見窯跡の様相を顕著に露呈している。

(ハ) 登窯最後室の上端内壁の側面から窯の天井へ続くカーブの部分が少しではあるが、そのまま残っているので、窯の高さが略々想像できる。また東側、側壁燃料投入口が二つも残って内壁へ口を開いているが、その周辺の耐火レンガらしい壁面に、いわゆる「伊予ボール」（砥部で明治二十年代から盛んに焼成した南洋向け輸出陶器茶碗）半壊になったものがそこ此処に融着していてこの窯の盛時をしのばせると共に焼成年代の下限を推定する資料ともなっている。これは砥部に見られない貴重な遺跡である。

(ニ) 悪天候の下、十分な準備もなかったので、発掘はほんの試掘に留まったが、それでも焼き上り上質の染付け磁片多数を採集出来て幸福であった。半分は末期の型文様染付け茶碗の破片であるが、中には最盛時に近いゴス発色のすばらしい手描きの破片も多く、一部古伊万里をしのばせるような古色を呈するものもあって、この窯の初期、中期の伝世優品に面影相通ずるものがあった。

(ホ) 現地調査で窯の位置確認は出来たが、登窯が一基だけであったが、二基以上であったか、推定は困難であった。

渡部（国）氏は三基といい、大石老は二基といい、大野老は登窯一基と別に独立焼窯一基があったといわれるが、猶後日の完全発掘によって確認する外はない。

(ヘ) 研究文献資料の乏しさ

松瀬川焼は世に珍しい染付白磁の優秀製品を出している。この窯の残した業績に比して、後年これを研究発表した人もなく、文献資料が皆無に近いのは寂しいことである。

西条の丸山焼は藩主の御用窯であったし、丹原の川根焼も御陣屋焼といわれた通り、代官の御用窯であった。その故か、どちらも同じ染付磁器を焼いていたのに、一応後年研究の対象ともなって、簡単ながらも印刷された文献も残っているのに、これらとならべて決して遜色の見られない、むしろ一歩進んでいたと思われる松瀬川焼が何故注目をあびなかったか。理由は二つあると思う。

金比羅宮奉納神酒瓶

その一つは松瀬川焼は川根焼と同じ金比羅街道に近かったとはいえ、山間の純民窯であったこと。その二は近くに砥部という集団窯業地があった為に砥部窯業の盛名に隠れて、この窯のユニークな存在が顧みられなかったということである。世の数寄者の注目を惹かず、文献記録も乏しかったということは、松瀬川焼の不幸であったかに似て、実は幸福であったと思う。その優秀な作品が百年後の今日に至るまで世の投機家に買い荒され、産地を離れて四散することがなかったのはこの故であるから。

すぐれた民衆の器が、産地を離れずに残っていることだけでも珍しいのに、それが土地の人達の実生活に溶け込んで、永く愛用され続けて来たという事実はまことにめずらしい。その上、この民の器を愛用した農民たちの美的感覚が、城下の町で通を誇っていた茶人仲間より、はるかに健康且つ純粋であったことをこれらの民器は忠実に語っている。

京・上方でもざらには見られない本格派の南画が名もなき民の日常の器である徳利などに、惜し気もなく染め付けられ、その豊かな腹中に充てた酒で、集まる村人を酔わせながら、徳利は一座の主役となって、艶やかに美しいその磁肌を全ての人々の愛撫にゆだねた。想うだに嬉しい情景ではないか。

民衆が民衆自身の生活の中で、みずから製し自ら享受しそして残していった文化財遺産、これが民芸本来の姿であり使命であったといわなければならない。

(ト) 焼成年代について

(1) この窯の活動していた期間は「安政から明治十六、七年頃迄」(凡三十年間)となるが、今回の調査時点では、伝世品、発

堀陶片の分類などを考え合せて略々定説としてよいのではないかと思うが、筆者はこれに少しの修正を加えて採用することとしたい。

この窯の焼成年代の最下限を明治十六、七年とする済川説は、発掘による伊予ボール陶片の出土、窯壁附着の破片などから見て、窯の末期には盛に伊予ボールを焼いたものと思われ、従って砥部における伊予ボール焼成年代と歩調を合わせて明治二十年代とするのがよいのではないかと考えたのであるが、大野老人よりの聞き書の中の翁記憶に信を置くとすれば、「翁が十六、七才（明治二十年頃）家を出た頃にはもう三軒屋窯は廃れてしまっていた。」ことになるから済川説は裏付けられることになる。しかし出土品は最も雄弁であるから、この点は疑問を残して後日の宿題としよう。

(2) 焼成年代の上限をどこに置くかという点では、筆者愚考では済川説を五年以上溯らせることにしたい。

年号在銘の最古の船徳利が嘉永七年（一八五四）とあり、この年は家定、十三代将軍を襲いで、後半安政元年に改元されたのであるから、手固く推定すれば済川説の上限は正しいことになる。

筆者がこれに修正を加えたいのは次の理由からである。嘉永七年在銘の二器はいずれも染付磁器として、器型、絵付、釉調全て最高の出来上りであって、単に地方民窯だけでなく、全国どの窯の産に比しても遜色を見ない逸品である点に注目する。斯うした秀作はたとい一時に優秀な職人の顔を揃えたとしても、一朝一夕に突如として焼き上るものとは到底考えられない。嘉永七年在銘器の製作水準に達する迄には開窯後最少限五年ぐらいの準備期間を置かなければこれらの品は生まれなかったと見る。

嘉永七年はむしろ、この窯の（量でなく）質の面での最盛期であり、最高水準に到達した時期と見るのが正しかろう。

したがって、筆者は「松瀬川窯は少くとも嘉永の初め頃から明治二十年前後の三十五年間以上に亘って活動していた」と考えるのである。松瀬川焼は開窯以来急速度に技術を発達させて、そのまま長く高水準を維持し、安定した製品をかなり多量に製しながら明治初年におよんだ。

以下は全く憶測であるが、江戸から明治へ政治、経済の大変動に伴なう社会生活の激変に遭って、経営の辛苦を重ねながら、砥部窯群に同調し、南洋向け伊予ボールの大量製産にふみ切った。松瀬川伝統の高級技術はもはや用うべくもなく、その後の経営不如意により終に廃窯の運命となった。この間明治に入って、経営者の交替もあったのではないか詳細は今後の研究にまつ外はあるまい。

(チ) 陶工について

明治維新をさかいに、長い封建社会から近代国家への急激な転換がおこなわれ、社会経済状態も激変していったため、則之内焼はそれまでの中心経営者則之内村庄屋宇和川家の没落を見、一時は窯の火も絶えていた。それを砥部の有力な陶業家白潟秀三郎が弟子の浮穴郡久谷出身の三好照治らを語らって、再興または新規に築窯して活動を続けていた。覚え書「陶片僕」に見える大内浅吉の談によれば、経営者を兼ねた三好照治と松瀬川の渡部歌次の

ほか見習の大内浅吉ら数名の陶工がここにいた。これらの技術者は恐らく松瀬焼三軒屋窯とも懸け持ちで作陶していたものであろう。また則之内窯では前述砥部の平尾雲山もよい仕事を残している。雲山は大洲藩五郎焼でも磁器窯を開き指導しているが、松瀬川焼にタッチした証跡はない。

明治十年前後則之内焼が亡んで後、渡部歌次はホーム窯に帰って仕事を続けていたが、明治十九年（一八八六）七月五十八才の時、二十才の長男久次を連れて、砥部五本松の窯元白潟秀三郎の家に寄留し、砥部陶工群の中に身を置くことになった。このことは松瀬川焼の歴史の上に重大なポイントをなしている。

明治十五年に総産額十万三千円という第一次黄金時代を迎えた砥部焼は、その後うち続くデフレの影響を受け事業の縮少を止むなくされた。明治十八年には四万六千五百円台にまで激減し衰微の一路をたどっている砥部陶磁の将来を憂えて、向井和平、城戸徳蔵らの進歩的な陶業家は、大陸向け、南洋向けの輸出を開拓して窮境を打開すべく、この年阪神地方の仲買人を通じて清国商人と取引を開始、同時に輸出向け染付磁器を量産しはじめた。

砥部焼が不振のドン底から立ち上って次の隆盛期に入ろうとする転換期に歌次父子は砥部に入った。向井和平は明治二十三年淡黄磁を創製した。愛山窯での淡黄磁の観世音像や庭園の鶴の置物の造成にあたって、親ゆずりの彫塑の名手渡部久次が大いに貢献した。

また陶器絵付けの方では、明治十八年の十二月清国人画家胡鉄梅が砥部に来遊して絵付けをしたし、明治二十二年（一八八九）には富岡鉄斉が砥部を訪れた。歌次父子がこれらに刺戟されたことは十分に想像出来る。

松瀬川焼の名工渡部佐太郎（歌次）は明治二十四年、享年六十三才で亡くなった。陶工としての彼の生涯を顧みると、前半、明治以前の意欲的な充実した業績に比して、中年以後の大部分は志を伸べる余地のない不遇の中に、堕性的な仕事を続けていたのではなかったか。佐太郎時代には目を見はるような制作を残しながら、歌次時代に入ってからは目にふれるものは少ない。則之内で焼いた、金比羅宮奉納の神酒瓶一対に見る定紋入り神酒瓶あるのみである。（写真参照）若しそれ、ゴスの発色からみて、仮りに明治維新後の作とすることが許されるなれば、松瀬川五柱神社奉納白磁五七桐紋の神酒瓶を加えてもよいがこれには疑問もある。歌次時代は作陶期間の永い割合にすぐれた作品が残っていない。明治以後の製陶業態では、彼がその持てる力を十分に発揮して心をこめ、時間をかけて立派な作品を造り成すには、もはや生活の面がそれを許さない状態になっていたのであろう。この点は後述「松瀬川焼の盛衰」と考え合わすべきである。

殊に晩年砥部時代の四年間、強い刺戟の中にありながら、歌次の作として何も残していないことは、この名工の晩年、実に寂しい限りである。

（全文の登載ができませんので数項目の摘録になりましたことを謝します。　編集者）

井内オツカダのこと

西園寺源透

温泉郡三内村大字井内字タキの鼻の田中に石積塚二基あり。一基はほぼ完全保存せられ、一基は殆ど破壊せらる。

此塚は明治三十五年西谷里道改修の時、その石をとりて道路の埋土になす。これを取毀(こぼ)ちたるは井内の菅野英四郎と云ふ者なりしが、ふと腹痛起りしを以て古墳の祟りとなし畏れて止る。故にその根址のみ今に存す。他の一基は更に手を触るることなく今に完全に保存すと云ふ。

右昭和六年十二月三十日大窪晴市氏の談を記す。右石積塚は古来オツカダと称へ来るものと云へり。

川上村の物部塚

西園寺源透

丑満時に物凄い女の泣き叫ぶ声

川上村字南方大宮社(さん)の後に物部塚と云う古墳が今でもあるが、大昔のこと膳や椀などが入用な時には、夕方にこの物部塚に行ってお頼みしておくと、翌朝にはちゃんとそこにお願いした通りのものが揃えてあるので、それを借りて使用し、すんだら又元の処へ返しておいたものだそうだ。

ところがある時心のよくない者が例の通りに膳椀などを借り、それが壊われたのをそのままで返したところ、それから後はいくらお頼みしても誰れにも貸してくれなくなったと云う。

こうした神秘の塚、昔誰一人この物部塚を犯したものは無かった。

ところが明治二、三年のころ、長尾と云う強情な医者が居って村の人々が止めるのも聞かず、この物部塚の土を取り除けて、石風呂を造り始めた。丁度旧十一月の末で野口神主の家ではその夜オトウと云う集会があって、南方の者が十人余り集って、酒を飲み盛に気焔をあげていた。処が棟木も三寸下ると云う丑満時、何とも云へぬ物凄い女の泣き叫ぶ声が聞えた。そして北の方から南へ行き、神社の後を西に走って長尾医師の門前迄行き、又後戻りしたので、平素強そうな事を云って自慢していた者なども皆、恐れおののいて、其晩は皆神主の家に泊った。

それから後は、毎夜同じ時刻に同じやうな物凄い泣き叫ぶ声が聞えるので、夜外出する者は一人もなくなった。それで流石強情な長尾医師も遂に九日目に我を折って、人夫を雇うて元の通りに土をかぶせたら、その夜から女の泣声が不思議にも止んだ。

それから数年の後、北方村の揚神社の境内の石燈篭の笠石にする為に、氏子の者がその塚にあった石を途中まで運んだら、其夜からまた此前のような物凄い女の泣声がし出したので、驚いて石をもとの処へ戻した。そして今もとのままになっている。

野口神主はその頃十二、三才の子供であったが、恐ろしくて便所にもよう行かなかったから、今猶忘れることが出来ないと人々に語ったと云う。

(昭和六、七、一一)

資料㈡　追補

目次

近藤林内伝

褒賞録

河之内　山伏　宝積院
河之内　山伏　宝積院
井内　百姓　清七
南方　召遣　九郎兵衛
井内　百姓　清七
則之内　〃　伊兵衛
南方　下男　九郎兵衛
北方　医者　徳永寿三
河之内　百姓　長八
松瀬川　〃　次郎左衛門
〃　〃　よね
北方　百姓　浅四郎
北方　下男　兵次
河之内　庄屋格　四郎右衛門

寺院録

安国寺
応観寺
金毘羅寺
大興寺
匡王寺
上福寺
大興寺
修験
寺院
予州久米郡名越邑金毘羅寺由来記

近藤林内伝

（松山叢談）

浮穴郡河の内村平民近藤林兵衛は家古き者にて代々富豪なり。村民難渋の者共を撫育し且御上御物入等の節度々差上金等いたせども、聊恩賞の望なく謹厚篤実衆にすぐれ、度々被下物もあり郷士並の御扱にぞありける。既に廃藩の後も御代々様御墓掃除として若干の田地を差上且近く小学校の事に付ても初発一刀の取替を以村学校を設立いたし、以来先んじて大数の出金いたし候故外にも是を見習寄附志の者多く右村方の儀は一村限り丈夫に元備相立しは全く此林兵衛の篤志によれりとぞ　（口碑）

（明治二十一年一月二十四日歿年七十）

（伊豫偉人録）

三内村河之内の素封家、諱は是正。年少のとき本家近藤是衡の養子となり、二十一のとき相続して妻帯した。資性温良父母に孝順にして父の死後百ケ日間は毎日その墓に詣り、家にあっては厚く母を奉養した。平素勤倹にして能く家を治めたので、公益慈善の為め義損することも数千円に及んだけれども家ますます栄えて父祖の遺産を倍加したといふ。

彼れは能く蓄へ、能く施した人で、絶家を再興して産を与へたり、親族の貧弱を救ふて田地金穀を給したり、或は村内の翁媼を招いて養老の饗を行ひ、貧困者の負債を寛仮し、身寄りなき貧窮者には毎年米麦を与へた。又常に米二百俵を備へて貧農民を補助し其の農事を奨励した。かかる温情の地主が他に幾人あるか。その他、学校、道路、橋梁、堤防など公共の事業を助け、或は山野、路傍に樹木を植えて公益を図るなど美事善行が甚だ多かった。明治以前より松山侯及び知事より褒賞せられたことも数十回に及んでゐる。

今日の名所白猪の滝、唐岬の滝を発見して世に紹介し、雅客の観瀑に利便を与へたのも彼れである。晩年は清翁、五揚と号し風月を娯み俳句を善くし、文人墨客が絶えず出入した。

なほ、林内は青年時代より篤く仏教を信奉し、常に念仏を称へ光明真言を誦し、後年は手首より珠数を離したことなく、変死者、無縁仏の法要を営み、寺院に金穀を喜捨すること多く、真言宗の管長より数回褒賞を受けた。明治二十一年一月に歿す。年七十。真言宗より特に菩薩の諡号を贈られ、その碑は高志大了僧正が撰文し、三輪田米山が揮毫してゐる。

柳原多美雄

近藤林内、諱は是正、通称は初め林兵衛と称し、後林内と改めた。俳句をよくし、五揚と号した。父次右衛門是之の三男として、文政元年一月二日浮穴郡（現温泉郡）河之内村（川内町）に生れる。文政一〇年近藤是衡の養子となり、天保九年六月に家督相

続、同年十一月に周布郡小松領(周桑郡)妙口村庄屋曽我部太郎松の女を妻とした。近藤家は先祖から代々地方屈指の富豪であったが、林兵衛は平素勤倹よく家を治め、一代で松山領内屈指の財産家と称せられるに至った。

天保十一年十一月十二日先祖観蓮院の百年忌追善のために米十俵を村内貧困者に施し、また村内に金銭を貸付けた者の内、最も貧困な者二十人には特別に元金を引捨て、また年賦によって返却せしめた。

天保十三年は不作続きで村内の者が生活にもこまるというので、米二百俵を施したことは、

一、米弐百俵

村方難渋者介抱之為、御代官所へ御差出置、右利米ヲ以肥柴刈之節難渋者へ割遣申旨出願、御聞届に相成、右ニ付天保一五年結構上仰付、

とあるによって当時の事情を知ることができる。このころ、酒造業を営み、家業はいよいよ発展した。彼は神仏を尊敬し、妻子および実家の妹など同行六人で四国順礼に出発したのは、天保十五年の四月十九日であった。またこの年讃岐の金毘羅宮に奉納発句六万集の計画があり、彼はその内に自作の句を奉納した。この年十一月松山藩は彼の善行を賞して、

浮穴郡庄屋格

河之内村　林　兵　衛

年来古風に相暮、村内難渋者共江仕向能、殊に肥草苅取飯料為手当大数御代始所江差出、右利米ヲ以永久助勢之備相立候段、重々寄特之至ニ付、格外ヲ以改庄屋格帯刀御免仰付、

十一月二十五日

と改庄屋格及び帯刀を許された。

嘉永四年村内貧困者へ助勢のため米十五俵を施した。これを村役人が相談の上、各家庭に配分した。

一、米拾五俵

右者去秋作方不宜穀高値ニ付、端々之者取渡り甚不自由致候ニ付、助勢致候、外にも成立之者少々宛人別助勢致候事、

とあって、貧困者以外にも施したことが知られる。

嘉永六年は大旱魃の年で、五月十八日から八月一日まで雨が降らず、田地は大損害を被り、呑み水も不自由となる有様であった。この時米四俵を近所の者に施したことは、

一、米四俵

右者当歳大旱魃ニ付、村方外組は別の事無レ之候処、当組殊之外旱損ニ相成、端々百姓越年見捨難く助勢致遣候、

とあるによって、当時の事情をを知ることができる。

嘉永七年(十一月二十七日改元、安政元年)四月九日松山城天守閣が再建され、その落成祝のため御能が催され、彼は藩から招かれ酒肴を賜わった。この日招かれた者は和気・温泉・伊予・久米・浮穴・久万山などの各郡の庄屋・御礼百姓・郷筒までの者で、いずれも麻上下着用で出席したという。

安政五年三月二十二日蒋士勝成御領、同日朝北方村庄屋宅出駕、安国寺に立寄り、金毘羅社へ参詣四ツ時帰還、村民一同これを見送る。

一、此度御廻領ニ付、為御祝儀被下物、廻勤御用左之人別本月朔日出町致候様申来ル、

三月二十六日　近藤林兵衛

とあるによって察することができる。

同年四月村内貧困者に銭札五百目を施した。

一、銭札五百目

右者去る暮以来穀類高値に付、端々取渡難渋致し者多き趣、相見則村方へ相頼村役場相談之上、組々百目づゝ尤組々六・七人へ配当致遣之由、

によってその趣意を知ることができる。

同年八月村方青年に銭札五百目を寄附してその活動資金とせしめた。

一、銭札五百目

右者組方若連中へ遣す、寅歳家格上仰付候に付、以来子息共若連中付合難に付、銭札を以何成共備ニ致す様申聞候、

とあって、その趣意を知ることができる。この年「コロリ」と称する悪病が流行したので、銭札百五拾目を差出し、当所金毘羅社で村内安全の大祈祷を執行した。

文久元年三月三日に近藤家の門内に捨子があったので、書置の写をもって同夜庄屋所へ申し出た。この時、子供に添えた書付に、

書　置

午年四才の男子、去年親に別れ、祖父の手元に連れ居り候処、二人の連れ子に老の身分年柄に出合候にて養かたく、無ㇾ拠捨置候へば、筋たゞしく御座候故、御見捨なく御養上下候様奉願上候、

見ごろしにする捨子は二つ一つ祖父の心を御すいりよあれ、

中山姓某

文久元酉三月

捨てられてから後、三月七日は吉日であったから名を「九助」と付け、翌文久二年二月二十日まで養育して、桑村郡（周桑郡）古田村重太郎方へ養育料一貫目を付けて里子にやった。

万延元年は麦作大凶作、その上稲作も不作であったから、穀類高値となり、年の暮以来村民の生活困難なる者が多かったので、正米拾六俵を代官所へ差出した。

一、去年麦作大凶作之上、稲作不十分候に付、諸国穀類高値に相成り、暮以来端々難渋致す者不ㇾ少、御上急々御介抱被仰付之上成立之者共助勢米差出可ㇾ申旨、御代官所より御沙汰に付、左の通り御代官所へ差出候、

一、正米　拾六俵

右価弐貫弐百九拾六匁

浮穴郡大庄屋格
河之内村
近藤林兵衛

右によって、文久三年十一月藩よりその功を賞せられた。

文久二年江戸城本丸焼失及神奈川砲台築造のため松山藩に米三拾俵上納したので、同年三月十三日藩から

先達て御本丸依御焼失、御上金被遊并神奈川台場御普請御入

用之内へ差上物致候段、寄特之儀に付、小葵御紋付御上下壱
具下置、

右の通り賞せられた。

文久三年に松山藩は武器を新調することになり、その費用を各郡代官に命じて調達せしめた。林兵衛も浮穴郡代官の命によって、五百俵を上納している。

一、御代官所御軍器御調御入用之内差上米御沙汰に相成、左之
通差上候様村方へ申出置候事、
一、五百俵　代弐俵に付百五拾目替亥ゟ卯迄五ケ年納

右によって、五百俵を金に替え文久三年から慶応三年までの五カ年間に上納していたことが知られる。

元治元年松山藩は異国船防禦のため、三津浜・和気・堀江などの海岸に砲台を築くことになり、その費用調達を各代官に命じた。この時も林兵衛は米五百俵を差出したので、藩から賞せられた。

元治元子二月十日

浮穴郡大庄屋格
河之内村
近藤林兵衛

異国船防禦筋御手当御入用之内へ出銀致候段、寄特之儀に付、
四人扶持御増被下置、

とあるから、これも米を金に替え上納したものであろう。

慶応二年松山藩は幕府の命によって、第二回の長州征伐を決行することになり、慶応元年から軍費調達を各郡代官に命じた。その時の藩の趣意書によると、

御沙汰書

御上より

近来御公私御入用打続莫大之御借財成候処、此度若殿様（定昭）御進発之御供被為蒙仰候に付而は、又候御入費莫大之儀に有レ之候処、地盤御借用続之儀、最早上方御借用之御手段も無レ之必至と御差詰御当惑至極に被為在、此上は御家中郷町一統之力を御頼被成候外無レ之候得共、御用米等之儀は、甚御厭被遊不被仰付候含に者候得共、御進退御必窮之御場合無二御拠一内間相応に取渡り候者共へ金銭米調達被仰候、委細之儀は御奉行より可二申談一候間、御苦慮之段能々奉恐察、一統申合厚可申諭候、尤御用米も不被仰付候而は御済被遊兼候御場合に候得共、当節下方は成尺御育置被遊度、就中百姓之儀は御国力之御根本に付、別而御撫育も被遊度思召に候得共、御手之不被届候段、御不本意に思召候程之儀に付、冨有之向より御借用被遊、拾ケ年間元居利分御下け被下、拾ケ年後五ケ年割利付に而元金銭米御返済被成下候間、此段深奉恐察、相応貯有之向へは調達之儀、成尺出精致候様可申論候、猶又一統御用米下被仰付候御恵養之御上意厚相弁、弥耕作相励聊も心得違之儀無レ之様、精々才許可致候、

と書かれ、藩から各郡代官を経て村々に下ったので、林兵衛は二千俵を差出すことになった。

奉願口上

一、弐千俵　　差上米

但し御定値段弐俵に付百五拾目替にメ米は寅歳ゟ辰歳迄
　三ケ年割毎歳三月切五拾貫目宛上納可仕候、
右者此度被仰出御趣意奉恐察、御国恩為冥加差上申度奉存候、
尤前々より貯等御座候訳には無ニ御座一如何にも分外之儀にも
奉存候得共、御場合柄奉恐入格外心配を以差上仕度奉願上候、
乍レ併私共是迄度々過分之結構上仰付難レ有仕合奉存候此上御
称嘆等之内願更々無ニ御座一、別而格式等昇進被仰付候ては、
身分不相応却て身之為不レ宜奉レ存候間、右等御憐察之上御称
嘆に不レ抱御受納被仰付被下候はゞ難レ有仕合奉レ存候、此段
宜敷上仰上度上下候

以　上

慶応元年丑年十月

浮穴郡河之内村
近　藤　林　兵　衛

以上によって、近藤家の富豪ぶりを窺うべく、また一面松山藩財政の窮乏を知ることができる。

慶応元年、こうしたあわただしい内にも、林兵衛は養母に対する孝養を忘れず、十一月五日に冬至の賀宴を開いて、一家一門を招いて盛大な宴を催して、母を慰めている。

十一月五日冬至之賀御母上為孝養百味飲喰差上候、
冬至の賀に添へて御母きみをむかへ奉り拙き百味の飲喰を
進め奉るも、百とせの春を迎へて末子孫のうしろ垣とも願
はしく祈り侍りて、
頼母しきつぼみの数や寒の梅　五　揚
雪はきて老さき深し萬年青の実　巴　文
吹あるゝ風もいとはで梅の花　巴　文
幾代の春をかけて咲くらん
相ともに春まつ炬燵はなしかな　吾　暁

以上によって、林兵衛のゆかしさを窺うことができる。

慶応二年六月第二回長州征伐が行なわれ、松山藩兵は幕府の命によって、大島郡に出征することになった。林兵衛は藩主の武運長久の祈祷、出征の村方出身新足軽及び郷夫等の祈祷などで多忙をきわめた。近藤林兵衛是正の略歴によると、

一、金壱両　長州御出勢に付御武運長久のため味酒社御祈祷
　料
一、金壱両　右同断、村方新足軽並郷夫中除災御祈祷金毘羅
　社御祈祷

また出征の新足軽及び郷夫に餞別をそれぞれ渡している。

一、金四両　餞　別
　　新足軽阿部太助・近藤林作・中島亀治
但し　弐朱宛
　　新足軽近藤繁平　郷夫次五衛門
　壱　歩
　　作治悴清太郎　与五郎悴大次郎　利左衛門
　弐　朱
　　良作　三兵衛　米次　磯八
　　佐吾衛門　十蔵悴末吉　和助
　　平六　多八　吉郎平　藤助
　　源助　徳次　三郎衛　仙次
　　孫衛　作平　才次　啓蔵

以上によって当村の従軍者を知ることができる。この年は凶作の上、諸式高値となったので、村内に生活の困窮している者が多かった。そこで八百二拾一匁九歩八厘を村から持より支出する計画であったが、十二月に配分することができなかったので、林兵衛から年の暮に玄米五升、白米五斗をそれぞれの貧困者に配分した。

慶応四年（明治元年）一月三日鳥羽・伏見の戦後、朝廷より追討の令が発せられ、朝敵の汚名を受けた松山藩は、前藩主勝成・定昭が嘆願書を提出して、松山藩の立場を朝廷にのべ、異心のないことを誓うとともに、常信寺に退居して、謹慎の意を表した。土佐藩は朝旨によって一月二十八日軍兵を松山に入れ、松山城を領した。林兵衛はこの事を心配して藩主の武運長久祈祷を四カ所で行った。

慶応四辰年改元明治元年

正月二十八日土州様御人数御入込当時御同藩御預りに相成候

右に付、早々御前躰上為遊御蒙候様、並御国家安全御武運長久御祈祷、左之通四ケ所へ相頼申候、

一、御祈祷米三俵　　石手寺

但し正月二六日使を以頼遣候処、翌二七日より二月四日迄一七日祈念、尤実は二月一八日まで三七日修行に預り候事、

一、右同断　　味酒社

但し右同断一七日祈願、大宮司へ頼出、

一、御祈祷米三俵　　金毘羅寺

但し正月二六日より二月三日まで一七日祈念、尤同寺自力御祈祷相果、御順立候まで修行致候、

一、同　　壱俵　　惣河内社

氏太夫佐伯筑前正へ頼出候

かくて藩主父子の誠意は当局の認めるところとなり、藩主定昭は当面の責任者として蟄居を命ぜられ、前藩主勝成が藩主再勤を命ぜられた。林兵衛の忠誠は藩から認められ、

浮穴郡大庄屋格

河之内村　近藤林兵衛

此度御国難ニ付御安危筋深く御気遣申上、格別寄特之儀有之候趣、相聞神妙之至ニ付、加毛肴御酒包扇子上ゟ下ヶ置、

右の通り賞せられた。

明治三年八上旬林兵衛事近藤林内

御聞済相成候様申来

右の通り書かれているから、通称を林内と改めたものであろう。明治七年家督を養子甚四郎へ相続せしめて隠居したが、明治十二年九月四日養子甚四郎が病死したので、翌一三年再相続した。同一五年村内貧困者に米四石を施し自立の元備とした。

一、米四石

難渋者肥苅飯米配与之儀に付願

右者先年立置候村方難渋者肥苅飯料豫備米利子之内例年弐石八斗宛御酒分相成来候処、本年ゟ右員数之通御増額上成下度、尤人員配当向之儀者御協議之上可然御施行可上下候、以下此段上申候也、

明治十五年五月十九日　近藤林内

戸長御中

天保十五年に元備として置いた米弐百俵の利子弐石八斗を四石に増額して配分するようにしたものであろう。こうして数年にわたる貧困者救済に尽したことは実に珍らしい功績と称すべきである。彼はまた教育の重要なことをさとり

寄附金之儀に付願

下浮穴郡第一番学区河之内村培達校資金之如き、未た不充備にして諸端足れりとせず、希は之を補ため左之金額本年四月当村戸長役場へ相渡有」之に付、其まゝ学資に引直し寄附仕度、御認可被成下度此段相願候也、

一、金百圓　十五年四月即納

下浮穴郡河之内村
近藤林内 印

下浮穴郡長西川武久殿

また同年四月河之内村培達学校分校へも寄附している。

下浮穴郡第一番学区河之内村培達分校資金之如き未不充備にして、……以下略、

金四拾円　十五年四月即納

下浮穴郡河之内村
近藤林内 印

下浮穴郡長　西川武久殿

右によって彼の教育に対する熱意を窺うことができる。明治十九年新国道が開さくされることになった時、彼は率先して献金している。

一、金四拾円也

右は今般新国道開さく費資金献納仕度に付、出願仕候処、御聞届相成候に付、前書之額金献納仕度候間、此段御届仕候、

以上

明治十九年六月　下浮穴郡河之内村　近藤林内

愛媛県令　関　新平殿

右によって、彼の公共事業に対する熱意を窺うことができる。明治二一年一月病みて没する。享年七十歳。

江戸時代から現今までの間に、幾多の富豪と称する者が出現したが、その多くは守銭奴の輩である中に、一生にわたって徳を積んだ人は実に珍らしい存在といわなければならない。公共や社会のため彼の投じた私財は夥しい額である。彼の没するや、村民ひとしく彼の徳を慕うて嘆き悲しんだという。真言宗本山は特に菩薩号を贈り、その碑の撰文は高志大了僧正で、三輪田米山が揮毫したものである。

褒章録

十二月（宝暦四年）左の通可申渡旨被仰出

（勧善録）

久米郡川之内村山伏

宝積院

父母存生の内遂孝行

且又師匠浮穴郡南方村山伏教学院を大切に致し実儀を尽し候に付為御褒美二人扶持被下置此後年頭御礼被為請

右宝積院両親存生中孝養を尽し殊に師匠浮穴郡南方村教学院へ親同様貞実に相仕へ、教学院晩年眼病にて歩行不自由の処年々再三度程手を引自宅へ連れ帰り四五日程づつ逗留為致懇に相慰め病中抔深切に介抱いたし、死後二代教学院へ段々相願ひ野辺送りの品迄も相贈り格別篤実の趣本山へも相聞為褒美本山備前児島報恩院より権大僧都法印免許ありしとぞ。

（松山叢談第七の上）

宝暦十一年

御代替に付巡見使左の通御城下到着（某家記）

人名　略

勧善録附録曰今年将軍家御代替に付諸国御巡見使四月下旬松山領御通行の節於当領孝心者有無の儀御尋に付左の通書付を以郡奉行より差出之下賤の身として其名を官使に達する事実に忠孝の大徳なり

松山領孝心者（十四名中川内町関係分）

久米郡川之内村　山伏　**宝積院**

浮穴郡井内村　百姓　**清七**

浮穴郡南方村佐七郎召遣　**九郎兵衛**

録者云　以上十四人の事実文言に詳略あれども前記有之に付略之

（松山叢談第七中）

（定喬時代）

伊予孝義録（伊豫史談第八〇号以後、西園寺官刻孝義録中から伊豫の分を抜萃したものの中）

孝行者	井内村	百姓	**清七**	四十三	宝暦六年	賞
奇特者	則之内村	百姓	**伊兵衛**	五十七	宝暦六年	褒
忠孝者	南方村	百姓佐七郎下男	**九郎兵衛**	三十七	宝暦六年	褒
忠孝者	北方村	医者	**徳永寿三**	六十二	安永四年	褒
孝行者	川之内村	百姓	**長八**	三十	天明八年	褒
孝行者	松瀬川村	百姓	**次郎左衛門**	四十六	天明八年	褒
孝行者	〃	次郎左衛門妻	**よね**	三十八		誉
家内睦者	北方村	百姓	**浅四郎**	六十二	天明八年	褒
忠義者	北方村	組頭杢左衛門下男	**兵次**	二十八	天明八年	褒
孝行者	川之内村	庄屋格	**四郎右衛門**	六十四	天明八年	褒

寺院録

（続伊予温故録）

安国寺

延宝六年調松山領寺院録に曰

久米郡洲之内村、京妙心寺末方松山安国寺、暦応二年将軍足利尊氏公河野対馬守通盛同志建立、北の尾崎麓に大三島宮勧請同時也

是当寺別当也。

応観寺

延宝六年調松山領寺院録に曰

浮穴郡南方村北方村、匡王寺末応観寺大元尊別当。

金毘羅寺

延宝六年調松山領寺院録に曰

久米郡川之内村、高野山高祖院末金毘羅寺、嘉吉二年十月十日名越城主河野左馬頭通興諱通智再建立称名院と号す。慶長三年十月名越山金毘羅権現降座。別当金毘羅寺と改称す。

大興寺

延宝六年調松山領寺院録曰

久米郡北方村、京妙心寺末大興寺、建長元己酉年十一月十二日勅詔国守河野伊与守通久得能冠者太郎通秀同志伽藍建立、余戸郷川上庄寄附、嘉吉二年二月得能左馬頭通智伽藍再建並に鎮守堂共。

匡王寺

延宝六年調松山領寺院録に曰

久米郡北方村、高野山高祖院末大宝坊匡王寺、大宝二年正月創立又天平十二年三月行基律師国司宇智宿弥玉純建立、元弘四年二月十一日国守河野伊与入道道治諱通村公再建、天文元年六月十七日浮穴殿再建寺領囲庄寄附之状存于今、同村岡之坊右匡王寺末右同時建立総て準之。

上福寺

伊予旧蹟志に曰

久米郡余戸郷野口保松瀬川岡有精舎曰北斗山釈迦院上福寺古伽藍宏麗而置子院十二舎号

地蔵本坊　金蔵上坊　不動下坊　安楽坊　宝蔵坊　琉璃坊

多聞坊　東坊　西坊

宝来寺　長福寺　菊泉寺

聖武帝御宇天平十二庚辰年三月八日詔行基律師　与国司散位乎致宿弥玉純二代共図而肇覚矣所也

行基自作本尊釈迦、多聞、不動三尊丈六之像安置焉

奉寄進伊豫国久米郡余戸郷野口保松瀬川村

大元社別当北斗山境内並水田合十二町四経彷示段別　放免之事

右者為天長地久朝敵退散願成就宝祈安泰

抽丹誠可被致祈念之状如件

弘安四年辛巳閏七月二十七日

備後守越智宿弥通純

上福寺塔頭衆徒中

又曰

元弘三年五月河野又太郎通綱公豫州総領補任安睹之院宣並御教書賜下に付当山御帰依厚く之を以て墨附口文賜下其状に曰

奉寄進寺領之事

合五十貫段別放免之地

豫州久米郡余戸郷野口保内松瀬川大元四経彷示山林竹木赦免

右依祈願成就之処為北斗山本尊燈明並金剛般若経読誦永代令寄附者也経子孫之世不可有違乱仍而如件

元弘三癸酉年十一月十三日

河野備後守越智宿弥通綱

上福寺地蔵本坊　覚円上人

延宝六年調松山領寺院録に曰

久米郡松瀬川村高野山金剛三昧院末

福寺塔頭瑠璃蔵坊　安楽坊　地蔵坊　宝蔵坊　東坊　西坊

天坊　大宝坊

天平十二年二月八日建立　行基律師開基上坊とも号す　久安四年二月二十二日河野伊豫守通清伽藍再建、元弘四年正月十一日河野備後守通綱再建し寺領寄附、川上庄内、永録元年十月二十三日河野一族平岡遠江守通倚伽藍再建地頭石高千石墨付賜之故位牌建之

大興寺　北方村　（豫陽古蹟俗説）

建長元酉年禅宗克仁和尚開基、第二代無徳和尚は唐僧なりしが文保元巳年百八十歳にて六月一日万念寺と云処にて入定あり、印に椎の木茗荷を植置べし歳毎に此頃は実成べし供物にすべしと有、果して翌年より其実成て中興まで供物とせしよし、然るに右椎の木は古木と成て凡五尺回り程も有しとろ木と成今は其彦ばえにて若木と成ぬる故にや六月実成事もなしめうがは今も是あるよし

（松山藩寺院録）

修験

当山方　　末派真言

久米郡　河之内村	内山永久寺	同行	尊明院
	玉林院	〃	正覚院
	円通寺	〃	宝正院
	尊明院	〃	文珠院
	宝正院	〃	常覚院
則之内村	尊明院	〃	成就院
	〃		宝城院
	〃		大行院
松瀬川村	正覚院	〃	宝蔵院
	宝蔵院	〃	永福院
	〃		行宝院
北方村	大宝院	〃	理正院
	理正院	〃	胎蔵院
井内村	万蔵院	〃	胎宝院

寺　院

真言	三味院	松瀬川村	上福寺
	高野高祖院	河之内村	金毘羅寺
	高野高祖院	北方村	匡王寺
	匡王寺末	南方村	応観寺
	匡王寺末	北方村	岡之坊
禅	妙心寺末	北方村	大興寺
	〃	南方村	南昌寺

豫州久米郡名越邑金毘羅寺来由記

夫当寺者往昔号声明寺、僅容膝小院也。然慶長六辛丑年三月廿八日夜、於当郷鎮守八社明神之社頭有鳴鼓音、初人以為小児之戯弄、無敢怪問之者。廿九卅日之夜其音未止時、官家有喪事、領内禁鳴器、雖然音鼓尚未止。於茲、荘司鞍瀬新右衛門招禰宣並村民雖問其取以渾無知之者、窃使人窺之、宵々無跡。於此相倶議曰、若是非狐猩之妖怪、定是可所神慮令然也。宜奉帛幣奏神楽奉慰神慮以祈転禍為福也。各詣神殿恭設祭奠以祈事由神事将終、禰宣某不図悶絶粳須躃起座曰我是讃州金毘羅第一之王子也。欲住此山以振威験。言訖恍然如夢覚。諸人怪之問所以、然答曰前後無心一以不覚焉。于茲知権現託于巫祝鎮座此山、諸人感歎敬信鎮守社辺仮宮構小祠、祭奠崇重者凡八九ケ年矣。（今世俗相伝此地云古社）于時住旻感権現威霊朝暮詣権現宝祠経礼拝精修無虧、或夜長旻睦眠将覚、長六尺有余山伏相者立枕辺呼長旻々々、旻蹶然起立云呼我者何人何濫入我寝室耶。答曰我是金毘羅之神也。我降臨此峰以後甘師之法味者也、年尚矣。故今来欲謝之。此山繁栄当在于近、我元垂跡於松尾之坂、自今以後須弥山於奈尾改寺於金毘羅、言訖忽失所在矣。旻感喜銘肝啓之司官、遂達国侯加藤左馬助嘉明公厳聴豪霊祠営構之厳旨、然奇哉、令命未降国中人民来名越邑猶如雲霞。村民怪之問其所以、人皆喁々曰、三日以前了結異人来告曰久米郡名越邑造営金毘羅神祠各来運土木可以扶助云々。繹其時刻村々家々皆以一時也、人仰神化無不驚嘆者、乃相攸松尾之嶺苅茠榛棘鉱地闢基搬、石運材不月営建宝祠又旻師曽所親拝感真容令仏工某彫刻先以歓請神収新剛胸間奉安置焉。尋一新拝殿華表堂舎僧坊等諸宇也。落慶之後、加藤君詣此山神前忝敬礼拝畢。将帰戯曰勝地名山得佳於戯神者勝乎吾言未畢有神扉将排之勢国君恐懼懺謝倍感霊威矣。時国君之大夫人臨産不安百方無効医巫拱手、於茲瑪寺主長旻祈願権現、忽得安産、爾以来神威日夜増長信心慕敬輩所願無不成弁焉。抑金毘羅神者以讃州象頭山為本、故寺主長旻以権現降臨当山霊異啓讃州金毘羅之山務其書翰往復今尚在於経庫焉。夫霊神応世示形也、必待時由人也、今権現振此山威験時之与人偏是長旻精修勤念所感得也。因禰旻師為当山中興開祖者職此由也。然享保三戊戌牟罹回禄変寺家伝来宝器並当山勃興由来紀等多為灰塵、是以雖古紀可考僅以村老口碑与我師傳聞記其概略以賂後昆者也。

享保十九甲寅暮春下院

金毘羅寺現住　長雅謹識

年表

時代	年代	年号	日本	愛媛県	川内町
縄文時代			石器や縄文土器を用いたて穴の住居をつくっていた		
弥生時代			大陸から青銅や銅の道具が伝わった稲などの作物をつくりはじめた		
古墳時代	五九六		大和を中心に次第に国がまとめられていった 仏教が日本に伝わった	聖徳太子道後温泉入湯	川上古墳
飛鳥奈良時代	六四五	大化 一	大化の改新	国府がおかれた	
	六九七	文武 一			滑川白山神社社殿造営
	七〇一	大宝 一	大宝律令制定	伊予国司田中法磨	
	七〇二	大宝 二			北方医王寺行基開山、神亀三年聖武天皇の詔にて官寺となり大宝坊と称す
	七〇四	慶雲 一			吉久長泉寺行基開基
	七一〇	和銅 三	奈良に都が定められた		
	七一二	〃 五			保免三島神社（玉純大三島から二神を勧請し大山積社に合祀）
		〃			氏宮三島神社（玉興大三島から二神を勧請し大山積社に合祀）
	七一三	〃 六			井内善城寺（玉興玉純父子欽行）
	七二八	神亀 五		石手寺（安養寺開創）	松瀬川上福寺（玉純建営）

時代	年代	年号	日本	愛媛県	川内町
		亀神五			河之内惣河内神社創立
	七三五	天平七			北方揚神社再建立
	七四一	〃一三		国分寺が今治桜井にたてられた	
平安時代	七九四	延暦一三	京都に都が定められた		
	八〇二	〃二一			惣河内神社河之内郷総鎮守となる
	八〇三	〃二二			北方三島神社、地方の尊崇あつくなる
	八〇八	大同三	天台宗、真言宗はじまる		滑川光明寺（弘法大師開基）
	八二四	天長一			井内吉井神社、春江の宿弥浮穴の千継が氏神として崇敬す
	八九一	寛平三			
	九〇一	延喜一	菅原道真大宰府へながされた		
	九二三	延長一			南方森正八幡神社（伊予守息方宇佐から勧請す）
	一〇一七	寛仁一	藤原道長大政大臣となる		
	一一六三	長寛二			河之内金毘羅寺創建
	一一八〇	治承四			平氏の家人九騎峠に自刃す（九騎峠）
	一一八二	寿永一			松瀬川五柱神社（河野氏社殿改築）
	一一八五	文治一		河野通信道後七郡の守護となる	
鎌倉時代	一一九二	建久三	源頼朝が鎌倉に幕府を開いた		
	一二四九	建長一			北方大興寺、河野通久建立
	一二五六	康元一	北条時頼最明寺にて薙髪す		則之内鎌倉堂の伝説
	一二七四	文永一一	元軍が九州へ攻めてきた		
	一二八一	弘安四		河野道有が弘安の役に功をたてた	

室町時代

一三三三	元弘 三	建武の中興	星の岡の戦	建武年間河野氏井内小手滝城を築く
一三三八	延元 一	足利尊氏が室町に幕府をひらいた		
一三三九	暦応 二			則之内安国寺、河野通盛建立
一三四〇	興国 一		懐良親王中島に滞在された	土谷三島神社、大山積社から勧請
	室町上期			土谷亀甲城、保免鳥屋ケ森城を河野氏がつくる
一三九五	応永 二			吉久吉井神社、熊野から勧請
	〃			南方熊野神社、高須賀尭倫が熊野から勧請
一三九八	〃 五	金閣寺ができた		
一四二七	〃 三四			南方川上神社、河野通久の心願にて現地に奉遷造営
一四四三	嘉吉 三			河之内名越城主名越通重自害す
一四六七	応仁 一	応仁の乱おこる		
一五三四	天文 三			医王寺厨子柝木に「天文三年正月二十八日薬師如来」の書跡があった
一五四三	〃 一二	オランダ人が鉄砲を伝えた		天文年間戒能伊賀守通運、小手滝城で大野利直と戦って利あらず、大熊城へのがれて居城とする
一五四九	〃 一八	キリスト教が伝わった		
一五五五	弘治 一	厳島の戦	伊予の水軍毛利氏をたすける	
一五六〇	永禄 三	樋狭間の戦		永禄年中、戒能備前守通盛、小手滝城に居る

時代	年代	年号	日本	愛媛県	川内町
安土桃山時代	一五七三	天正 一	足利氏ほろぶ		
	一五八四	〃 一二	長曽我部元親四国を平定す		
	一五九五	文禄 四		菊間瓦ができはじめた	
	一六〇〇	慶長 五	関ケ原の戦		
	一六〇一	〃 六		足立重信が伊予川(重信川)と石手川の改修をはじめた	
江戸時代	一六〇二	慶長 七		加藤嘉明松山城を築く	
	一六〇三	〃 八	徳川家康江戸に幕府を開く		
	一六〇七	〃 一二			北方岡の坊、長伝開基
	一六三四	寛永一一		中江藤樹大洲藩を辞す	
	一六三五	〃 一二		松平定行松山藩主となる	
	一六三七	〃 一四			南方応観寺へ秀誉師入山す
	一六三九	〃 一六	鎖国を行なう		
	一六四二	〃 一九		松山城天主閣を五層から三層に改築	
	一六八七	貞享 四			松山藩士矢野五郎左衛門源太、桜三里に桜樹八、二四〇本を植えた
	一六九〇	元禄 三		別子銅山住友経営	
	一七〇三	〃 一六		松山藩あずけの赤穂浪士大石主税ら切腹	

時代	西暦	和暦	一般事項	松山・伊予の事項	地域の事項
江戸時代	一七二八	享保一三	徳川吉宗の享保の改革		
	一七三二	〃 一七		義農作兵衛麦種に殉ずる	虫害、干害あり
	一七七五	安永 四		砥部焼はじまる	
	一七八九	寛政 一	松平定信の寛政の改革		
	一七九三	〃 五			南方南昌寺、慧文創設
	一八〇三	享和 三		鍵屋カナ伊予絣をはじめる	
	一八一八	文政 一			近藤林内生れる
	一八二八	〃 一一		松山藩学明教館創設	
	一八三六	天保 七			鎌倉堂、北条祠之碑文
	一八三七	〃 八	大塩平八郎の乱		
	一八五三	嘉永 六	アメリカ軍艦浦賀に来る		
	一八五四	安政 一		再建中の松山城竣工	安国寺本堂、柱礎安鎮祭 三軒屋焼はじまる。（嘉永七年頃が最盛期との説もある）
	一八五八	〃 五	開国をなす		
	一八六〇	萬延 一			南方吹上池の拡増
	一八六五	慶応 一		高杉普作道後に来る	
	一八六七	〃 三			北方菖蒲堰の定法書改め

時代	年代	年号	日本	愛媛県	川内町
明治時代	一八六八	明治一	明治維新		
	一八六九	〃 二		藩籍奉還、久松勝成松山藩知事となる	
	一八七一	〃 四	廃藩置県	松山県となる 農工商人苗字が許された	
	一八七二	〃 五	徴兵令発布	石鉄県となる	久米郡北方村、松瀬川村、浮穴郡南方村、吉久村、井内村、則之内村、河之内村、戸長役場ができる 則之内焼をはじめたという
	一八七三	〃 六		愛媛県となる	
	一八七四	〃 七			川上郵便扱所はじまる
	一八七五	〃 八		松山郵便局と改称	
	一八七六	〃 九		本県御用愛媛新聞第一号発刊（翌年海南新聞と改称）	
	一八七七	〃 一〇			南方中之町へ松山警察署川上分署を置く
	一八七九	〃 一二	教育令公布		
	一八八二	〃 一五			コレラ流行　神社で祈祷
	一八八四	〃 一七		松山歩兵第二十二聯隊創立	
	一八八六	〃 一九	学校令発布		
	一八八八	〃 二一		役所間に電話が開通	北方尋常小学校、道向尋常小学校松瀬川簡易小学校できる
	一八八九	〃 二二	大日本帝国憲法制定 町村制実施	城北練兵場ができた 松山、三津間汽車開通（一〇、二八）	久米郡川上村、下浮穴郡三内村となる

明治時代

一八九〇	明治二三	帝国議会開会 教育勅語発布		川上尋常小学校に統一 井内尋小、則之内尋小、河之内尋小、土谷尋小できる
一八九一	〃　二四		八幡浜二宮忠八、飛行機で三十米とぶ	正岡子規、白猪滝をみる
一八九二	〃　二五			松瀬川尋小、滑川尋小できる
一八九三	〃　二六		風水害あり、片岡侍従差遣	三島神社裏重信川決壊、流失四〇町歩 北吉井村、川上村、三内村組合立川上高等小学校を南昌寺に開く
一八九四	〃　二七	明治二十七、八年日清戦争	消防組ができた 道後温泉本館改築	
一八九五	〃　二八			夏目漱石、白猪滝をみる
一八九七	〃　三〇			温泉郡川上村、三内村となる
一八九九	〃　三二		伊予鉄道が横河原まで開通した（一〇、四） 別子銅山崩壊、侍従差遣	
一九〇一	〃　三四			安国寺に三内高等小学校ができた
一九〇二	〃　三五		湯山に水力発電所ができた	三内村長宇和川宇太郎東谷・西谷の里道改修
一九〇四	〃　三七	明治三十七、八年日露戦争	松山にロシヤ俘虜三、二〇〇人を収容する	川内町戦死二五名 （滑川一、三内一三、川上一一）
一九〇六	〃　三九		高浜港開港式	三内第一、三内第二、三内第三と尋常高等小学を改称す
一九〇八	〃　四一		松山区裁判所川上出張所が設けられた	

時代	年代	年号	日本	愛媛県	川内町
大正時代	一九一三	大正 二		松山に映画館ができた	川上古墳が発見された
	一九一四	〃 三	欧州大戦（第一次世界大戦）	ドイツ人俘虜を松山市公会堂に収容する	川上村役場新築
	一九一五	〃 四		米穀検査規則公布	仙波茂三郎、水力電気を恵雲に起す
	一九一六	〃 五		勝田主計大蔵大臣となる	
	一九一八	〃 七	シベリヤ出兵		
	一九一九	〃 八		官立松山高等学校創立 横河原にはじめて木橋ができた	久万の米暴動、風邪流行
	一九二一	〃 一〇		各所に小作争議おこる	
	一九二二	〃 一一		私立松山高等商業学校創立	近藤金四郎、県道黒森線達成実行会長となる。雹害あり
	一九二三	〃 一二	関東大震災		
	一九二四	〃 一三		勝田主計大蔵大臣となる	
	一九二六	〃 一五			井内共存会（地主小作協調組合）結成
昭和時代	一九二七	昭和 二		国鉄予讃線松山まで開通（四、三） 白川義則陸軍大臣となる	川上村自作農奨励組合ができた
	一九二八	〃 三		勝田主計文部大臣となる	
	一九二九	〃 四		愛媛県庁本館竣工	
	一九三〇	〃 五		横河原橋ができた	
	一九三一	〃 六	満州事変おこる		

昭和時代

一九三四	昭和　九	室戸台風	被害甚大　死者三七人	三内村役場新築、旱魃、雨祈祷
一九三六	〃　一一		川島義之、陸軍大臣となる	
一九三七	〃　一二	日華事変おこる	松山永津部隊出征	
一九三八	〃　一三	国家総動員法公布		
一九四〇	〃　一五		松浦鎮次郎、文部大臣となる	
一九四一	〃　一六	太平洋戦争（第二次世界大戦）はじまる（一二、八）	松山放送局開局 翼賛統制の強化	
一九四三	〃　一八	国民服が採用された	風水害死者一二〇人、その他の被害甚大	則之内岡の山津波
一九四四	〃　一九			吉久オキチモズク国の天然記念物に指定される
一九四五	〃　二〇	終戦（八、一五） 総理大臣幣原喜重郎（一〇、九）	松山大空襲（七、二六） 風水害死者二六一人　被害全国一 アメリカ兵進駐	本大戦の戦死者四一三（滑川 二八、三内 一四七、川上 二三八） 大水害表川決壊、道向、吉久の水田流失
一九四六	〃　二一	総理大臣　東久邇稔彦（　） 農地改革 総理大臣　吉田茂（五、二二）	安部能成、文部大臣となる	昭和二十年の復旧しない河川、流失多く大水害となり水田六〇町歩に及ぶ
一九四七	〃　二二	日本国憲法制定 六・三学制実施 総理大臣　片山哲（五、二四）	公選知事　青木重臣	川上、松瀬川、三内の三新制中学校ができた。 共同募金はじまる
一九四八	〃　二三	総理大臣　芦田　均（三、一） 〃　吉田　茂（一〇、一五）		
一九四九	〃　二四	総理大臣　吉田　茂（三、一六）	復興大博覧会が松山で開かれた 愛媛大学（文理・教育）新設	
一九五〇	〃　二五	天皇陛下四国御巡幸 キジヤ台風	松山ＣＩＥ図書館ができた 警察予備隊松山訓練所が三津にできた	川上古墳、県史跡に指定される

時代	年代	年号	日本	愛媛県	川内町
昭和時代	一九五一	昭和二六	サンフランシスコ平和条約調印	高橋竜太郎、通産大臣となる 県知事久松定武（五、二）	国道十一号線改修同盟会ができた 農業委員会成立
	一九五二	〃 二七	総理大臣 吉田 茂（一〇、三〇）		地方教育委員会成立
	一九五三	〃 二八		第八回国民体育大会松山で開催。県立道後動物園ができた	三内有線放送電話開始 三内村忠霊塔建立（三、一九）
	一九五四	〃 二九	総理大臣 鳩山一郎（一二、一〇）	武智勇記、郵政大臣となる	台風あり
	一九五五	〃 三〇		砂田重政、防衛庁長官となる 県知事久松定武（一、三〇）	三内村国保直営診療所新築 三内村、川上村合併して川内村となる（四、一五） 近藤金四郎翁胸像除幕（九、一五）
	一九五六	〃 三一	国際連合加盟 総理大臣 石橋湛山（一二、二〇）	横河原橋竣工（五、二三） 県道松山柚川線開通（三、一八）	川内橋竣工（六、九） 町制実施（九、一）滑川及明河の一部（九騎海上）編入合併（九、一）
	一九五七	〃 三二	総理大臣 岸 信介（二、二五） 南極探険 国道十一号線直轄工事起工式		笠坪池補強工事 川内中学校第一期工事起工式（一一、二一） 三軒屋橋、板屋ノ子橋落成 川内公園ができた（七、一） 忠霊塔に全町英霊合祀、玉垣、常夜燈竣工
	一九五八	〃 三三	総理大臣 岸 信介（六、一）	松山観光ゴルフ場開場（一一、三）	川内中学校舎落成して実質統合（一一、二二） 天神・鳥ノ子線改良工事
	一九五九	〃 三四		菅野和太郎、経済企画庁長官となる 県知事 久松定武（一、二八）	
	一九六〇	〃 三五		伊予鉄バス川内営業所開所（七、一三） 道前道後水利事業着工	大字滑川郷に大火あり（三、二〇） 菩谷池補強工事 川内公園線町道新設 川内中学校体育館竣工（一二、一〇）

昭和時代

一九六一	〃 三六		県林業指導所開所（四、一五）	川上小講堂落成（三、一三）
一九六二	〃 三七	国道十一号線開通（一二、一）		滝ノ下橋、永寿橋落成 川内温泉竣工（一〇、一）
一九六三	〃 三八		県知事　久松定武（一、　）	長雨つづき麦の収穫殆んど皆無 東谷小学校本館落式（三、一七） 中央公民館、母子センター、国保直営診療所、中学校寄宿舎、第一期町営住宅落成（四、三）西谷小学校講堂等落成（八、一） 町道川上線舗装完了、北方中央線拡張、町道中野線完成
一九六四	〃 三九	総理大臣　池田勇人（七、　） 第一八回国際オリンピック東京大会（一〇、二〇） 総理大臣　佐藤栄作（一一、九）	道前道後発電所運転開始 増原恵吉　行政管理庁長官となる ゴルフ場第二期工事落成（一一、一三）	中学校プール、第二期町営住宅落成（六、二八） 梅谷林道起工式 伊予鉄バス北方線開通（一〇、一〇） 仙波秀一翁坐像除幕（三、二九）
一九六五	〃 四〇		川内警察官派出所新築竣工（四、六） 松山博覧会（三、二〇—五、一〇） ＩＬＯ委員調査来県 面河ダム竣工（四、四） 伊予鉄森松線廃止（一二、一）	大雪、川内平地部で三〇糎、学校三日間休校（一、一九） 川内防犯協会結成（三、一七） 十週年記念事業（一一、一三）
一九六六	〃 四一	台風二十六号関東地方大被害（九、二三〜二四） （死者行方不明　三一八）	全日空航機事故（死者五〇） 国立松山ガンセンター開設（一〇、一三）	川上小学校プール開き（七、二九）
一九六七	〃 四二	佐藤栄作第二次内閣（三、　）	県知事　久松定武（一、二八） ＮＨＫ川内ＵＨＦテレビ局開設（三、一五）	

跋

昭和四十年の春のある日、大窪町長から、新町が発足したのが、昭和三十一年の九月一日からだから、今年で満十年になる。この十年でわが川内町は大きく前進した。これみな町民各位が一致団結して精進努力せられた結果である。そこでその前進の跡を記録して、「川内町発展十年史」と云ったような書物をつくりたい。先生、さきの「川内町誌」の因縁もあることだしするから、こん度の「十年史」もあんたが編集してくれませんか。との電話があった。私、大窪町長のあの生一本さと、熱心さとにはいつも敗ける。「やりましょう」と、即座に返答した。

編集主任には加藤栄安さんになってもらった。加藤さん以外には別に委員を頼まないで、役場の係り係りの人にその係りの資料を出してもらうことにした。

ところが、この仕事。無限に連続する時の流れの中にある一時点を切って、そこから始め、またある一時点までで仕切るのであるから、どうも始末におえない。まとまりが悪い。うまく出来そうにない。

なおただ「十年史」として、この十年間の事実と統計とを書き出しただけでは、索莫として蠟を嚙むようなものになってしまう危険がある。それで、「十年史」に「外篇」と云ったようなものをつけ加えて、さきの川内町誌以後に発見された古文献と、その後、人々によって書かれた論文をのせることにして、やっと「十年史」に多少の潤いをつけることが出来た。

だいたいかくの如くにして一通り原稿がまとまったのが昨年の六月である。

印刷は「町誌」をやった福新印刷所に頼んだ。書物の体裁も「川内町誌」と同じ型にすることにし、書名もまた「続川内町誌」として、それに「川内町発足十年史」と云う副題をつけることにした。

かくの如くにして、いよいよ印刷にとりかかったのであったが、原稿の中に訂正しなければならないところを発見したり、写真の中に写真版にならないものがあったりして相当手間と時間をくった。

大窪町長にも、町民各位にも、すまんと思いながら、どうすることも出来ないので、私たち二人、いらいらしてばかり居ったのであるが、やっと最近になって出版の見透しがついた。

いくらひいき目に見ても、良く出来たとは思えないのであるが、一応この程度で我慢をしていただきたく、皆様の御寛容を切にお願いする。

昭和四十二年三月二十日

北川淳一郎

昭和四十三年五月二十日印刷
昭和四十三年五月三十日発行

川内町

印刷所　合資会社　福新印刷所
松山市本町三丁目三ノ三